

上前原遺跡第 2 次発掘調査報告書

KAMIMAEHARA SITE
The Excavation Report of Ancient Tumulus,
Kamimaebara Site in Suitama , Japan
March 2006
Kounan Town Board of Education
Suitama Prefecture, Japan



2006

埼玉県大里郡江南町教育委員会



上原遺跡航空写真（2003年2月26日撮影）



上前原遺跡調査区垂直写真（2003年2月26日撮影）

序

緑と清流の自然環境に恵まれた江南町は、埼玉県指定史跡である「塩古墳群」や、踊る埴輪に代表される「野原古墳群」を始め、数々の出土品等も全町にわたって発見され、生活環境に適した地として古代から栄えていたと思われます。

今回発掘調査いたしました「上前原遺跡」の一部250㎡からは、縄文時代中期の住居跡2軒と古墳時代の終末期の古墳1基、中世の溝跡1が確認できました。

縄文時代住居跡は、中期加曽利E式期に属するもので、拠点集落の西端部にあたると推測されます。

古墳墳丘は耕作により、出土品は全体的に少なく、石室は平面胴張形河原石積で、石室内からは大刀1・金銅製耳環1等が出土しております。

調査の結果、遺構出土品を発掘することができました。これらの遺跡や出土品は、祖先が残してくれた貴重な資料であり、生活様式の推移を考えていくための価値ある文化遺産であります。これら先人の築いた偉大な文化遺産が、地域社会のために大いに活用されることを期待しております。

江南町では、平成18年度に江南町等の文化遺産の保存・活用を目的とした仮称「文化財センター」を建設する予定になっております。地域の皆様に愛され、親しまれ、活用される「文化財センター」にしていきたいと思います。是非、先人の残してくれた文化遺産に触れてみてください。

ここに調査の成果を報告書として刊行するにあたり、ご指導、ご協力を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、本書が郷土資料のための書として活用されることを願っております。

平成18年3月吉日

江南町教育委員会

教育長 馬 場 攻

例 言

- 1 本書は、平成14年度に実施した、埼玉県大里郡江南町大字千代字萩山南133-2番地に所在する上前原遺跡（県遺跡№65-022）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、平成14年度文化財関係国庫補助金補助事業における「町内遺跡発掘調査事業」として、江南町教育委員会がおこなった。
- 3 発掘調査および整理作業の期間は次のとおりである。

発掘調査期間 平成15年2月5日～平成15年3月5日

整 理 期 間 平成17年4月1日～平成18年3月22日
- 5 本書の作成は、森田が執筆・編集を行った。
- 6 調査・遺物写真撮影は、森田が行った。
- 7 調査区の地形・遺構測量は、(株)中央航業に委託した。
- 8 鉄製品の保存処理は(株)京都科学に委託した。
- 9 出土遺物・資料は、江南町教育委員会で保管している。
- 10 調査から報告書作成に至る過程で、以下の方々並びに各機関のご教示・ご協力を頂いた。厚くお礼申し上げます。

浅野晴樹 石塚三夫 鎌塚美良 永井智教

大里郡文化財担当委会 (株)京都科学 (株)中央航業 (株)東京航業研究所

埼玉県教育局生涯学習文化財課 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(順不同・敬称略)

凡 例

1. 本書に掲載した挿図の縮尺は、原則として以下の通りである。
- ・遺構 住居跡 1/60、古墳 1/150、石室 1/40、墳丘土層断面図 1/50
 - ・遺物 縄文土器(実測図 1/4、拓影図 1/3)、須恵器 1/4・土師器 1/3、石器(剥片・打製石斧・礫器・石鏃 1/2)、金属製品(鉄鏃・刀子・大刀・耳環 1/2)
- 上記以外のものについては、それぞれの挿図中に凡例を付した。
2. 古墳石室の各部位の計測箇所は下図の通りである。
- A—石室全長、b—玄門部を除く玄室長、c—玄門部を含む玄室長、d—玄門部を含む羨道長
e—玄門部を除く羨道長、f—奥壁幅、g—玄室最大幅、h—玄室と玄門部の連結部分幅、i—玄門部幅
j—羨道と玄門部の連結部分幅、k—羨道入口幅
3. 鉄鏃の各部位の名称・計測箇所は、下図の通りである。
4. 挿図中の方位は、地図上の北を指す。
5. 遺構図等にした水系レベルは、海拔高度（m）を示す。
6. 土器断面黒塗りの遺物実測図は、須恵器を示す。



石室計測箇所



鉄鏃各部位の名称

発掘調査・整理作業の組織

1. 発掘調査の組織（平成14年度）

主 体 者 江南町教育委員会

事 務 局 教 育 長 岡 部 弘 行

教育次長 大久保光司

主 査 新 井 端

〃 森 田 安 彦

発掘調査担当者 森 田 安 彦

発掘調査参加者 阿部早百合 大塚宏子 岡田君代 岡田クニ 佐藤幸男 杉田君香

関口 進 田中節子 藤 敏則 水野正和 村井美津子 守屋憲治

2. 報告書刊行事業の組織（平成17年度）

主 体 者 江南町教育委員会

事 務 局 教 育 長 馬 場 攻

教育次長 岡田恒雄

次長補佐 新 井 端

主 査 森 田 安 彦

整理作業担当者 森 田 安 彦

整理作業参加者 大島安子 小澤三春 志村モト子

目 次

○巻頭カラー ○序 ○例 言 ○凡 例 ○発掘調査・整理作業の組織 ○目 次
○図版・表・写真図版目次

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経緯…………… 1

第2節 発掘調査の経過…………… 2

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 上前原遺跡周辺の地理的環境…………… 3

第2節 上前原遺跡周辺の歴史的環境…………… 8

第Ⅲ章 発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要……………14

第2節 縄文時代の遺構と出土遺物……………16

第3節 古墳時代の遺構と出土遺物……………31

第4節 中世の遺構と出土遺物……………42

第5節 遺構外出土遺物……………44

第Ⅳ章 考 察

第1節 上前原遺跡出土加曾利E式土器の編年的位置付け……………52

第Ⅴ章 調査のまとめ……………61

付 編 鉄製大刀保存処理の概要……………62

○引用・参考文献……………65

○写真図版

○報告書抄録

図版・表・写真図版目次

〔図版〕

第1図 埼玉県 の地形..... 3

第2図 江南町 の地形..... 4

第3図 遺跡 の位置..... 5

第4図 遺跡 の立地..... 6

第5図 周辺 の縄文時代 の遺跡.....10

第6図 周辺 の古墳時代 の遺跡.....10

第7図 上前原遺跡 の地形と調査地点.....15

第8図 上前原遺跡 第2次調査全体測量図.....17

第9図 第2号住居跡・出土遺物(1).....19

第10図 第2号住居跡出土遺物(2).....20

第11図 第3号住居跡平断面図.....21

第12図 第3号住居跡出土土器(1).....22

第13図 第3号住居跡出土土器(2).....23

第14図 第3号住居跡出土土器(3).....25

第15図 第3号住居跡出土土器(4).....26

第16図 第3号住居跡出土土器(5).....27

第17図 第3号住居跡出土石器.....28

第18図 第3号墳現況測量図.....29

第19図 第3号墳平・断面図.....32

第20図 第3号墳石室断面図.....33

第21図 第3号墳周溝セクション.....34

第22図 第3号墳石室平面図.....35

第23図 第3号墳石室平面・外面立面図.....36

第24図 第3号墳石室基底石平面図・
内面立面図.....37

第25図 第3号墳遺物出土状態.....38

第26図 第3号墳出土遺物(1).....38

第27図 第3号墳出土遺物(2).....40

第28図 第1号溝跡.....43

第29図 遺構外出土遺物(1).....45

第30図 遺構外出土遺物(2).....46

第31図 遺構外出土遺物(3).....48

第32図 遺構外出土遺物(4).....50

第33図 遺構外出土遺物(5).....51

第34図 江南台地上の縄文時代中期
大規模集落跡.....53

第35図 西原遺跡出土土器(1).....55

第36図 西原遺跡出土土器(2).....57

第37図 参考資料.....60

〔表〕

第1表 遺跡地名表.....11

第2表 住居跡出土石器計測表.....28

第3表 遺構外出土石器計測表.....48

〔写真図版〕

巻頭カラー1：上前原遺跡航空写真

巻頭カラー2：上前原遺跡調査区垂直写真

図版1 調査区垂直モザイク写真

図版2 第2・3号住居跡

図版3 第3号墳石室航空写真

図版4 第3号墳垂直写真

図版5 第3号墳石室(1)

図版6 第3号墳石室(2)

図版7 第3号墳石室(3)

図版8 第3号墳石室基底石

図版9 第3号墳遺物出土状態

図版10 第1号溝跡

図版11 調査風景

図版12 第2号住居跡・第3号墳出土遺物

図版13 第3号住居跡出土遺物(1)

図版14 第3号住居跡出土遺物(2)

図版15 第3号住居跡出土遺物(3)

図版16 遺構外出土遺物(1)

図版17 遺構外出土遺物(2)

図版18 第3号住居跡・遺構外出土石器

図版19 第3号墳出土遺物

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経緯

試掘調査

平成14年12月、事業者より、江南町大字千代字萩山南133番地2号の土地について、個人専用住宅を目的とした開発事業を計画しているため、埋蔵文化財の有無の照会がある。照会地は、上前原遺跡の範囲内にあり、現状畑で、地膨れ状の高まりが確認されており、地境に古墳石室石材と推測される河原石が片付けられており、古墳の可能性が十分推測された。平成15年1月6日付けで、事業者より試掘調査依頼書の提出を受け、平成15年1月16日に試掘調査を実施。試掘対象面積約499㎡に対し、試掘溝1本をバックホーによって掘り下げ、遺構の有無を確認した。

調査の結果、現地表下15cm程で、古墳の主体部と周溝が確認され、遺構は確認されなかったものの多量の縄文土器が出土した。

その後、地権者と協議をもち、計画建物が古墳石室上に位置し別地点での建設が困難であること、軟弱地盤のため建物基礎にパイル工法を採用することが地権者より示され、遺跡の盛土保存が不可能であるとの判断に至った。

費用負担

調査費用については、平成14年度文化財関係国庫補助事業補助金の対象事業とし、国1/2、埼玉県1/4、江南町1/4の費用負担を行った。

調 査

調査は、平成15年2月5日から3月3日まで、江南町教育委員会が発掘調査を実施した。

調査通知

調査にかかる事務は、事業者より、文化財保護法第57条の2第1項の規定により、平成15年1月31日付けで「埋蔵文化財発掘の届出」を埼玉県教育委員会へ、町教育委員会の副申書を添えて進達、文化財保護法第58条の2の規定による「埋蔵文化財発掘調査の通知」を、平成15年1月31日付江教第2894号で、埼玉県教育委員会へ通知している。そ



の後、平成15年2月6日付け教文第3-1006号で埼玉県教育委員会より、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知を受理している。

試掘風景（平成15年1月16日撮影）

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は、平成15年2月5日より開始し、平成15年3月3日までおこなった。以下、発掘調査日誌抄を掲載する。

発掘調査日誌抄	15年2月5日	0.4級バックホーを投入し表土剥ぎを開始。
	2月7日	作業員12名投入し調査開始。3坪ハウス・仮設トイレ・テント設置。調査区精査後、石室部の掘り下げ開始。調査区内基準点設定。
	2月10日	河原石積の石室確認。周溝掘り下げ開始。
	2月12日	調査区南東隅に、縄文時代住居跡1軒確認。壁確認できず、石囲い埋甕確認。
	2月13日	石室前庭部入り口より、土師器短頸壺1個体出土。
	2月14日	周溝を切って中世の溝一条確認。断面箱薬研を呈す。覆土上層より青磁片出土。
	2月17日	玄室内東側より大刀1点確認。石室東側に縄文土器集中。
	2月18日	大刀を付着した礫ごと取上げ。鐔は外れた状態で確認。
	2月19日	玄室内より金銅製耳環1点、礫床間に落ち込むような状態で出土。
	2月20日	石室東側、墳丘下に縄文時代中期の住居跡確認、掘り下げ開始。
	2月25日	石室完掘、写真撮影。
	2月26日	調査区内清掃。ラジコンヘリによる空撮・石室立面図写真測量実施。
	2月27日	石室基底石を残して取り外し。基底石実測・写真撮影。
	2月28日	3坪ハウス・仮設トイレ撤去。発掘機材の撤収し、現場作業終了。
	3月3日	0.25級バックホーを投入し、調査区埋戻し開始。
	3月5日	調査区埋戻し終了。

事務書類	埋蔵物発見届は、平成15年3月6日付け江教第129号で熊谷警察署へ、埋蔵文化財保管証は、埼玉県教育委員会に平成15年3月6日付け江教第130号で提出。平成15年8月15日付け教文第5-9号で、埋蔵物の文化財認定を埼玉県教育委員会より受けている。
------	--

整理作業	整理・報告書刊行事業は、平成17年4月1日より平成18年3月22日まで、江南町遺跡整理事務所にて実施した。
------	---

作業は、遺物の水洗・注記を経て、接合・復元を行い、報告を要するものについて拓本をとり、実測図を作成した。遺構図は、原図の整理・確認、第2原図の作成、トレースなどを進めた。その後、遺構図・遺物図版の版組、写真撮影、原稿執筆を行い、割付を作成。平成18年2月に入札を行い、校正を経て、平成18年3月22日報告書を刊行し、作業を終了した。

尚、出土遺物および遺構遺物図面及び写真等の資料は、江南町教育委員会で保管している。

第II章 遺跡の立地と環境

第1節 上原遺跡周辺の地理的環境

江南町の地形 江南町は、埼玉県北西部の荒川中流域右岸に位置している。南側には比企丘陵、北側には、荒川を挟んで、妻沼低地・櫛挽台地が広がっている（第1図）。江南町の地形は、南側を東流する和田川以南の丘陵部（比企丘陵）、中央部を荒川右岸の中位段丘である江南台地、北部を部分的に下位段丘の残る荒川の沖積地の3つの地形に区分することができる（第2図）。

比企丘陵 比企丘陵は外秩父山地から東方に半島状に突き出した丘陵であり、北部は江南台地、南部は東松山台地、東部は吉見丘陵に接している。丘陵内では、高根山（標高105m）、二宮山（標高132m）、大立山（標高113m）など標高100m前後の山が、丘陵の西半分の地域に散在して突出した地形をつくるが、全体的には標高100m以下の丘陵地形をつくっている。

丘陵内部には、市ノ川・滑川およびその支流による開析が進み、広い谷底と小谷が発達している。この開析谷は、北西～南東あるいは南北の方向をもつものが多く、これらの谷頭は丘陵の北側に極端に偏り、分水嶺は丘陵の北縁近くに偏在する。このため、丘陵北縁を東流する和田川の支谷は、未発達となっている。

江南町域においては、高根山から派生する丘陵と、滑川町和泉地区から派生する二つの尾根筋があり、嵐山町とは西側の谷を流れる滑川で区分されている。

本丘陵は、地質学的には新生代第三紀層に相当し、礫岩・砂岩・泥岩・凝灰岩等の互



第1図 埼玉県の地形

層によって構成されている。層序は、下位より、前期中新世に属する七郷層（凝灰岩質で緑色変質が特徴。層厚830m以上）、中期中新世に属する小園層（粗粒砂岩を主体とし、礫岩・泥岩・凝灰岩を伴う。層厚300m。）、荒川層（砂岩・泥岩の互層で、下部に礫岩を伴う。層厚350m）、土塩層（砂質泥岩を主体とし、砂岩・凝灰岩を伴う。層厚350m）、後期中新世に属する楊井層（礫岩を主体とし、砂岩・凝灰岩を伴う。層厚300m）となり、これらの中新統を不整合に覆って更新世に属する物見山礫層が分布している（比企団体研究グループ：1991）。

なお、滑川町福田周辺から産出される通称「福田石」と呼ばれる斜長流紋岩質凝灰岩、江南町小江川周辺から産出される通称「小江川石」と呼ばれる白色細粒凝灰岩は、古くは周辺に分布する多くの古墳の石室構築材として利用されている。

江南台地

江南台地は、寄居町金尾付近より江南町を経て、大里町に至る東西17km、南北3kmにわたる幅狭な洪積台地である。江南台地は、台地の基盤となる荒川中位段丘の発達した第三紀層上に秩父古生層を起源とする砂礫層（層厚8～20m）の上に、川本粘土層とされる灰白色の粘土層（層厚2～5m）、下部を新期ローム層（層厚1～2m）に、また、上部を南関東の立川ローム層に対比されている大里ローム層と称されているローム層（層厚1～2m）が堆積し、表層に腐植土がのっている。

台地の海拔高度は、上流の寄居町木持付近で140m、川本町上本田付近で80m、台地末端にあたる熊谷市原新田付近で45mとなり、下流方向に次第に低くなっている。台地の北・東側は、荒川およびその沖積地に面し、比高差10～15m程の崖線で画され、崖線下には和田吉野川が流れている。

台地上には平地林が発達し、狭小な開析谷や埋没谷が複雑に入り組み、その最奥部および開口部には溜池が築かれており、独特な自然景観を醸し出している。



第2図 江南町の地形



第3図 遺跡の位置 (1/25,000)

荒川沖積地

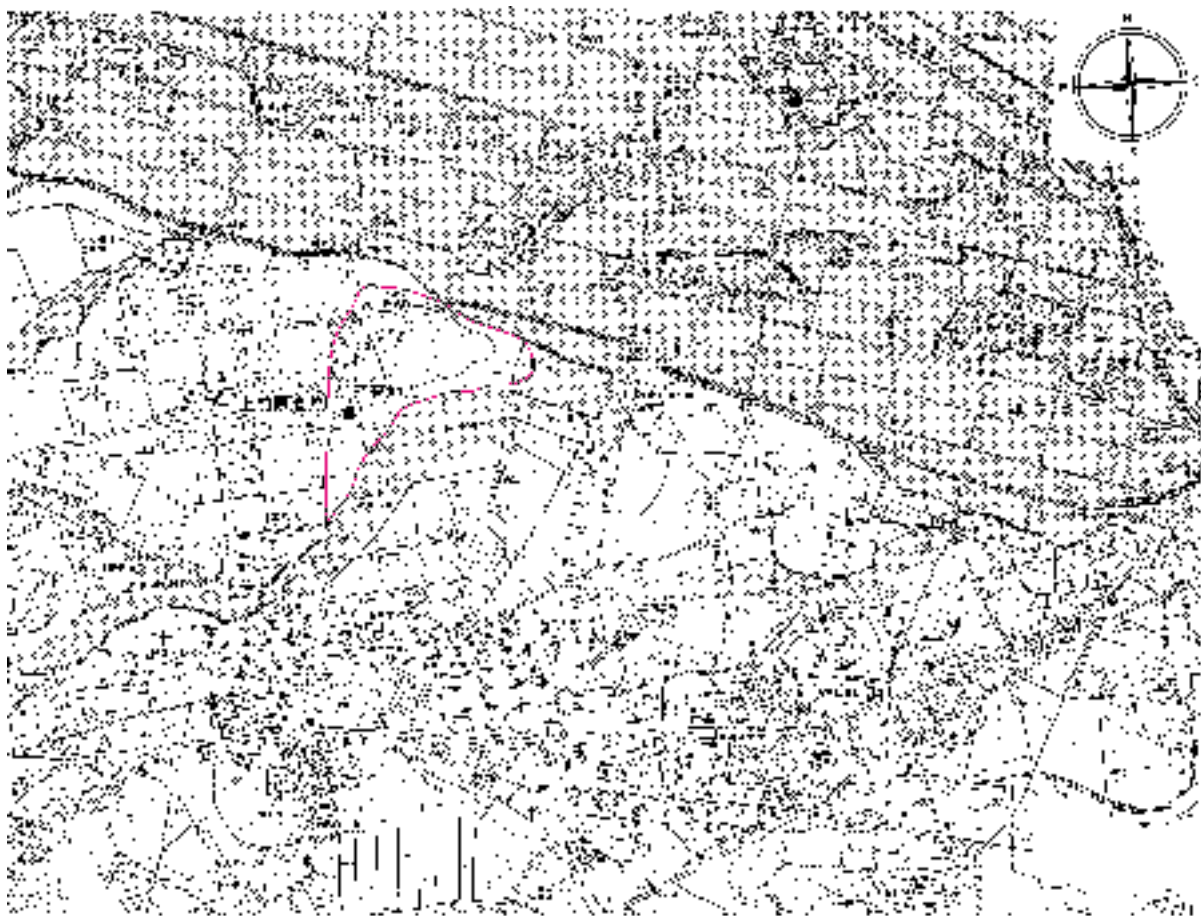
沖積地は荒川の氾濫原で、台地下部を東流する和田吉野川以北に広がり、部分的に下位段丘は、川本町畠山から江南町三本まで見られ、これより下流では沖積地へ埋没していると考えられている。

沖積地との比高差は1m前後で、段丘礫層で構成されており、ローム層に被覆されていない。沖積地は、現在土地改良が行われ、穀倉地帯となっており、その中に自然堤防状の微高地が点在し、集落が存在している。標高46～34m、荒川との比高差9～12mを測る（第3図）。

遺跡の立地（第4図）

遺跡の規模は、東西450m、南北350mで、標高は、西端で55mと最も高く、東端の45mへと次第に低くなっている。遺跡のやや東よりには、江南台地を北東―南西方向に開析する柴沼下の谷から分岐する小支谷が、南東―北西方向に入り込んでおり、これを取り囲むように集落が展開していることが想定される。

調査地点は、江南台地崖線部から約350m入った、柴沼下の谷左岸の、標高50m前後の東側へ緩やかに傾斜する地点に位置する。遺跡の北側は、比高差約6mで荒川沖積地に至り、南側は、柴沼下の谷を挟んで、比高差約2mで江南台地高位面に至り、本遺跡は



第4図 遺跡の立地（1/5,000）

中位段丘面に位置している。

地形的に連続する本遺跡の西側には、縄文時代中期の集落跡である東原遺跡(江南町：1995)が位置し、北西側の柴沼下の谷の上流部には、縄文時代早期撚糸文期の集落跡である萩山遺跡(江南町：1995)が、東側には、柴沼下の谷を挟んで、江南町指定史跡である、行人塚古墳が位置している。

今回の調査地区の周辺には、墳丘を持つ古墳が2基山林中に確認されている(第1・2号墳)。本調査地点は、畑地として使用されており、土地は開墾により削平されていたが、古墳石室石材と考えられる拳大の河原石が地境に片付けられており、古墳の存在が予想されており、第3号墳とされていた。

第2節 上前原遺跡周辺の歴史的環境

今回の報告は主に、縄文時代と、古墳時代であることから、この時代に限り、江南台地東部の周辺遺跡の歴史的環境を概観してみたい。

縄文時代（第5図）

縄文時代の遺跡は、現在町内で40箇所余が確認されている。江南台地上を中心に、早期と中期後半に遺跡の増加傾向が確認されることが江南町域での特徴で、調査が行われ、遺構の確認された代表的な遺跡について、時期ごとに概観したい。

草創期

萩山遺跡では、縄文時代草創期の有舌尖頭器が採取されており、平成6年（1994）に町文化会館建設に伴い約15,000㎡が調査された際に、爪形文土器が出土している。

また、深谷市（旧川本町）では、四反歩遺跡（23）（財・埼玉県埋蔵文化財調査事業団：1993）で槍先形尖頭器が、上本田遺跡（26）の西側では有舌尖頭器が採取されている。

早期

早期の遺跡では、まず萩山遺跡（4）が挙げられ、撚糸文期の住居跡が20軒余り検出されている。主に撚糸文期前半の土器が出土しているが、早期の押型文土器、撚糸文期に特徴的なスタンプ形石器も200点以上出土しており、該期において県内でも有数の集落跡と考えられる（江南町：1995）。

立正大学校地内に位置する鹿島遺跡（1）では、研究棟建設に伴い昭和63年（1988）に、立正大学熊谷校地内遺跡調査室により調査が行われ、撚糸文期後半の住居跡が3軒確認されている（立正大学熊谷校地内遺跡調査室：1990）。

野原宮脇遺跡（6）では、昭和57年（1982）に町道建設に伴い、約1,300㎡の調査が行われており、撚糸文期後半の住居跡1軒が検出されている（江南町：1995）。

南方遺跡（11）では、昭和57年（1982）に町道建設に伴い、約600㎡の調査が行われており、撚糸文期後半の住居跡2軒が検出されている（江南町：1995）。

この他、該期の遺物が採取されている遺跡は12箇所を数え、同じ江南台地に立地する隣の深谷市（旧川本町）四反歩遺跡（23）では、撚糸文期後半の住居跡8軒が、埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって調査されている（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団：1993）。

また、船川遺跡（8）では、昭和62年（1987）に送電線鉄塔建設に伴い調査が行われており、押型文土器を主体とする遺物の集中区が検出されている。この他、該期に特徴的な石器である局部磨製石鏃が出土しており、竹之内式と呼称される貝殻沈線文土器が出土しており、山形押型文土器・無文土器との共伴が確認されている（宮崎・新井：1993）。

このように、集中して早期の遺跡が確認されることは、幾重にも台地上を開析して走る小支谷の発達した江南台地の地形が、早期の遺跡の立地に適したものであることを示しており、本地域の特色とすることができる。

前期

前期の遺跡は急激にその数が減る。確認された住居跡は、町内では唯一富士山遺跡（14）で、平成元年（1989）にゴルフ場造成に伴う発掘調査で、約56,000㎡の調査が行われ、

諸磯期の住居跡3軒が検出されている（江南町千代遺跡群発掘調査会：1996）。

この他、姥ヶ沢遺跡（15）・権現坂遺跡（12）・西原遺跡（16）等で前期の土器の散布が認められているが、その実態は明らかではない。

中 期

中期になると遺跡数は一気に増加し、大規模な集落跡が確認されている。権現坂遺跡（12）では、平成元年（1989）に約3,500m²の調査が行われており、江南台地崖線に沿うように、加曾利E式期前半の住居跡5軒、集石土壌13基、土壌21基が検出されている。集石土壌は、下部に扁平な礫を敷いた下部施設をもつ特徴的な構造である（江南町：1995）。

西原遺跡（16）では、平成2年（1990）に、ゴルフ場建設に伴い約57,000m²の調査が行われ、加曾利E式期後半の住居跡52軒、屋外埋甕7基、集石土壌10基、土壌200基を数える大規模な集落跡が検出されている。加曾利E3～4式期にかけての時期は、一般的に集落規模の極端な縮小化傾向が指摘される中、注目される事例である。また、集落内での集約的な石鏃の製作が行われており、石材から製品に至る一連の工程を示す遺物が多量に出土している（江南町千代遺跡群発掘調査会：1996）。

上前原遺跡（3）では、過去3回に渡る調査が行われており、第1次調査で、中期後半の住居跡1軒（江南町：1988）、第2次調査で、加曾利E式期後半の住居跡2軒、第3次調査で、加曾利E式期初頭の住居跡2軒と集石土壌55基が確認されており、勝坂式期の土壌も検出されている。町内で唯一、勝坂式期から加曾利E式期にかけて長期間機能していた集落跡であることが想定される。

この他、富士山遺跡（14）・南方遺跡（11）・寺内遺跡（18）等で住居跡が確認されている。

後 期

後期に入ると遺跡数は再び激減し、遺構が確認された遺跡は少ない。そのような状況の中、萩山遺跡（4）では、称名寺式期の柄鏡形を含む住居跡7軒と集石土壌が確認されており、町内では該期における最大規模の集落跡である。

堀ノ内式期の遺構は、姥ヶ沢遺跡（15）・富士山遺跡（14）で屋外埋甕が、上前原遺跡（3）第3次調査においては集石土壌が検出されているが、住居跡は確認されていない。

さらに、加曾利B式期になると遺構が確認される遺跡は無く、僅かに西原遺跡（16）で土器片が出土しているにすぎない。

晩 期

晩期になると、町内では活動の痕跡をほとんど認めることができない。唯一、野原遺跡（7）で、終末期の浮線網状文系土器の破片が僅かに出土しているに過ぎない（江南町：1995）。和田川を遡った、嵐山町北田遺跡においても若干の同時期の土器片が出土しており、今後、台地上を開析する和田川流域の沖積地に、該期の遺構が確認される可能性がある。

古墳時代（第6図）

古墳時代の遺跡は、前期と後期に遺跡が増加する傾向があり、中期の遺跡は極端に少ない。比企丘陵北端から江南台地上を中心に集落跡が分布し、埴輪や鉄器の生産遺跡、前期・後期の群集墳に特徴が認められる。

第2節 上前原遺跡周辺の歴史的環境



第5図 周辺の縄文時代の遺跡



第6図 周辺の古墳時代の遺跡

第1表 遺跡地名表
〈縄文時代〉

1	鹿島遺跡	10	宮下遺跡	19	天神遺跡
2	向原遺跡	11	南方遺跡	20	船山遺跡
3	上前原遺跡	12	権現坂遺跡	21	山ノ腰遺跡
4	萩山遺跡	13	北方遺跡	22	白草遺跡
5	原谷遺跡	14	富士山遺跡	23	四反歩遺跡
6	野原宮脇遺跡	15	姥ヶ沢遺跡	24	円阿弥遺跡
7	野原遺跡	16	西原遺跡	25	権現堂遺跡
8	船川遺跡	17	山神遺跡	26	上本田遺跡
9	立野遺跡	18	寺内遺跡		

〈古墳時代〉

1	鹿島遺跡	14	新田裏古墳群	27	立野古墳群
2	天神古墳群	15	鹿島古墳群	28	塩新田遺跡
3	静簡院古墳群	16	天神遺跡	29	塩古墳群
4	行人塚古墳群	17	白草遺跡	30	塩西遺跡
5	上前原古墳群	18	円阿弥遺跡	31	塩丸山遺跡
6	宮前遺跡	19	権現堂遺跡	32	釜場遺跡
7	原谷遺跡	20	焼谷遺跡	33	本田東台遺跡
8	宮下遺跡	21	塚原古墳群	34	野原古墳群
9	権現坂遺跡	22	川端遺跡	35	宮脇遺跡
10	大林遺跡	23	如意遺跡	36	諏訪脇遺跡
11	新屋敷遺跡	24	如意南遺跡	37	元境内遺跡
12	富士山遺跡	25	畠山遺跡	38	丸山遺跡
13	姥ヶ沢遺跡	26	箱崎古墳群		

前 期 集落は、中小規模のものが比企丘陵・江南台地上に立地し、生産域と推定される開析谷中の谷津田に面しており、その立地は前代の弥生時代後期のあり方を踏襲していることがうかがえる。調査された主な集落跡としては、比企丘陵上においては、釜場遺跡(32)で、住居跡11軒が平成元年(1989)に、塩丸山遺跡(31)で、昭和59年(1984)に住居跡1軒が調査されている(江南町：1996)。

江南台地上では、富士山遺跡(12)で住居跡3軒が平成2年(1990)に(江南町千代遺跡群発掘調査会：1998)、姥ヶ沢遺跡(13)で10軒が平成2年(1991)において(江南町千代遺跡群発掘調査会：1998)確認されている。

また、集落における手工業生産を示すものとして、昭和61年(1986)に調査が行われた、行人塚遺跡(4)における小鍛冶関連遺構が挙げられる(江南町：1996)。竪穴住居跡より、羽口転用の高坏形土器の脚部、鉄滓、台石、叩石などが出土しており、県内でも最も早い段階での製鉄技術の導入が確認される重要な事例である。

塩西遺跡(30)からは、祭祀にかかると推定される3.5×2.1m程の土壇から、40個体の土器が出土しており、S字状口縁の台付甕形土器、網目状撚糸文の施文された壺形土器、籠目文土器が出土している(江南町：1984)。

墳墓は、比企丘陵上に立地する。前方後方墳2基を中心に方墳26基で構成される、埼玉県指定史跡塩古墳群(29)が挙げられる。平成4～5年(1992～1993)にかけて、確認調査が行われており、第1号墳は、全長35m、後方部長21m、前方部長14mの前方後方墳であることが確認されている(江南町：1996)。第1号墳の周溝からは、焼成前底部

第2節 上前原遺跡周辺の歴史的環境

穿孔の有段口縁壺形土器が出土している。また、主体部については、昭和61年（1986）に、第25号墳（方形周溝墓）が調査されており、箱型木棺の直葬が確認され、副葬品として鉄剣1とガラス玉4が出土している（江南町：1996）。

中期に属する遺跡は極端に少なく、その実態は不明といわざるを得ない。比企丘陵上の遺跡では、塩西遺跡（30）で、住居跡2軒（江南町：1989）が調査されている。塩新田遺跡（28）では、炉と併用したカマドを持つ住居跡1軒が確認されており、本地域におけるカマド導入の様相を示す好例が確認されている（江南町：1982）。

後期から終末期になると、遺跡数は大幅な増加をみる。集落跡をみると、和田川流域左岸に集落遺跡が広く展開する傾向がうかがえ、急速に流域の開発が進行した状況が想定される。

丸山遺跡（38）は、1994年に福祉施設建設に伴い約3,000㎡の調査が行われており、7世紀前半に属する住居跡2軒が検出されている（江南町：1996）。

元境内遺跡（37）は、1999年に社会福祉施設建設及び個人住宅建設に伴い約3,400㎡の2次に渡る調査が実施されている。6世紀後半から奈良・平安時代に至る住居跡28軒が検出され、住居跡より、鉄製鋤先・炭化桃核が出土している。

諏訪協遺跡（36）は、1999年に個人住宅の建設に伴い、約300㎡の調査が行われており、6世紀後半の住居跡2軒が検出されている。

宮脇遺跡（35）は、2001年に個人住宅の建設に伴い、約150㎡の調査が行われており、6世紀後半の住居跡6軒が検出されており、住居跡からは、炭化桃核、羽口、鉄滓等が出土している。

本田東台遺跡（33）は、1968・1983・1985・19991年の4回に渡って、調査が行われている（江南町：1988、1995）。調査の結果6世紀前半から7世紀末にかけての住居跡74軒が検出されており、地形・遺物の散布状況から想定される住居跡数は200軒を超える集落規模が想定される、和田川流域中最大規模の集落である。住居跡内からは鉄鏝が出土しており、鍛冶炉も検出されており、鉄滓・羽口等が出土している。

野原古墳群を挟んで分布する和田川流域左岸のこれらの集落跡は、続く奈良・平安時代へと発展的に継続するものである。そして、古墳時代における盛期が、野原古墳群の造営時期と重なることから、野原古墳群を形成した首長層に支配されていた人々による集落と考えられ、これらの遺跡から鍛冶関連の遺構・遺物が確認されたことは、該期における手工業生産の実態を示すものとして重要である。

この他、宮下遺跡（8）、新田裏遺跡（14）等で住居跡が確認されている。

墳墓としては、前方後円墳と円墳が存在しており、円墳は小規模なものが群集墳を形成する場合が多く、6世紀後半から7世紀前半にかけて築造を開始する例がほとんどである。

調査が行われた群集墳としては、江南台地上に立地するものとしては、立野古墳群（27）が挙げられる。2002年に国体馬場馬術場建設に伴い約7,200㎡、2005年に公園整備に伴い約14,000㎡の調査が行われ、円墳13基と小石室1基、小石櫛1基が調査され、7世紀代の群集墳であることが確認されている。円墳は、その規模と主体部に用いられた石室石

材により、直径20mを超える大型円墳(石室は凝灰岩截石)、直径10～20mの中型円墳(石室は凝灰岩截石・河原石)、直径10m以下の小円墳(石室は凝灰岩片)に分類され、第12号墳からは、毛彫りを施した金銅製杏葉2が出土しており注目される(江南町：2005)。

野原古墳群(34)は、前方後円墳を中心として、23基程の円墳により構成される町内最大規模の古墳群である。昭和37年採土工事に伴い、前方後円墳の調査が行われており、全長40m、高さ5m、後円部径16mと計測されている。主体部は、後円部と前方部で凝灰岩截石を用いた横穴式石室が発見されている(柳田：1962)。円墳群については、昭和39年(1964)に立正大学考古学研究室が8基の調査を実施している(坂詰：1965)。また、昭和5年(1930)には、畑の開墾中にいわゆる「踊る埴輪」1対その他が発見されており、昭和7年(1932)には東京帝室博物館に納められている。

今回報告の上原古墳群(5)は、現状で3基程確認されており、2003年に行われた第3号墳の調査が初めてであり、本古墳群が7世紀代の築造であることが確認された。

比企丘陵上に立地する塩古墳群(29)は、狸塚支群(第I支群)で直径20m前後の円墳群8基が確認されている。第24・30号墳の一部が昭和56年(1981年)に(江南町：1982)、第27号墳が1997年に調査されている(江南町：1999)。第27号墳は、直径23.5m程の円墳で、石室内からは副葬品として、耳環1、碧玉製管玉1、水晶製切子玉10、ガラス製小玉241点、鉄鏃等が出土している。

荒井支群(第II支群)は、20基程の円墳群が確認されている。第13号墳で、凝灰岩截石石材を用いた複室構造の横穴式石室が確認されており、遺物は確認されていないが、7世紀前半の築造が推測されている(江南町：1996)。

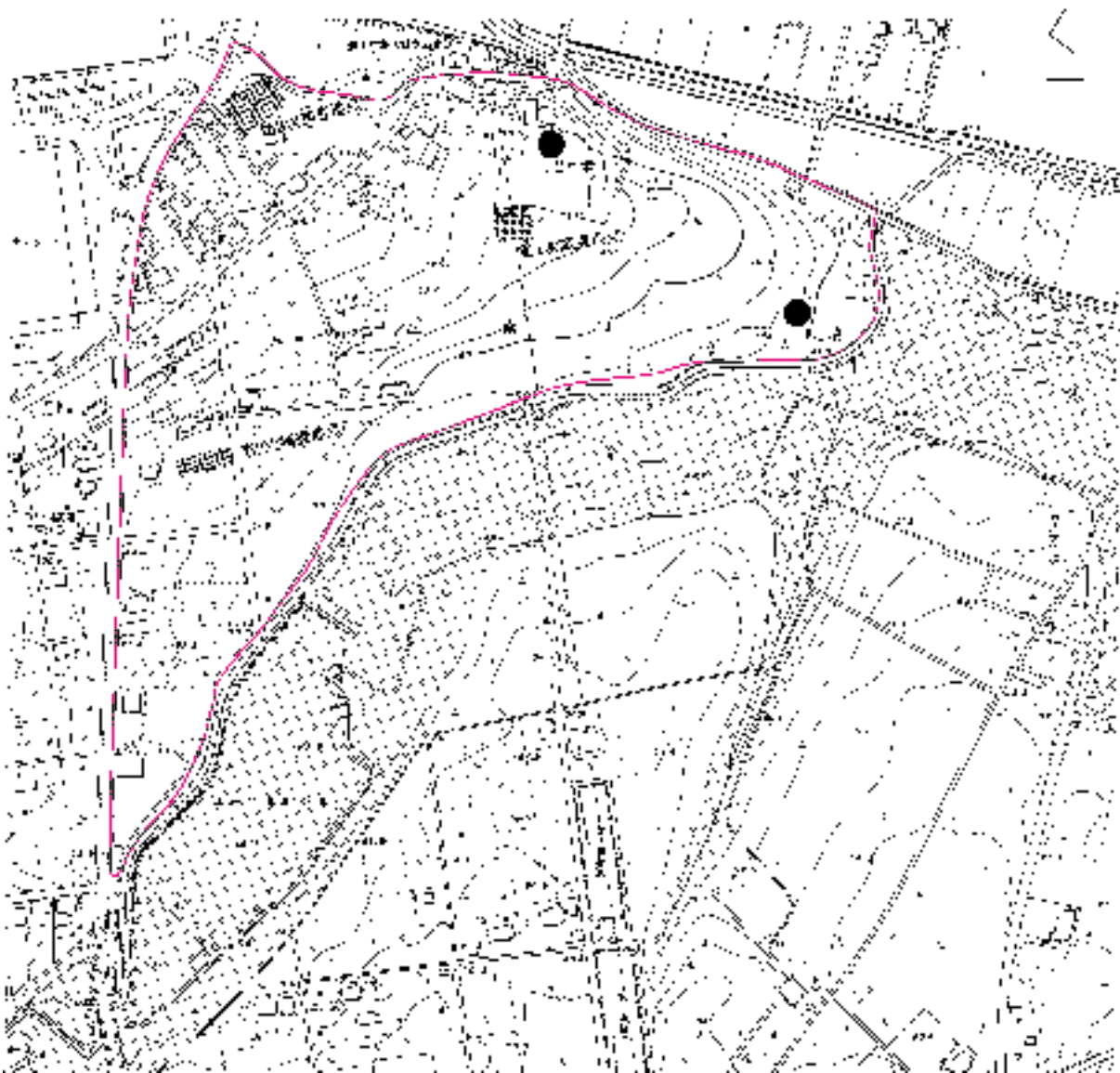
西原支群(第III支群)は、直径10m～20m程の円墳21基で構成される。第6、7、9、11、18号墳で調査が行われている。第18号墳は、直径22mで支群の中では、最も規模が大きい。凝灰岩截石を用いた複室構造の石室が確認されており、出土遺物は、武器類で銀象嵌装大刀1・銀装大刀1、大刀3、鉄鏃30、馬具で鉄地金銅張雲珠1、同辻金具2、同帯止金具2、装身具として銅釧3、金銅製耳環1、碧玉製管玉2、琥珀玉5、土製丸玉2が出土している。埴輪も確認されており、6世紀後葉の築造が推定されており、その出土遺物から、支群の盟主的位置にあたる古墳と推定されている(江南町：1996)。

この他、生産遺跡では、埴輪窯が、姥ヶ沢遺跡(13)で2地区9基(江南町：1983、江南町千代遺跡群発掘調査会：1998)、権現坂遺跡(9)で2群7基が調査されている(小澤：1964、江南町千代遺跡群発掘調査会：1998)。権現坂遺跡では、粘土採掘坑が確認されており、埴輪工房跡と推定される竪穴住居跡も確認されており、さきたま古墳群をはじめとして周辺の古墳群に埴輪を供給していたことが推定されている。

第Ⅲ章 発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

調査履歴	本遺跡は、過去3次に渡る発掘調査が実施されている（第7図）。
第1次調査	第1次調査は、昭和58年(1983)、送電線鉄塔建設工事に伴って江南町教育委員会が調査を実施している(江南町：1988)。今回の調査地点から、北東に約250mの地点である。調査面積は、430㎡で、縄文時代中期後半の竪穴住居跡1軒と土壇21基が検出され、早期～後期にかけての遺物が多量に出土した埋没谷の遺物包含層が確認されており、長期にわたる集落遺跡であることが判明している。特筆される遺物として、埋没谷覆土中より、土製円盤124点が出土している。
第2次調査	平成15年(2003年)、個人住宅建設に伴って江南町教育委員会が調査を実施した、今回報告分の本書である。調査面積約250㎡。縄文時代中期後半の住居跡2軒、古墳1基、中世溝1条が検出されている（第8図）。
第3次調査	平成16年(2004年)、個人住宅建設に伴って、江南町教育委員会が調査を実施している。今回の調査地点から北に約270mの地点である。調査面積は、約700㎡で、縄文時代中期後半の住居跡2軒、集石土壇55基、土壇5基、平安時代の土壇1基を検出している。集石土壇は、狭い調査区内から、2群に分かれて分布する状況が確認され、本地点が、集落内における屋外調理施設として土地利用されていたことがうかがえる。また、勝坂式期の土壇が検出され、勝坂期から加曽利E式期にかけての住居跡も確認されており、本集落が、勝坂式期後半から加曽利E式期後半にかけて営まれた大規模な集落であることが確認された。
表採資料	この他、発掘調査では確認されていないが、細石刃核・細石刃・尖頭器・彫刻刀形石器等の旧石器時代に属する資料が表採されている（立正大学古代文化研究会：1978）。
古墳の分布	上前原古墳群の調査は、これまで行われておらず、埴輪等の遺物も採取されていないことから、終末期に属する古墳群であることが推測されるに留まっていた(第7図)。墳丘の残る古墳は現状で2基程確認されており、第1号墳は直径12m、第2号墳は直径10m程の円墳で、横穴式石室をもつものと推測されている。今回調査した第3号墳は、畑地に若干の地膨れ状の高まりが確認されていたもので、石室石材に用いられたと推測される河原石が、地境に片付けられており、古墳であることが推測されていたものである。 第1・2号墳とも小型の円墳である。江南台地上の古墳は、その墳丘規模により石室石材の採用に基準が存在することが想定されており、両古墳とも河原石積の石室と推定される。凝灰岩截石を採用した、直径20m以上の主墳クラスの古墳は、現在本古墳群中には確認できない。古墳の分布面積のわりには、その分布は非常に散漫であり、開墾等で既に消滅してしまっている古墳も多数あることが推定される。凝灰岩截石を採用した古墳の有無および消滅してしまった可能性のある古墳の確認は、本古墳群の性格を考察する上で重要であり、その確認は今後の課題である。



第1号墳現況



第2号墳現況

第7図 上原原遺跡の地形と調査地点（1/5,000）

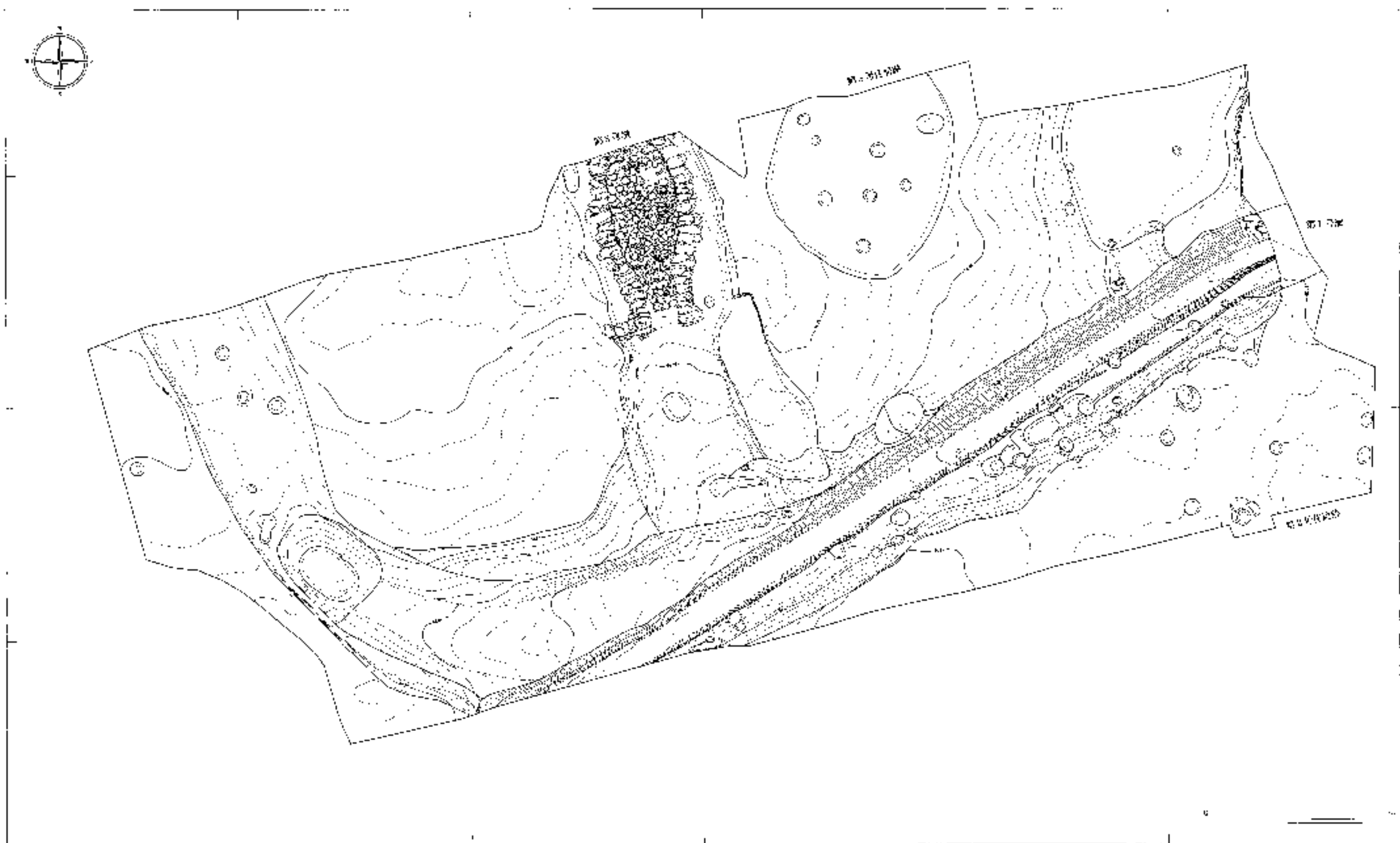
第2節 縄文時代の遺構と出土遺物

第2号住居跡（第9～10図：図版2・12）

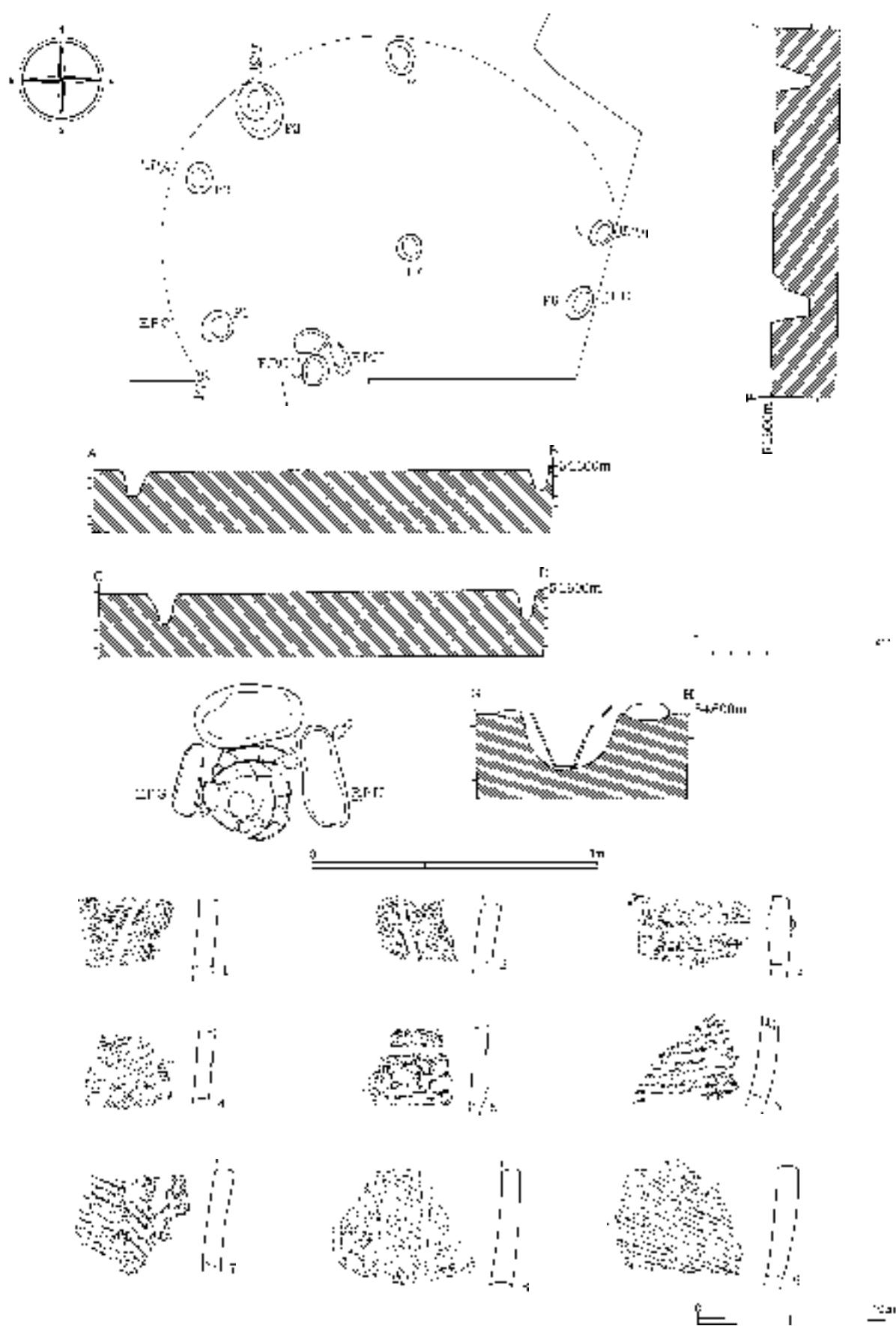
位 置	調査区の南東隅に確認されている。南側の一部は、調査区外にかかり未調査となっている。
形 状	壁面は確認することができず、住居跡平面形状は不明である。柱穴と思われるピットが7基、5×4m程の範囲で確認されており、壁際にピットが巡っているものと推測される。各ピットの深さはいずれも浅く、P1—28cm、P2—31cm、P3—46cm、P4—32cm、P5—24cm、P6—33cm、P7—24cmを測る。床面は特に硬化面は認められない。
炉	石囲い埋甕炉が、南西寄りに確認されている。石囲いは、3辺が確認されるが、南側の1辺は抜き取りによるものか、残存していない。埋甕は、口縁部を欠くが、以下底部まで残存している。
遺物出土状態	遺物は、12点の土器小片が炉跡付近より、床面よりやや浮いた状態で確認されている。炉体土器を除いて、器形をうかがえるような資料は無い。
土器（第9～10図）	1・2・4・7・8は、沈線区画内に縄文を残し、区画外は磨り消されている。渦巻き又は「J」字状のモチーフをとるものと推測される。 3は、低い隆帯下に櫛歯状工具による縦位の条線を施文している。 5は、横走する沈線下に細い棒状工具による連続刺突を加えている。 6は、ほぼ横走するLR単節縄文が施文されている。9は、斜位にRL単節縄文が施文されている。 10は、石囲い炉に埋設されていた炉体土器である。口縁部を欠くが、底部から直線的に広がり、口縁部がやや内彎する器形を呈する。現存器高35.8cm、底径9.8cmを測る。胴部地文には、LR単節縄文が施文されている。文様は、5単位の渦巻文が沈線で施文されている。上端部を欠くためはっきりしないが、渦巻きは、展開図右側より、（逆「の」字状：左下起点）→（「の」字状：左上・右下基点）→（楕円文？：左下・右下基点）→（「の」字状：起点右下？）→（楕円文？：右下・左下基点）とそれぞれ異なるモチーフをとり、沈線間が磨り消されている。各モチーフの沈線は閉じられておらず、開曲線となっている。
時 期	炉に埋設された土器により、本住居跡が営まれた時期は加曾利E4式期と判断される。覆土中の土器も、加曾利E4式に含まれるものと判断される。

第3号住居跡（第11～17図：図版2・13～15・18）

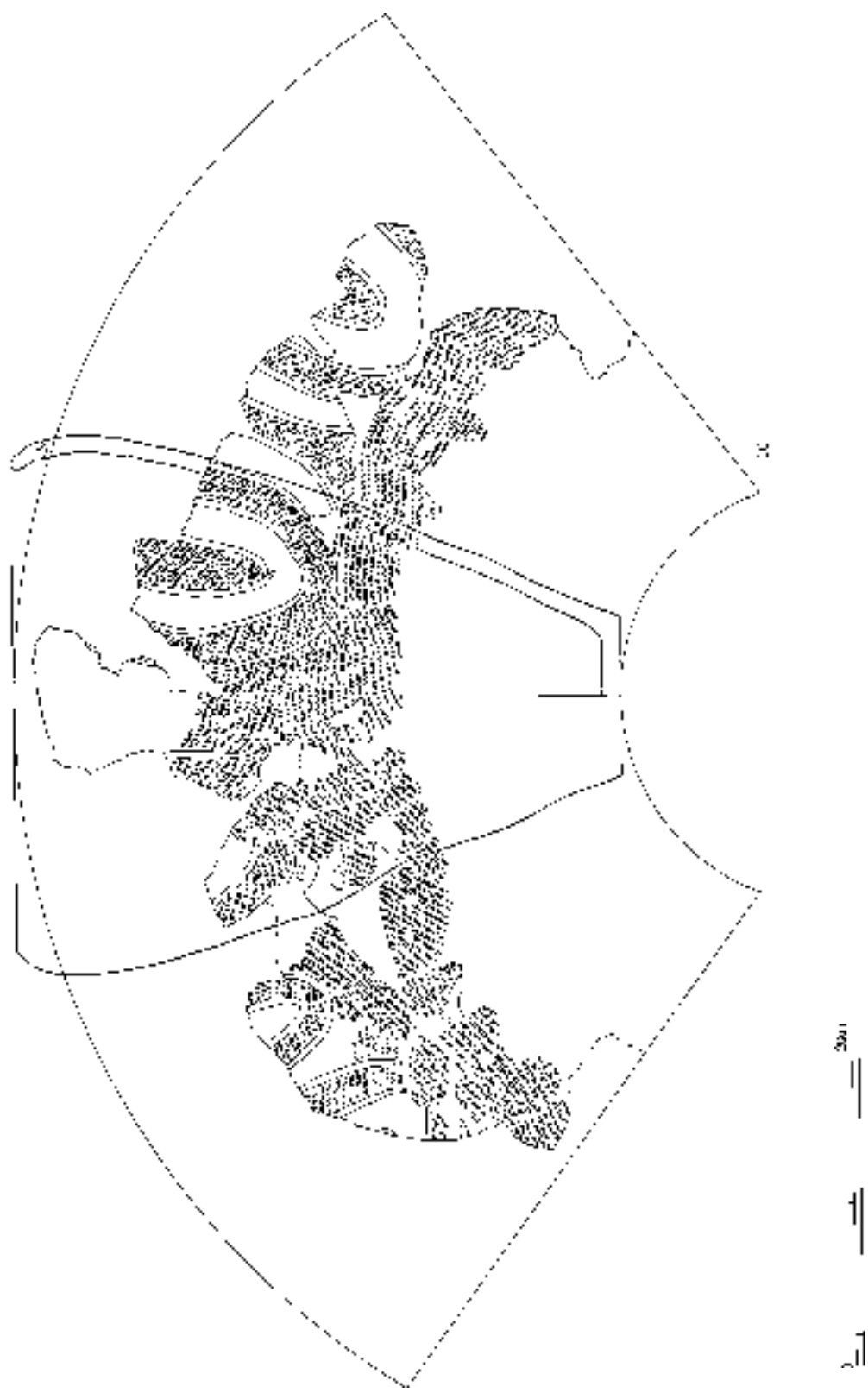
位 置	第3号墳石室東側の墳丘下より確認されている。北側の一部は、調査区外にかかり未調査となっている。
形 状	現状で長径(4.7m)×3.8mの平面楕円形を呈する。壁高は、東側で18cm、南側で14cm、西側で16cm程の高さを確認している。ピットは8基確認されている。いずれも浅く、P1-25cm、P2-28cm、P3-32cm、P4-33cm、P5-28cm、P6-32cm、P7-34cm、P8-35cmを測る。



第8図 上前原遺跡第2次調査全体測量図



第9図 第2号住居跡・出土遺物(1)



第10図 第 2 号住居跡出土遺物(2)

炉

調査区内からは確認されていない。

遺物出土状態

覆土中から土器474点、石器5点が出土している。床面に接するように第16図64の土器が出土している他は、いずれも覆土中からの出土であり、そのほとんどが小破片となって確認され、器形のうかがえる資料はほとんど無い。

土器（第12～16図） 1～4・44は、無文となる幅狭い口縁部上端無文帯に円形の刺突列を施文する。3・4は、地文の縄文施文部との境に断面三角形の低い隆帯を貼付し、その上に刺突を加えている。44は口径16cm程の小形土器。内彎する口縁部に、断面かまぼこ状を呈する低い隆帯をタガ状に貼付し、幅狭い無文帯を区画し、円形刺突列を加えている。胴部には、地文の縄文を磨消するように弧状に太く浅い沈線が施文されているが、モチーフは不明。2・3にも沈線区画内で、地文の縄文が磨消されているが、モチーフは不明。

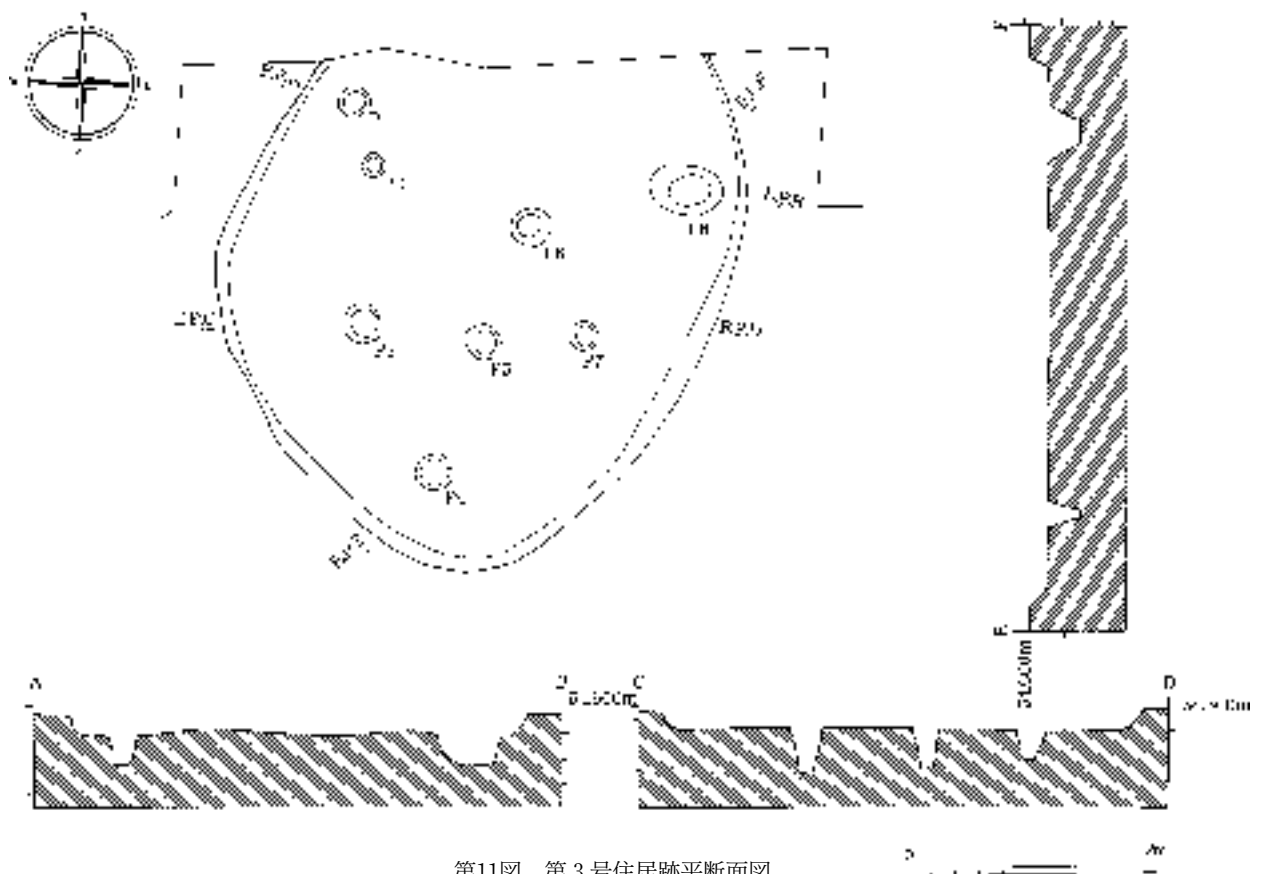
5・6・10は、ほぼ直立する口縁部が、やや肥厚する。モチーフは不明であるが、沈線で区画された内部に縄文が充填されている。口縁部文様帯の可能性もあるが、破片資料のため判断できない。

7・13・16・22・24～26は、三角形と球状の沈線区画内に縄文を充填するモチーフをとる土器。口縁部下に沈線は施文されない。

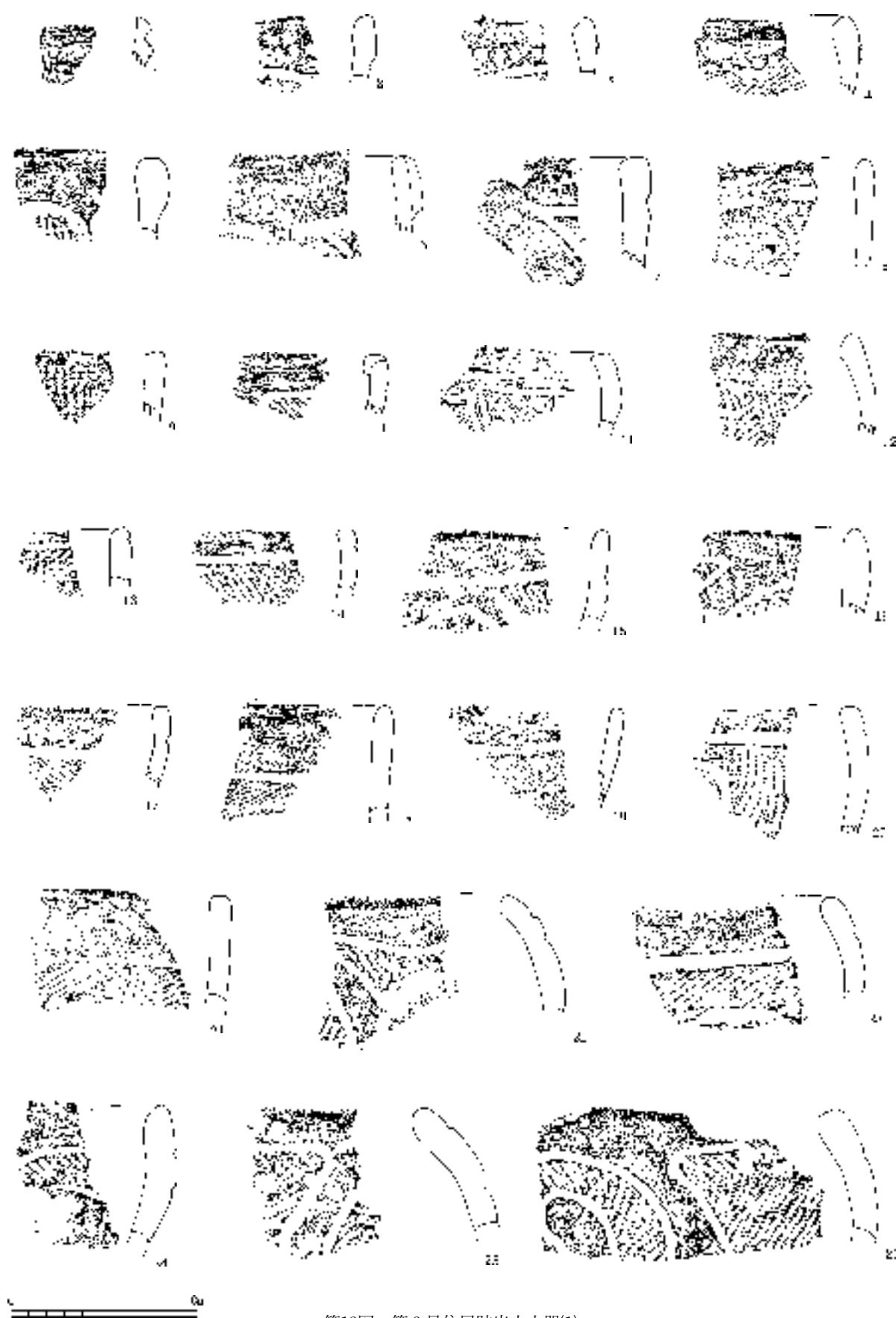
8は、ほぼ直立する無文の口縁部破片。

9は、縦位にRLの単節縄文が施文されている。

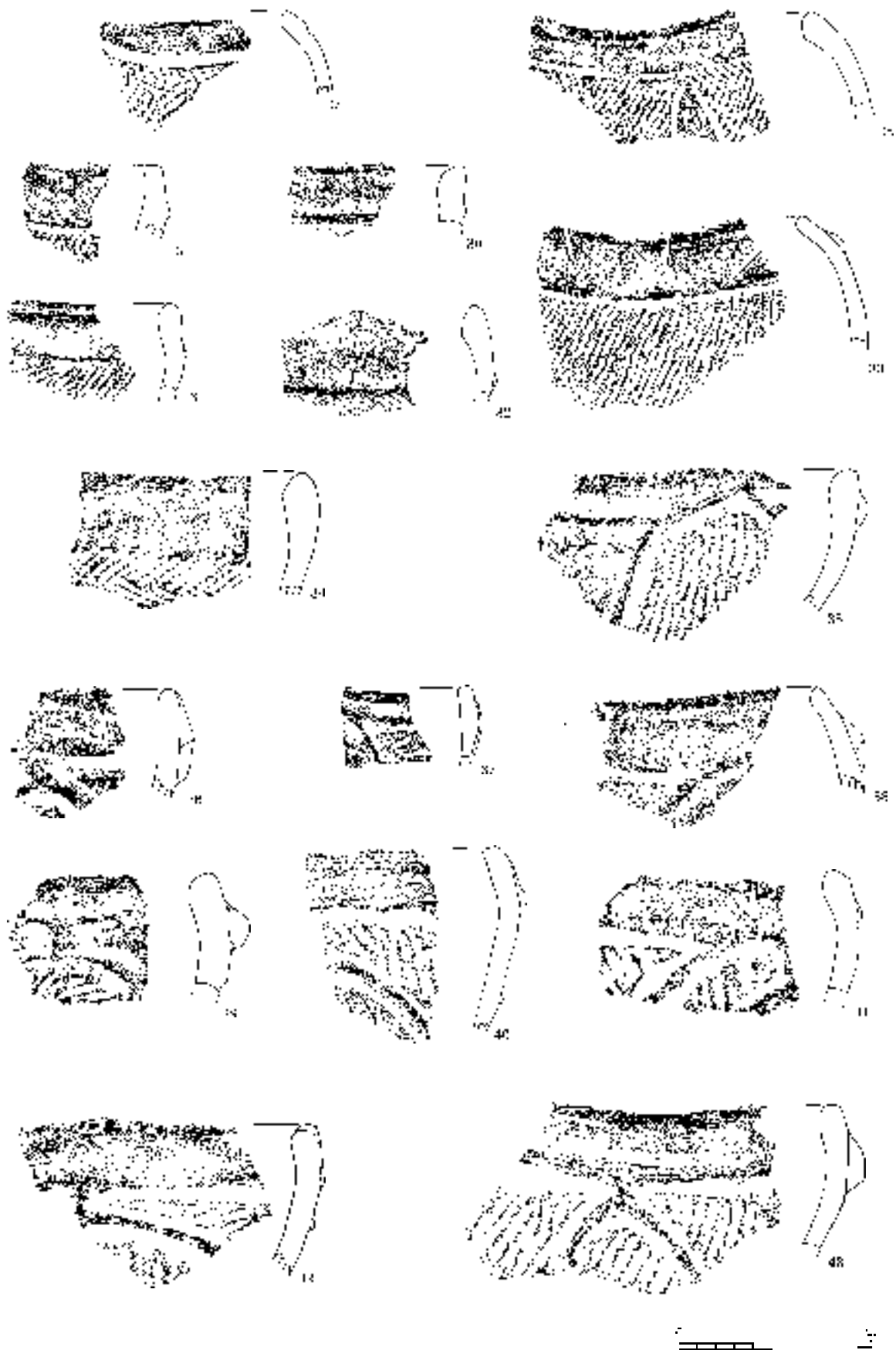
11・12は、沈線で短冊状の区画が施文される。11は、地文に縄文が施文され、口縁部の無文帯は幅狭い。12は、沈線間に縄文が充填され、口縁部の無文帯がやや幅広い。



第11図 第3号住居跡平断面図



第12図 第3号住居跡出土土器(1)



第13図 第3号住居跡出土土器(2)

14・17～19・21は、口縁部下に幅狭い無文帯をとり、1条の沈線を横位に施文し、以下胴部には、斜位の縄文が施文される。胴部文様は不明。

15・20・23は、横位の沈線下に弧状の沈線が施文されている。沈線間の地文は磨り消されている。いわゆる吉井城山タイプの口縁部破片と判断される。

28は、口縁部が内湾し、沈線を一条横位に施文する。胴部上半には鋭角の逆「U」字状を呈する沈線区画が施文され、地文の縄文を磨り消している。27も、破片資料のため胴部の沈線は確認できないが、同様のタイプであると判断される。

29～34は、口縁部下に断面三角形の低い隆帯をタガ状に貼付する。32は波状口縁、33は口縁部が内彎する。

35・50は、ナゾリの加えられた断面かまぼこ状を呈する隆帯が貼付される。逆「U」字状に貼付された隆帯が、タガ状に貼付された隆帯よりも上に貫入しており、岩坪タイプ類似の土器である。

36～43.46は、隆帯の貼付で大型の渦巻文モチーフを表現する、いわゆる梶山タイプの土器である。隆帯は、断面三角形を呈するナゾリを加えたものと（37・39）、断面かまぼこ状を呈し、隆帯側面に明瞭な沈線を沿わせるもの（36・38・40～43・46）がある。隆帯はいずれも一本単位で、46は波状口縁を呈し、波頂部下に渦巻文が配される。

45・47・55・56・60は、両耳壺。口縁部が外反し無文となる。張り出した胴部中央には、隆帯で円と楕円の区画帯が配される。楕円区画内には縄文が充填される。47の円文の上部は、突起状に突き出す。45は、隆帯が剥離している。60は、胴部に櫛歯状工具による流水文が施文されている。

49は、鉢形土器。口縁部下に1条の沈線を巡らせ、無文帯をとり、以下胴部にはRL単節縄文が縦位に施文される。推定口径36.8cm。

50・54は、2本沈線により渦巻き状のモチーフを描出している。

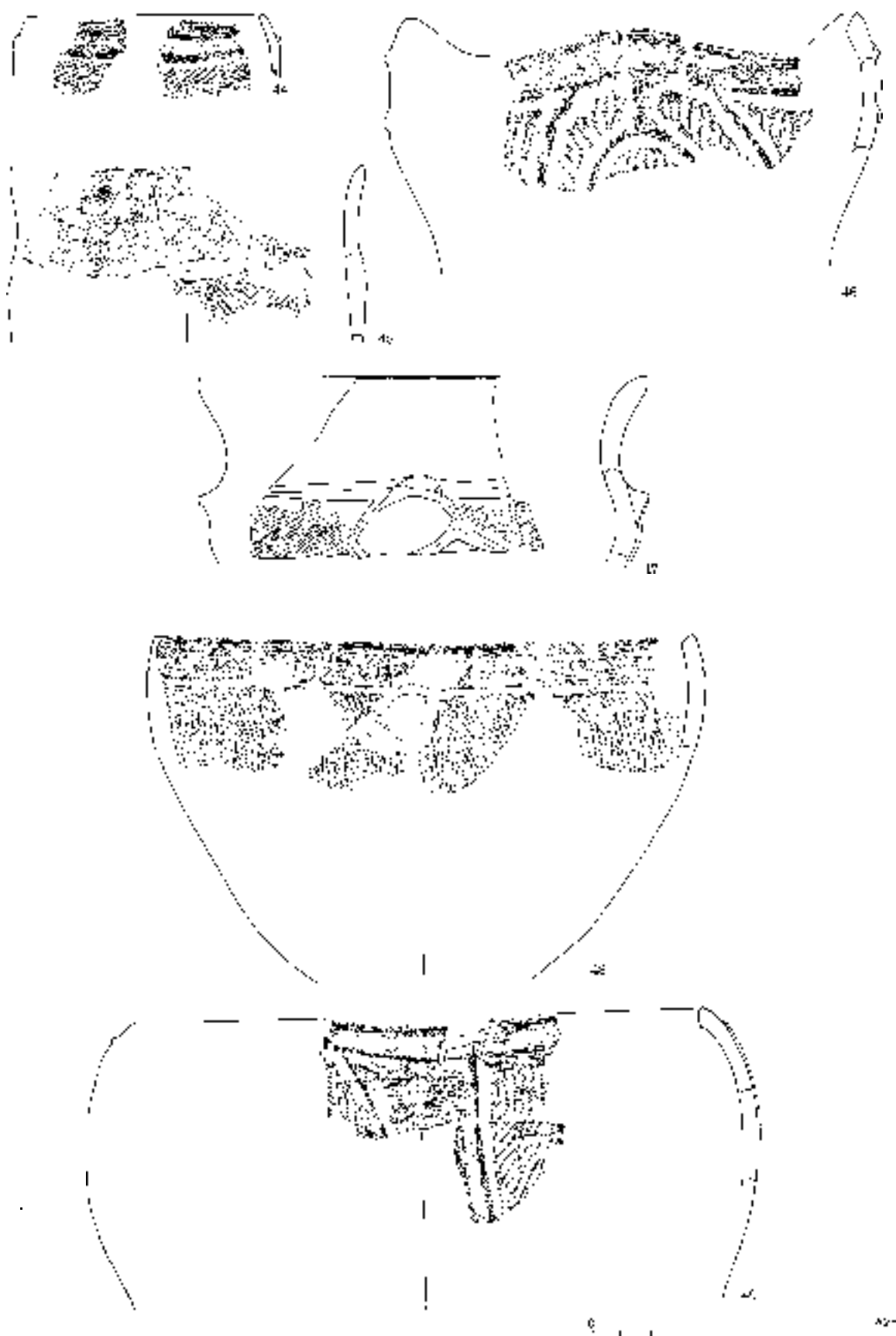
51～53・58は、吉井城山タイプの土器。51は、胴部上半の波状モチーフに対応して、胴部下半の鋭角の逆「U」字状沈線が施文されている。52は、波状モチーフ間に逆「U」字状モチーフが貫入している。58は、胴部上半の地文と磨消部が反転し、ネガ文となっている。

64は、床面に接して検出された胴部下半の土器。底径9.2cmを測る。器高の低いキャリパー形の器形を呈するものと思われる。地文に縄文の施文された胴部には沈線が垂下し、磨り消された懸垂帯幅が、縄文帯とほぼ同じ幅となっている。胴部径の割りに器高が低く、胴部の懸垂文の上端が閉じかかっている箇所もあり、大木9式土器の胴下半部の可能性がある。

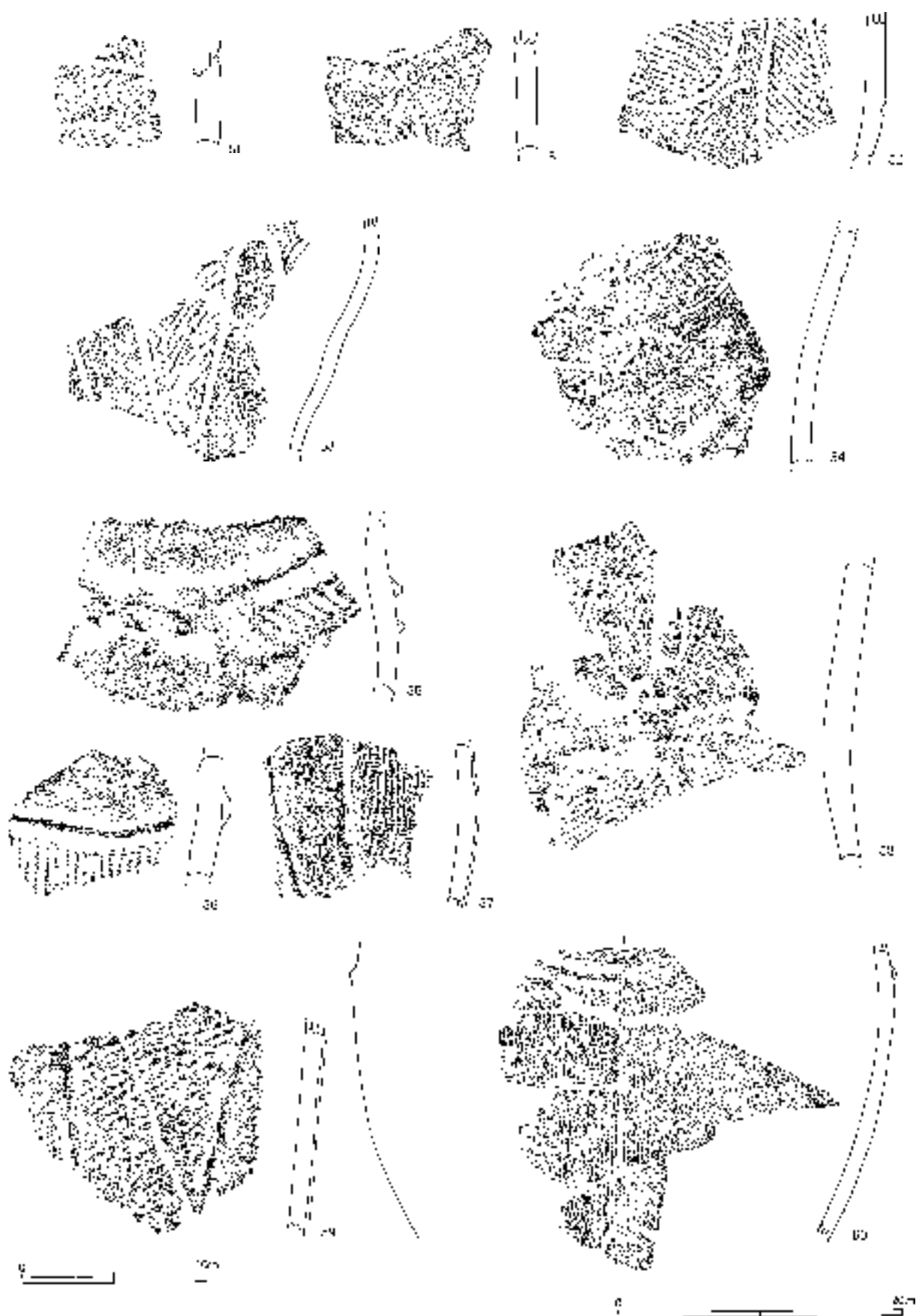
65は、断面三角形のナゾリを加えられた隆帯が垂下する胴部破片。短冊状の区画になると推定される。

66は、単節RL縄文が斜位に施文された胴部下半の土器。底径は、8.8cmと小形で、やや張り出す。

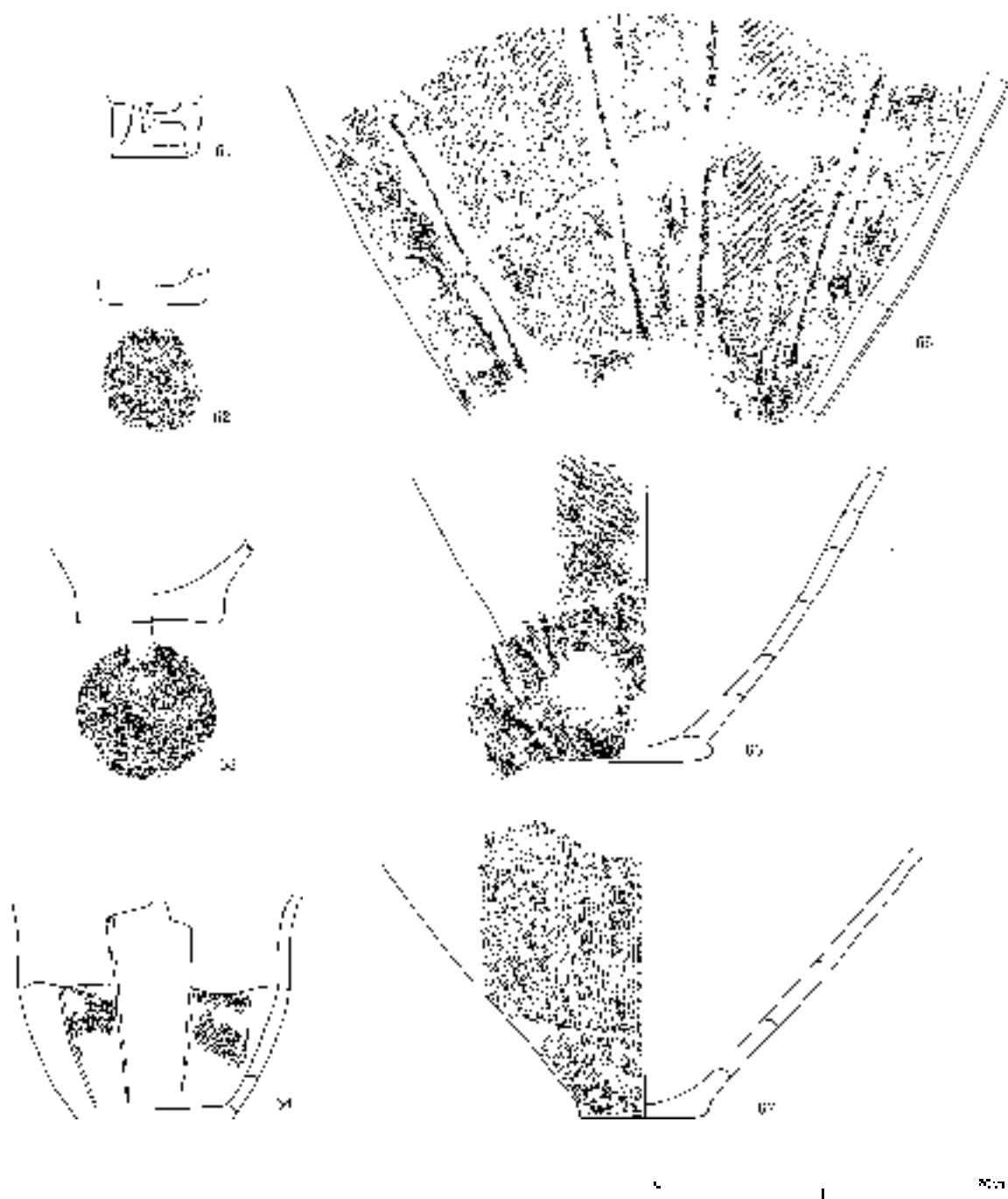
67は、櫛歯状工具による条線が縦位に施文される胴部下半の土器。底径7.6cm程の小型の底部から急激に広がる器形は、両耳壺または、鉢形土器の胴部下半と推測される。



第14図 第3号住居跡出土土器(3)



第15図 第3号住居跡出土土器(4)



第16図 第3号住居跡出土土器(5)

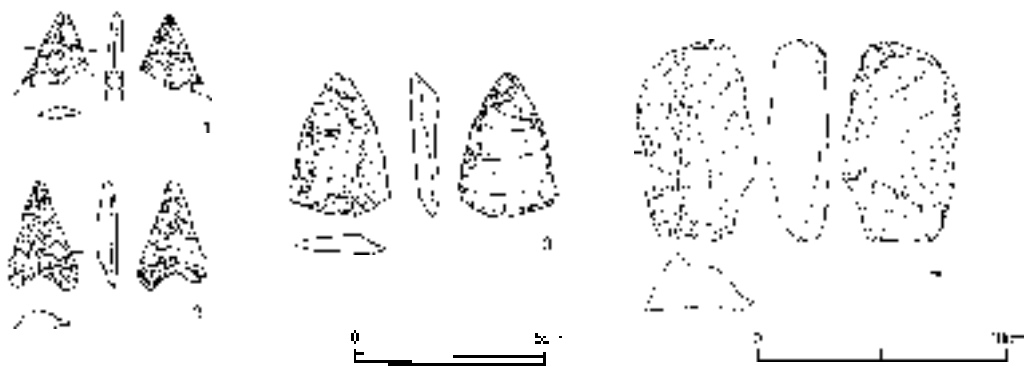
61～63は底部破片。61は、小形の台付土器。細い沈線が垂下しているが、モチーフは不明。

石 器（第17図） 1・2は石鏃。1は、下端部を欠損する。薄い素材を使用しており、押圧剥離による形成加工を施している。2は、凹基無茎鏃。分厚い石鏃で、側辺には鋸歯状を呈するため、押圧剥離ではなく、間接打撃による成形加工の可能性はある。剥離面の切り合いを見ると、凹部は成形加工の最後の段階で作られている。

3は、石鏃の未成品段階と思われる二次加工のある剥片。特に下辺と腹面の一辺に片面からの連続剥離を持つ。また、石鏃製作の途中で、先端部のバルブを除去して厚さを減じようとしたが、除去し切れていない状況が認められる。

4は、粘板岩製の石核。左右の両側辺からの両極打撃によって大型の剥片を剥ぎ取る。恐らく、剥片を剥離する目的で成形された石核とは違い、成形されずに原石をそのまま石核として用いたものと考えられる。

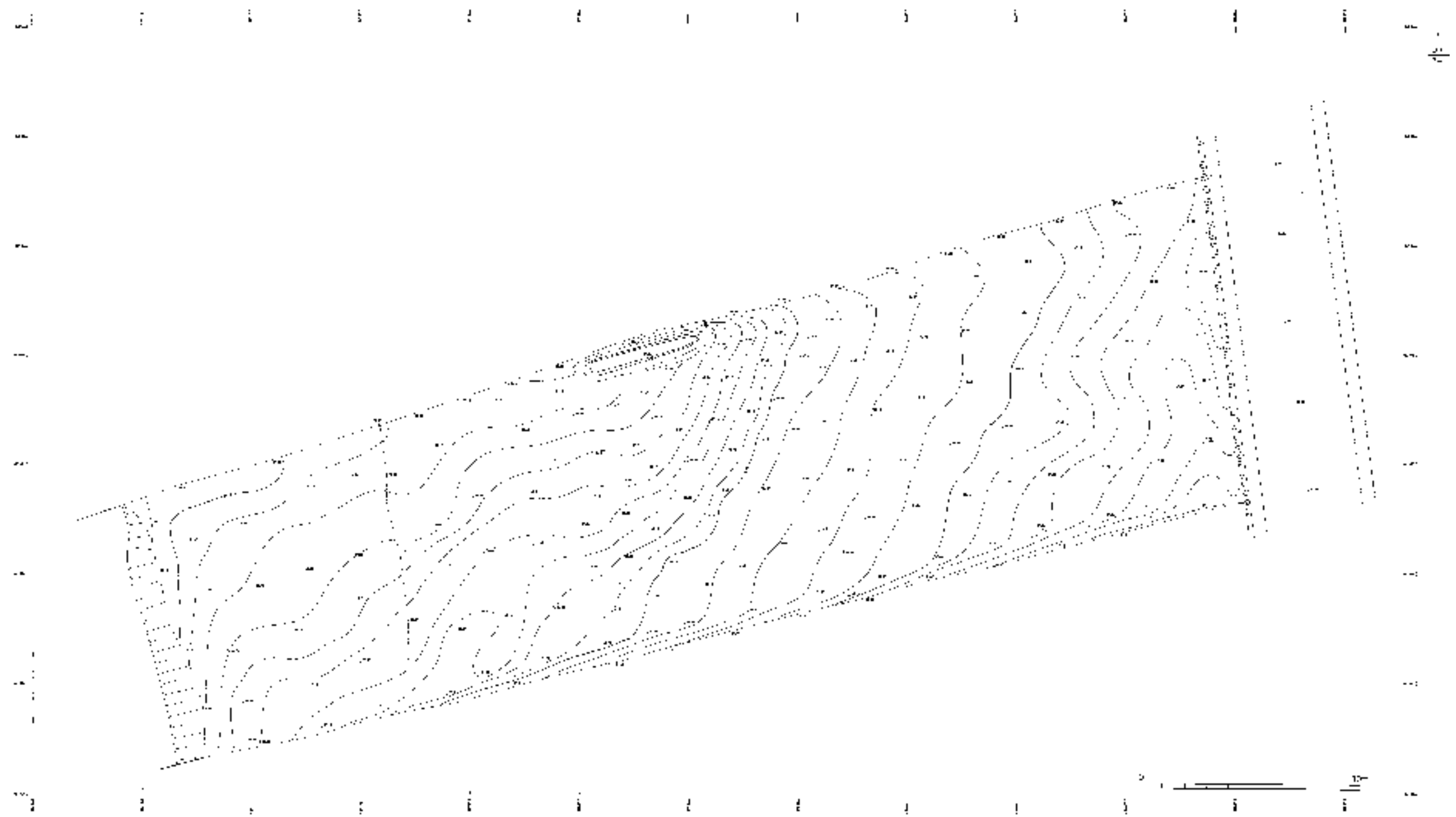
時 期 床面に接する状態で出土した、第17図64に本住居の時期を求め、加曾利 E 3 式期。覆土中の遺物は、1 段階新しいと判断される。



第17図 第 3 号住居跡出土石器

第 2 表 住居跡出土石器計測表

図版番号	出土地	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量 (g)	備考
17－1	SI3-82	石鏃	チャート	(2.1)	(1.7)	(0.4)	0.9	
17－2	SI3-44	石鏃	チャート	2.9	1.8	0.6	1.9	
17－3	SI3	剥片	チャート	3.8	2.7	0.8	6.2	石鏃未成品
17－4	SI3-46	石核	粘板岩	8.0	4.7	2.5	93.4	

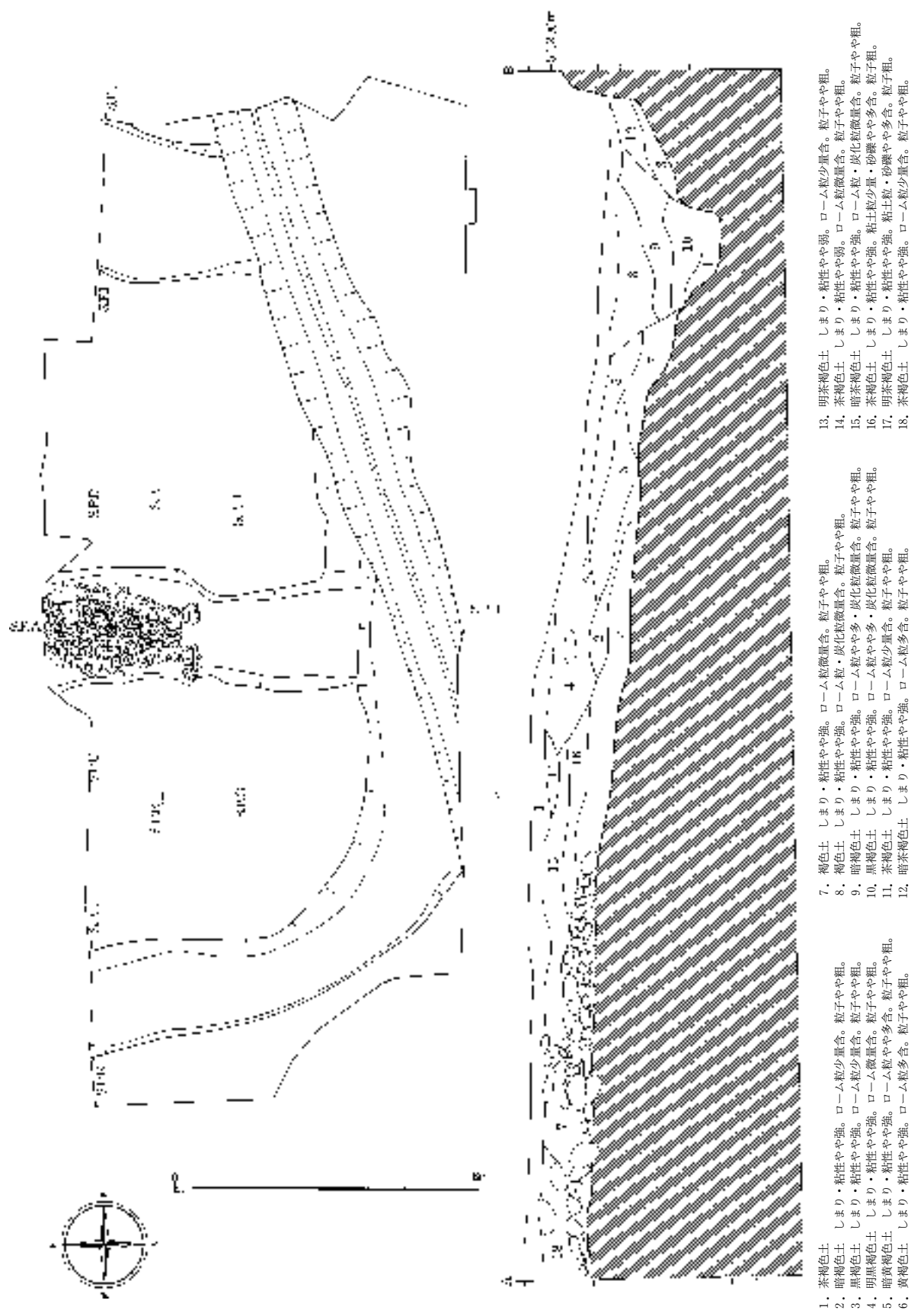


第18図 第3号墳現況測量図

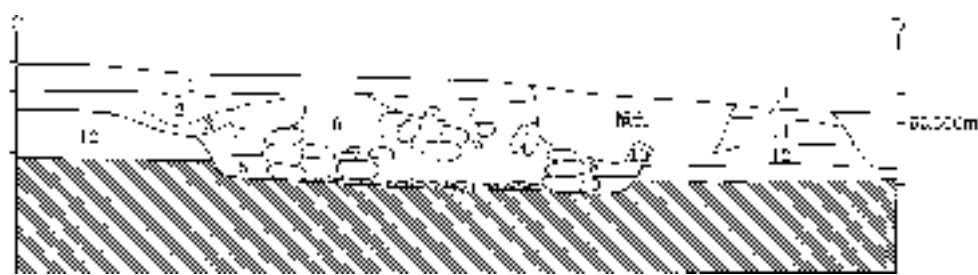
第3節 古墳時代の遺構と出土遺物

第3号墳 (第8・18～27図：図版3～9・12・19)

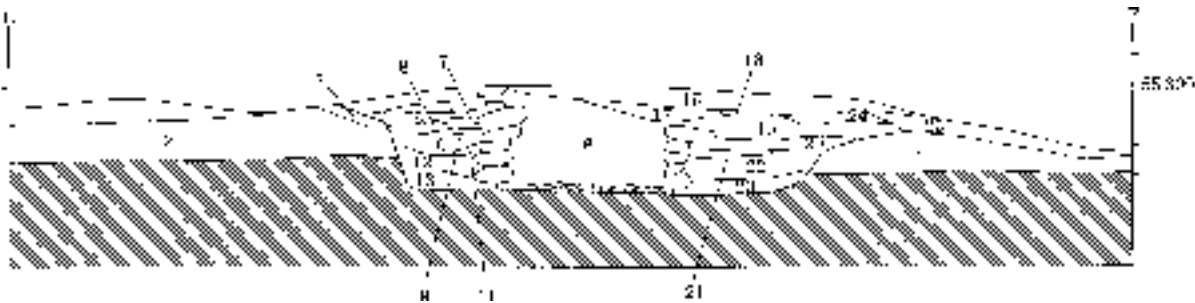
位 置	調査区の北側中央に石室が位置し、東・西の周溝が確認されている。南側の周溝は、中世の溝によって切られている (第8図)。
墳 丘	本古墳は、畑の耕作により削平されていたが、現状で地膨れ状の高まりが確認されていた。第18図は、その現況測量図である。現況では、調査区中央北側を頂点とする直径20m程の高まりが確認されている。墳丘西側裾部分において、周溝部に当たるコンタの落ち込みがかるうじて確認されるが、東側裾部においては、確認されない。地形的に南東側へと傾斜していることから、墳丘盛土の流失によるものと推測される。 確認される墳丘は、盛土によって、旧表土面から直に積み上げることによって構築されている。南裾が中世の溝によって切られており、全体が畑の耕作により削平され、遺存状態は思わしくない。石室付近で、旧表土面より最大で65cm程の盛土を確認している (第20図)。また、葺石等の外部施設は確認されていない。 調査区内における旧表土面は、多少の起伏はあるものの概ね平滑な面で、南東方向へ緩やかな傾斜をもって下がっており、調査区周囲で確認される現地形の傾斜方向と合致している。旧表土の層厚は、15～20cmと薄いことから、旧表土形成後の東側への流失、あるいは、あまり発達しない環境下であったことがうかがえる。墳丘直下の旧表土面においては、炭化物や焼土は確認されていない。
周 溝	周溝は、南側を、中世の溝により切られているが、石室より続く前溝状前庭部の取付きを確認している。幅3.8～1.9m、深さ0.7m～0.35mを測る (第21図)。西側で深く、東側の周溝は浅くなっており、石室前面にむかって、徐々に深くなり、石室前面が最も深くなるものと推測される。
規 模	平面形状は、東・西・南辺がそれぞれ潰れており方形に近いが、明瞭なコーナーは確認されず、方墳である積極的な根拠は見出せない。円墳と判断される (第19図)。 推定される古墳の規模は、石室奥壁部に推定される古墳中心点を基準に計測した場合、周溝内側で、17.6m、周溝外側で24.2mを測る。
石 室	石室は南面し、玄室部と羨道部によって構成される、地山掘込みにより構築された横穴式石室である。玄室の平面形は、側壁が弧を描き奥壁に向かってカーブを強める胴張形を呈している。羨道部の両側壁は概ね直線に延びており、石室内に扁平な小口面がくするように河原礫を配して構築されている (第22図)。石材は、最大で根石部分から7段程の石組みを検出し、舗石面からの高さ75cmを測る側壁を検出している (第24・25図)。 閉塞施設は石室入口部の羨道部に確認されている。不揃いな拳大の垂円礫を、少量の白色粘土塊とともに、雑然と詰め込んだものである。この閉塞礫の下部には、一番手前の羨門部で約23cmの明茶褐色土の堆積が、確認されている。追葬時において取り残された土の可能性も考えられる。 玄室の床面には、壁体構築の後河原石を敷き詰めることで舗石面としており、羨道部



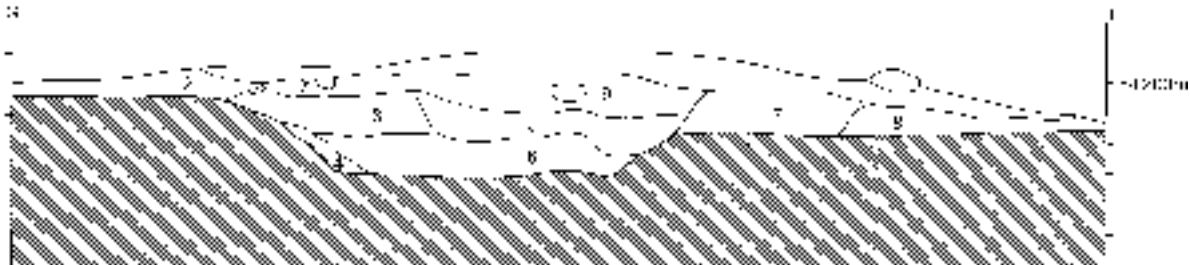
第19図 第 3 号墳平・断面図



- 1. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。耕作土。
- 2. 明黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック多含。粒子やや粗。
- 3. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック多含。粒子やや粗。
- 4. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。砂粒・亜円礫少量含。粒子粗。
- 5. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
- 6. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量・粘土やや多含。粒子粗。
- 7. 褐色土 ローム粒・亜円礫少量含。粒子粗。
- 8. 灰褐色砂礫層 しまり強。粘性弱。
- 9. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック多含。粒子粗。
- 10. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子粗。
- 11. 明黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子粗。
- 12. 黒褐色土 しまり・粘性強。旧表土。



- 1. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
- 2. 黒褐色土 しまり・粘性強。旧表土。
- 3. 明黄褐色土 しまり・粘性強。ローム粒多含。粒子やや粗。
- 4. 黄褐色土 しまり・粘性強。ローム粒多含。粒子やや粗。
- 5. 褐色土 しまり強・粘性やや弱。1～6 cm程の亜円礫・砂粒多含。粒子粗。
- 6. 黄褐色土 しまり・粘性強。ローム多含。粒子やや粗。
- 7. 茶褐色土 しまり強・粘性弱。砂粒多含。粒子やや粗。
- 8. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
- 9. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
- 10. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック多含。粒子粗。
- 11. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック多含。粒子粗。
- 12. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック多含。粒子粗。
- 13. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック多含。粒子粗。
- 14. 明茶褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒少量含。粒子細。
- 15. 明茶褐色土 しまり・粘性やや弱。耕作土。
- 16. 明褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒・亜円礫少量含。粒子やや粗。
- 17. 茶褐色土 しまり強・粘性やや弱。砂粒・亜円礫多含。粒子やや粗。
- 18. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
- 19. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック多含。粒子粗。
- 20. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック多含。粒子やや粗。
- 21. 褐色土 しまり・粘性やや強。砂粒・亜円礫多含。粒子粗。
- 22. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム・ロームブロック多含。粒子粗。
- 23. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム・ロームブロック多含。粒子やや粗。
- 24. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム・ロームブロック多含。粒子やや粗。
- 25. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。



- 1. 茶褐色土
- 2. 明茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子粗。
- 3. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子粗。
- 4. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや細。
- 5. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
- 6. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
- 7. 茶褐色土 しまり。粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
- 8. 黒褐色土 しまり・粘性強。旧表土。
- 9. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。

第20図 第3号墳石室断面図

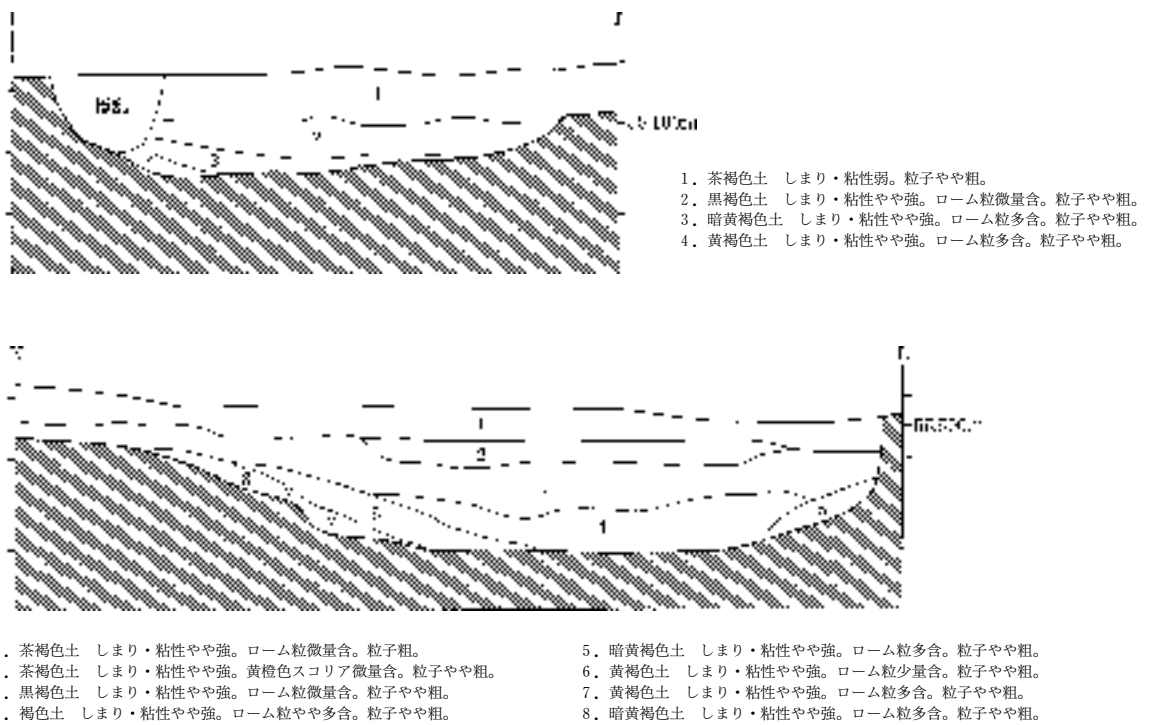
床面も同様であるが、羨門付近には確認されない。

羨道部と玄室の境には、大きさを揃えた長径20cm程の楕円礫を、2列2段にわたり、主軸方向に長軸を揃えて敷き詰めている。

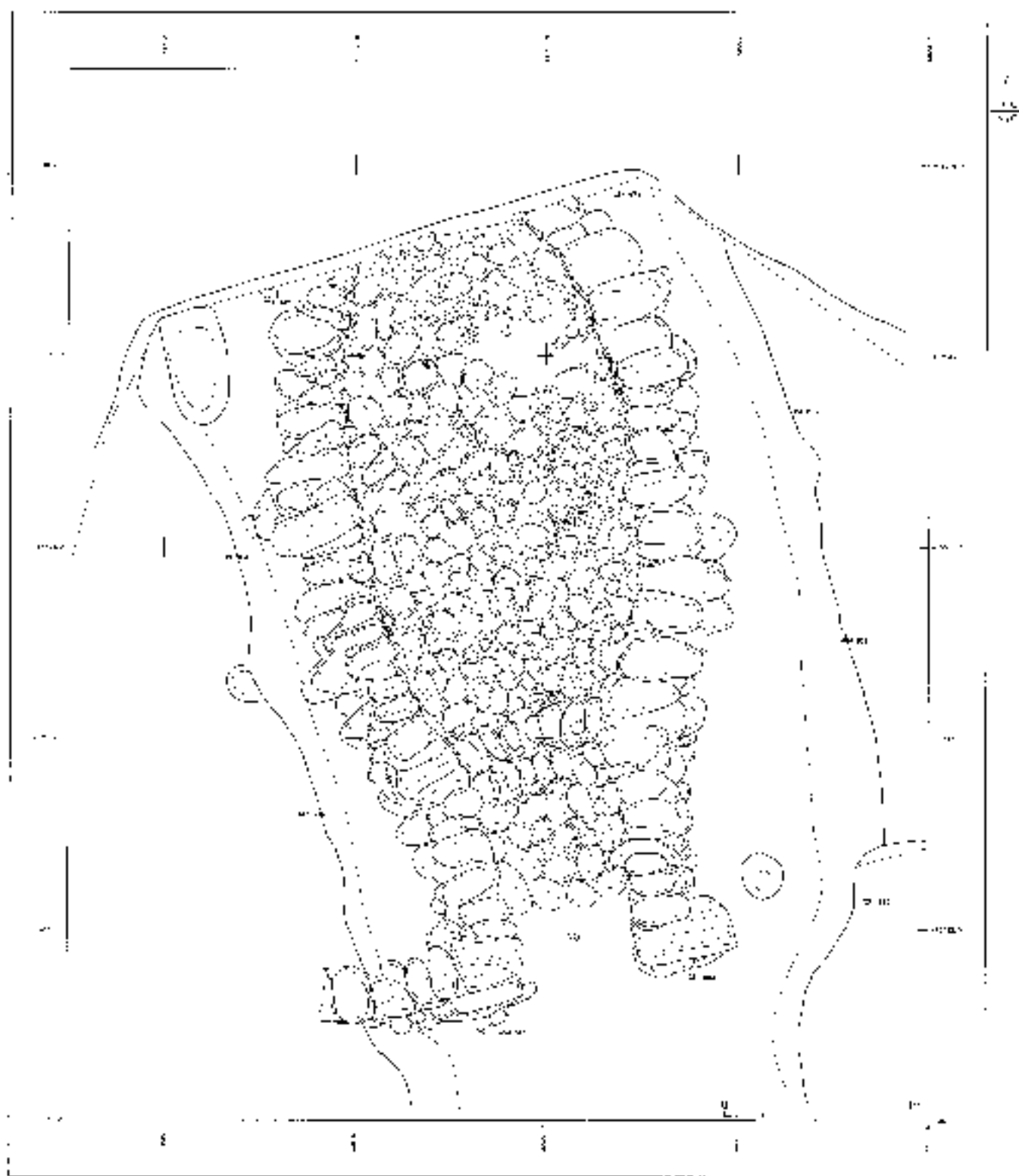
羨門は、他の側壁とは異なる石材・形状の礫が用いられている。西側側壁で5段57cm、東側側壁で2段28cm程の石組みを確認している。両側壁とも、一番下の根石は、チャートの大型礫、2段目は結晶片岩の角礫を使用している。3段目以降は西側側壁のみの残存であるが、3段目は結晶片岩の角礫、4段目は緑泥片岩の板石、5段目は再びチャートの角礫が用いられている。石室正面を意識して、正面と内面に平坦な面がくるように石材を採取したものと推測される。

推定される石室の規模は、石室全長 a - (3.9) m、玄門部を除く玄室長 b - (2.5) m、玄門部を含む玄室長 c - (2.7) m、玄門部を除く羨道長 d - 1.2m、玄門部を含む羨道長 e - 1.4m、玄室最大幅 g - 0.8m、玄室と玄門部の連結部分幅 h - 1.1m、玄門部幅 i - 0.8m、羨道と玄門部の連結部分幅 j - 0.8m、羨道部入口幅 k - 0.6m。面積は、玄室 (3.12) m²、羨道0.83m²を測る。主軸は北に対し11°西へ振れる。

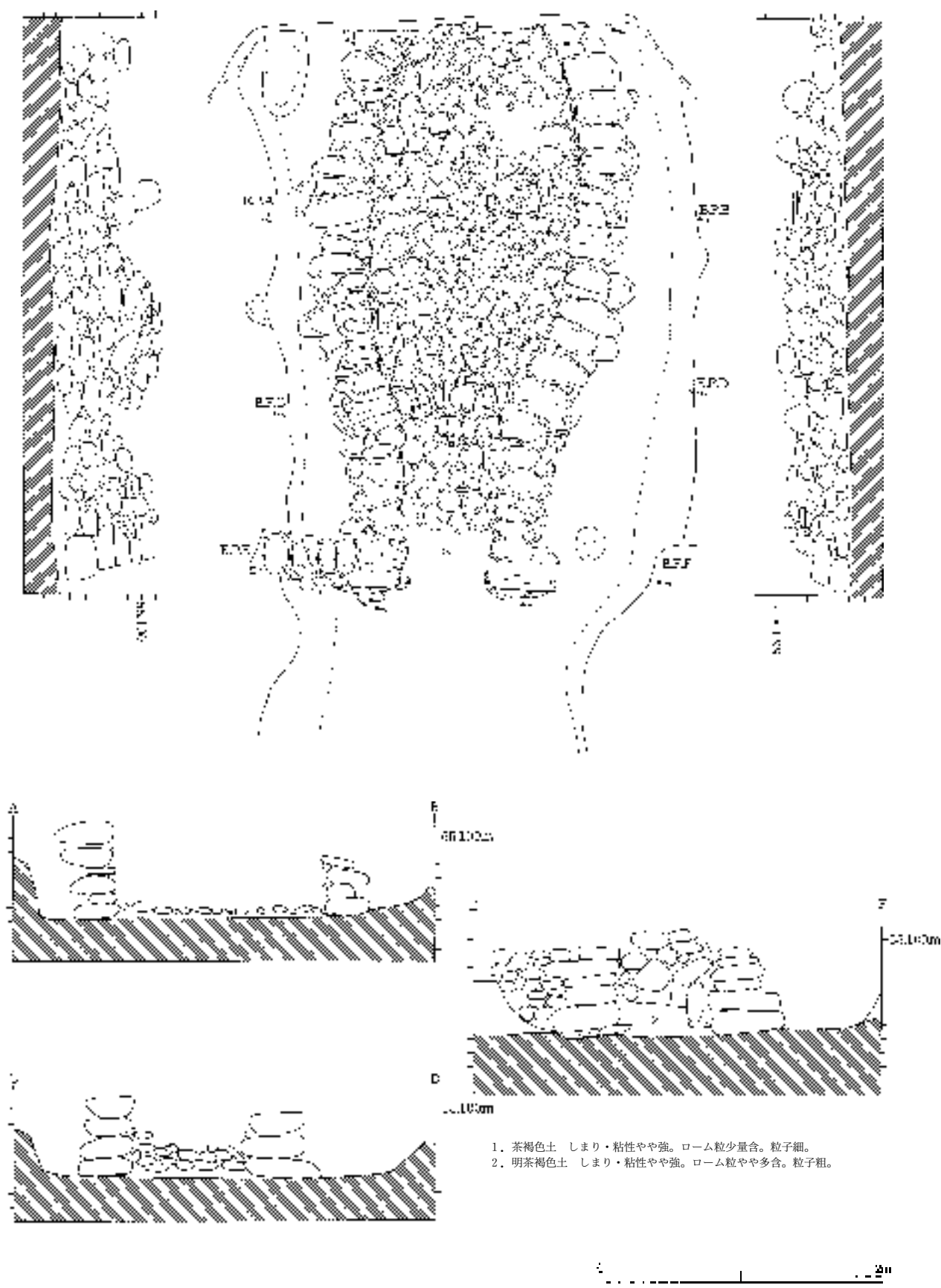
石室の掘り方は、平面方形を呈し、長軸で (4.2) m、単軸で3.1m、掘込みの深さは、東側で23cm、西側で41cmを測る。断面形態は、逆台形を呈しており、その法面は、東側で約43°、西側で約73°の傾斜をもっている。石室壁体と掘り方の法面との間隔は、東側で25cm、西側で15cmを測り、南側の前溝状前庭部に続く塵取り状を呈する。



第21図 第 3 号墳周溝セクション



第22図 第3号墳石室平面図



第23図 第 3 号墳石室平面・外面立面図

石室基底石の設置箇所付近は、土壌が硬化しており、設置面に対する締め固めが行われたことがうかがえる。

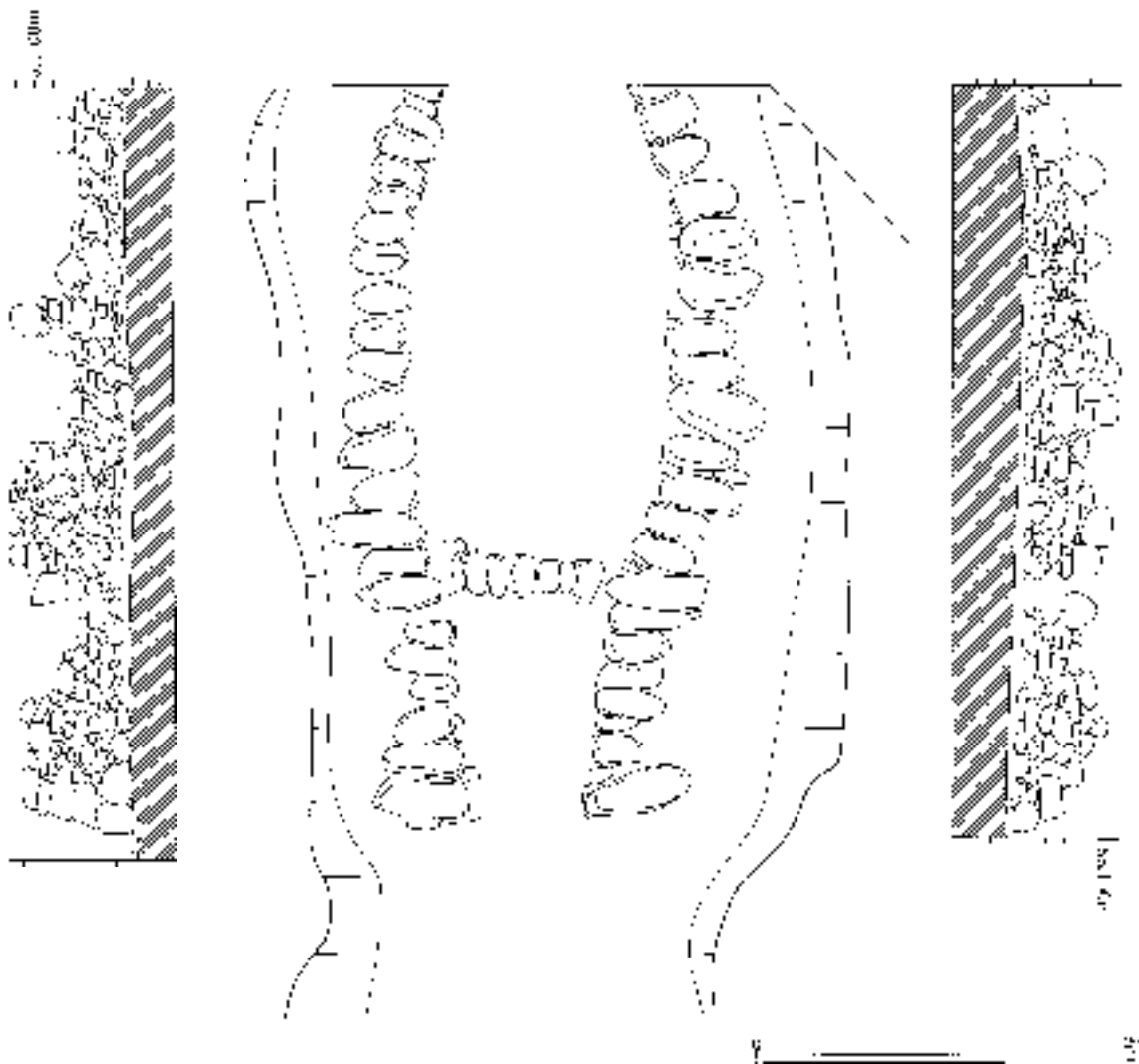
遺物出土状態
(第25図)

石室外からは、石室を中心とする墳丘盛土～耕作土中から、須恵器大甕片が9点出土している。全て小破片となっており、接合率も低いことから、故意的な破碎を受けていることが推定される。この他、前溝状前庭部からは、砥石1点と土師器の短頸壺が1個体潰れた状態で出土している。底面よりやや浮いた状態で出土しており、追葬時に属する遺物の可能性も考えられる。

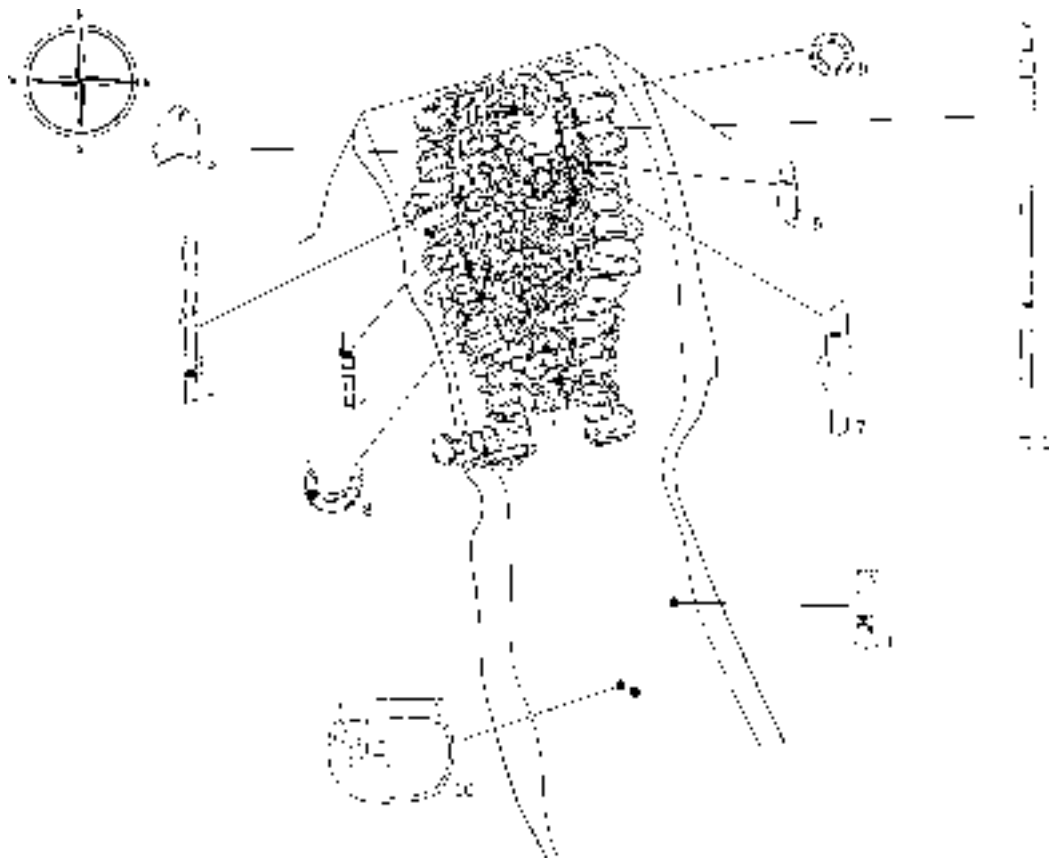
石室内からは、玄室内より、鉄製大刀1、鉄鏃3、刀子2、鉸具1、金銅製耳環1が出土している。大刀は鐔が外れており、落下した側壁礫の下より出土しており、玄室は盗掘等の攪乱を受けていることが推測される。

出土遺物
(第26・27図)

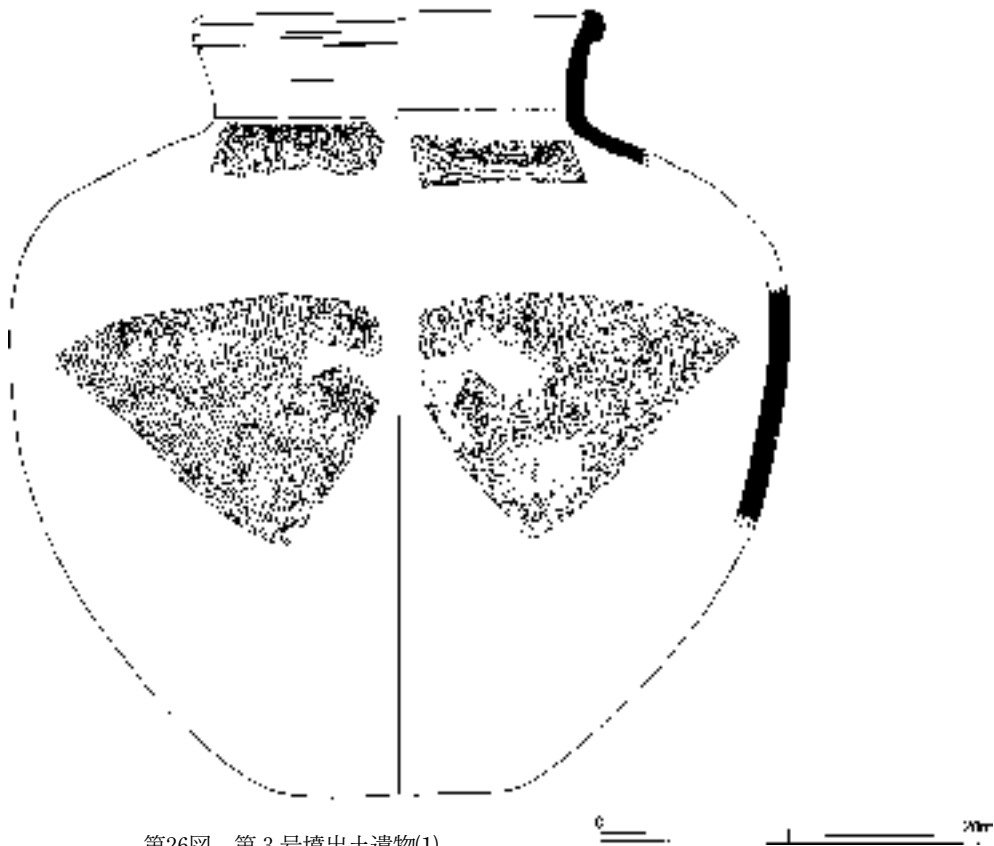
1は、墳丘上から出土した須恵器の甕。口縁部片と胴部片は接合しないが、同一個体と判断した。推定口径20.2cm、頸部最小径17.8cmを測る。口唇部は玉縁状を呈しており、やや外削状を呈する端部には浅い沈線状の窪みがロクロ成型によって巡らされている。また、外面の口唇部直下には、あまり鋭くない細い隆帯がロクロ成型により作りだされ



第24図 第3号墳石室基底石平面図・内面立面図



第25図 第 3 号墳遺物出土状態



第26図 第 3 号墳出土遺物(1)

ている。口縁部は、頸部のくびれ部で胴部と分かたれており、外傾の度合いは低いものの、外反する。胴部は、肩部がやや張る器形と推測される。器面調整は、口縁部内外面がロクロ成型で、胴部外面は溝と木目の直行する叩き板を用いた疑格子タタキ、内面は木目の横切る同心円当具を用いた所謂青海波文である。焼成は極めて良好かつ堅緻であり、胎土に黒色粒子・白色粒子が散見される。

第27図1～9は、石室床面より出土したものである。

1は、刀身平棟平造り、カマス切先を呈する直茎両区鉄刀である。区は棟区と刃区の両区で、鉄製の板鐔が付く。区に接して幅1.8cm程の筒型の鉄製釰が取り付けられている。茎部には、長さ2.3cm程の柄木を留めるための目釘が1本、茎尻近くに残っている。刀刃部に比べ茎部が短い印象を受ける。全長90.6cm、刃部幅3.1cm、茎部長9.1cm、茎部幅2.4cmを測る。

2は、鉄製鐔。無窓の平縁で、7.5×5.7cmを測る。断面形は、倒卵形を呈し、中心孔は楕円形を呈する。厚みは0.3cm程で、板状を呈している。

3～5は鉄鏃。3は、無茎の三角形鏃。鏃身部中央やや上寄りに、径1.5mm程の単孔が穿たれている。鏃身長3.2cm、幅2.2cmを測る。4は、鏃身部を欠損する柄部の破片。長頸鏃と推測される。頸部と茎部が棘によって分かたれている。現存長3.7cmを測る。5は、鏃身部先端と茎部を欠く長頸鏃。両刃の端刃鏃で、鏃身部の平面形態は鑿箭形を呈する。頸部への移行部には関を持たないため、その境は不明瞭となっている。現存長8.4cmを測る。

6.7は刀子で、刀身部の断面形状は楔形を呈する。6は、切先部のみ残存し、現存長3.1cmを測る。7は、切先部と柄部を欠損し、現存長7.1cmを測る。

8は欠損するが、鉄製鉸具の輪金と推測される。(2.4)×(3.0)cmを測り、断面は0.5cm程のほぼ円形を呈する。

9は、金銅製耳環。中実の銅芯に金属薄膜を貼ったいわゆる銅地金貼り耳環。表面の肉眼観察では、鍍金した銀板を貼っているものと思われるが、環端面の処理は判然としない。形状は、一部が途切れる「C」字形の環状で、環の断面は楕円形を呈する。長径2.4cm、短径2.3cm、厚さ0.5cm、重量11.7gを測る。

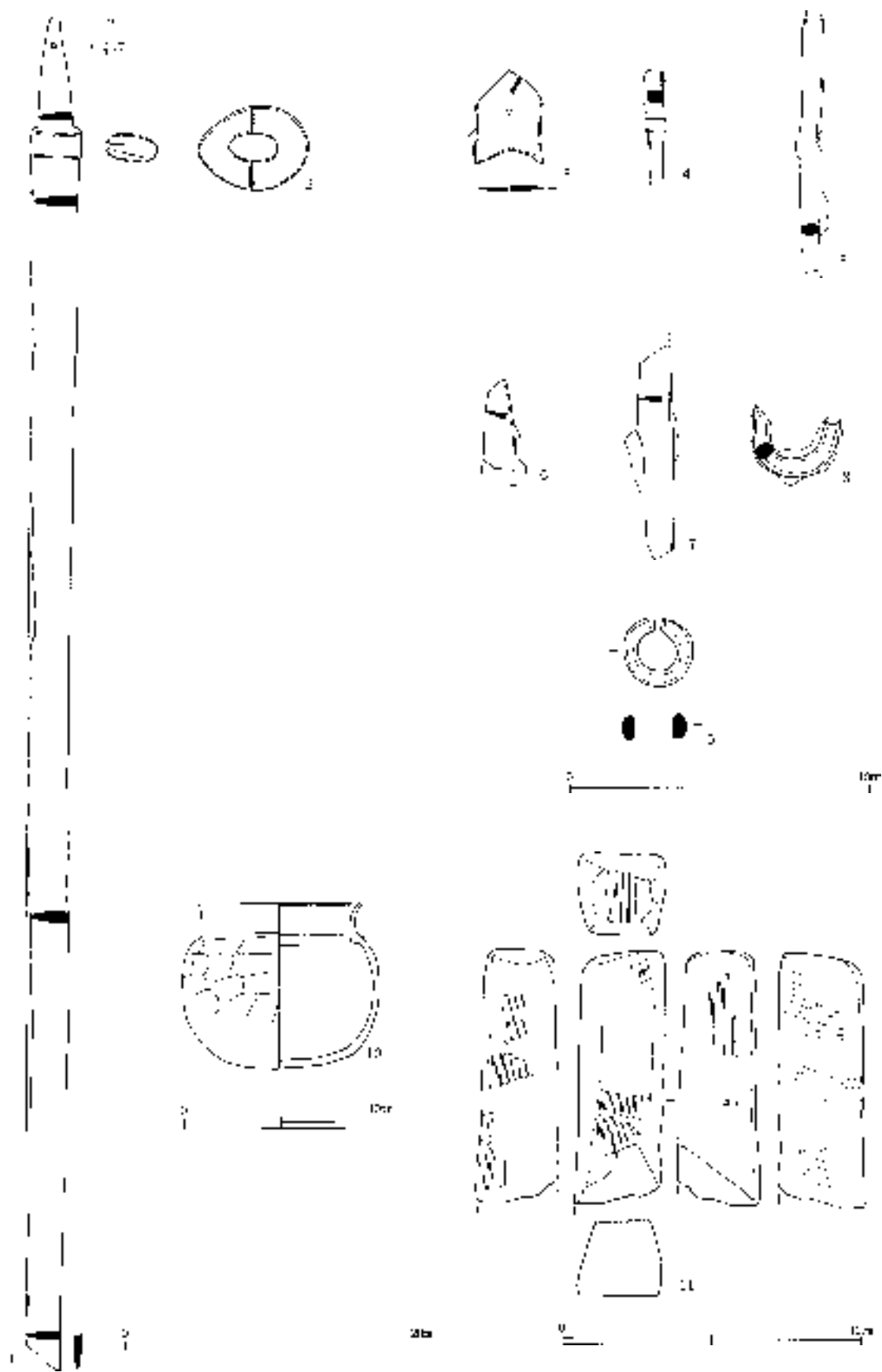
第27図10・11は、前溝状前庭部から出土したものである。

10は、砂岩製の砥石。一部欠損する。残存した五つの面を砥石として使用している。5面のうち4面には、幅1mm程度の線状痕が認められる。残りの1面は平滑に仕上げられている。現存長(8.5cm)、最大幅3.0cm、最大厚2.8cm、重量101.3gを測る。

11は、土師器の短頸壺。口径9.1cm、頸部最小径6.3cm、器高9.2cmを測る。口縁部は肩部より外反気味に立ち上がる。胴部は球胴状を呈し、肩部はあまり張り出さず、底部との間には明瞭な境をもたない。底部はやや平底気味の丸底である。器面調整は、口縁部内外面とも横位のナデ、胴部は外面ヘラケズリで、内面はアタリの無い横位のナデが施されている。焼成はやや良好で軟質。胎土に、黒色粒子・角閃石を少量含む。

時 期

年代が推定される遺物は、石室内に副葬された直茎両区鉄刀は、東日本における終末期群集墳で主体となる形式であり、TK209型式期には出現し、盛行期は7世紀中頃。墳



第27図 第 3 号墳出土遺物(2)

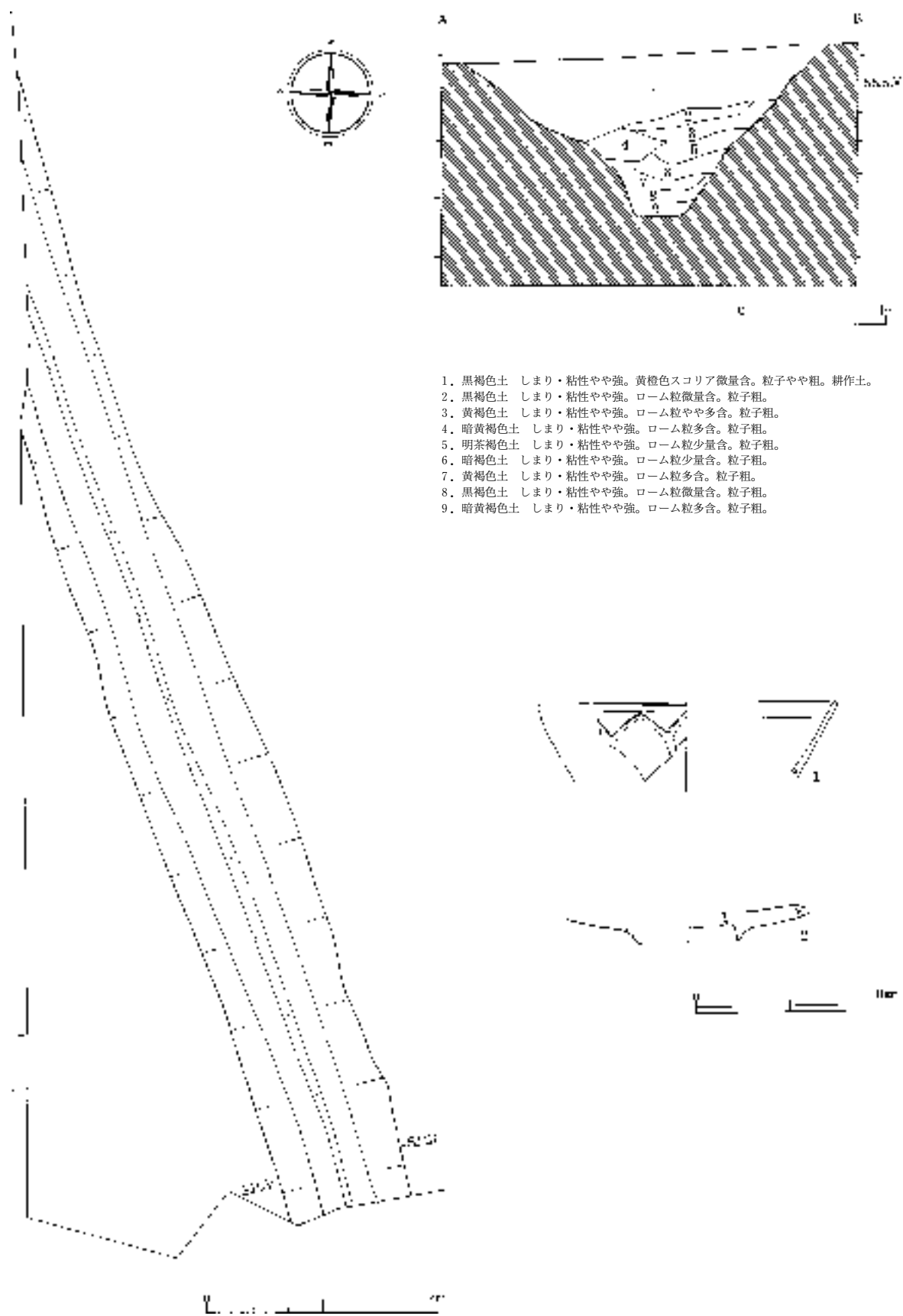
丘上より出土した須恵器甕は、TK209～TK217型式並行と推定され、短頸壺は概ね7世紀代。墳丘上の儀礼行為と推測される、須恵器片の墳丘上からの出土は、北武蔵から上野の後期～終末期小円墳においては比較的一般的にみられるものである。鉄鏃類は、組成・属性とも7世紀代と認識して問題無い。

本古墳築造の年代は、埴輪が樹立されていないこと、石室が胴張形の平面形を呈すること、上記の出土遺物の年代等から、大まかであるが7世紀中葉を前後する時期に求められる。

第4節 中世の遺構と出土遺物

第1号溝（第28図：図版10・12）

位 置	調査区東西方向に、第3号墳南側周溝を切って長さ約20.6mの溝跡が確認されている。W－E方向から約35°振れる。
形 状	調査区内は直線に延び、両端は調査区外にかかり、全体の規模・形状は不明。断面は箱葉研形を呈し、上面幅は最大で2.5m、底面幅は最大で0.5mを測る。掘り込みの深さは、東側へと徐々にその深さを増し、西端部で0.9m、東端部で1.2mを測る。南側法面に、幅0.3m程の平坦面をもつことから、溝の掘り直しが行われた可能性もある。
覆 土	覆土は、9層に分層された。下層の2～9層は、ローム主体土で徐々に埋没した自然堆積を示すが、確認面最上層の黒色土（第1層）は分層できず、ある程度短期間で埋没したことが想定される。
遺物出土状態	覆土上層の黒色土中（第1層）より、青磁片が2点出土している他は、遺物は認められなかった。
土 器	1は、青磁の輪花碗の口縁部破片。内外面に細かい貫入が入る。推定口径15.6cm、残存高4.2cmを測る。龍泉窯産と推定され、13世紀後半に比定される。 2は、青磁の蓮弁文皿の底部破片。見込み部・高台内に粗い貫入が入る。高台部推定径5.4cm、残存高1.8cmを測る。龍泉窯産と推定され、13世紀代に比定される。
時 期	覆土上層より出土した青磁片より判断すると13世紀には、ほとんど埋没しかかっていたことがうかがえ、溝が機能していた時期は、それより若干遡るものと推測される。 尚、本溝の性格については、全体の形態・規模が不明のため、館堀・排水施設・境溝等の性格付けは不明である。付近に中世館跡の伝承・痕跡は確認されていない。



第28図 第1号溝跡

第5節 遺構外出土遺物

縄文時代 土器 (第29・30図) (図版16・17)

遺構外出土土器は、総数1,499点を数える。器形がうかがえるような大型の破片は無く、いずれも小片となって確認されている。古墳構築に伴う採土・掘削により、本来の位置よりかなり移動しているものと思われる。

1は、中期勝坂式土器で、1点のみの確認である。外反する口端部下に連続爪形文を施し、下端に波状沈線を巡らせている。

2～43は、中期加曾利E式土器。

2～4は、口縁部文様帯を持つ。2は、キャリパー形を呈し、口縁部文様帯をもつタイプ。単節RL縄文を地文に、横位に隆帯をS字状に貼付している。3は、口端部が外反し、やや幅広い無文帯を持つ。隆帯を貼付し、口縁部文様帯を構成しているものと推測される。地文に撚糸文を施文している。4は、口縁部に太い沈線で円文を施文している。

5～9は、細い円形竹管の刺突を加える。5は、口縁部の幅狭い無文帯に、2列の刺突を交互に施文している。6は、隆帯によって区画された幅狭い口縁部に1列の刺突を施文している。7は、口縁部上端に幅狭い無文帯をとり、羽状に施文されるRL単節状文の地文上端部に、1列の刺突を加えている。逆「U」字状の磨消懸垂沈線文が施文されている。8は、逆「U」字状を呈する幅狭い二条の沈線間に、単節LRの縄文を充填し、刺突を加えている。逆「U」字状に区画された無文の懸垂文内にも刺突が加えられている。

9～11は、口縁上端に細いRL単節状文を横位に施文している。11は、沈線が横位に施文されるが、文様構成は不明。

12～19は、口縁部上端に沈線で区画された無文帯を持ち、以下単節縄文が斜位に施文される。12・19は口縁部が内湾する。

20は、いわゆる吉井城山タイプの土器と推測される。口縁部下に沈線を巡らせ、逆「U」字状の懸垂文を施文している。

21・31は、小片のため文様の全体構成が確かでないが、沈線で、三角形文と円文による抱球状のモチーフをとるものと推測される。沈線区画された中には、縄文が充填される。

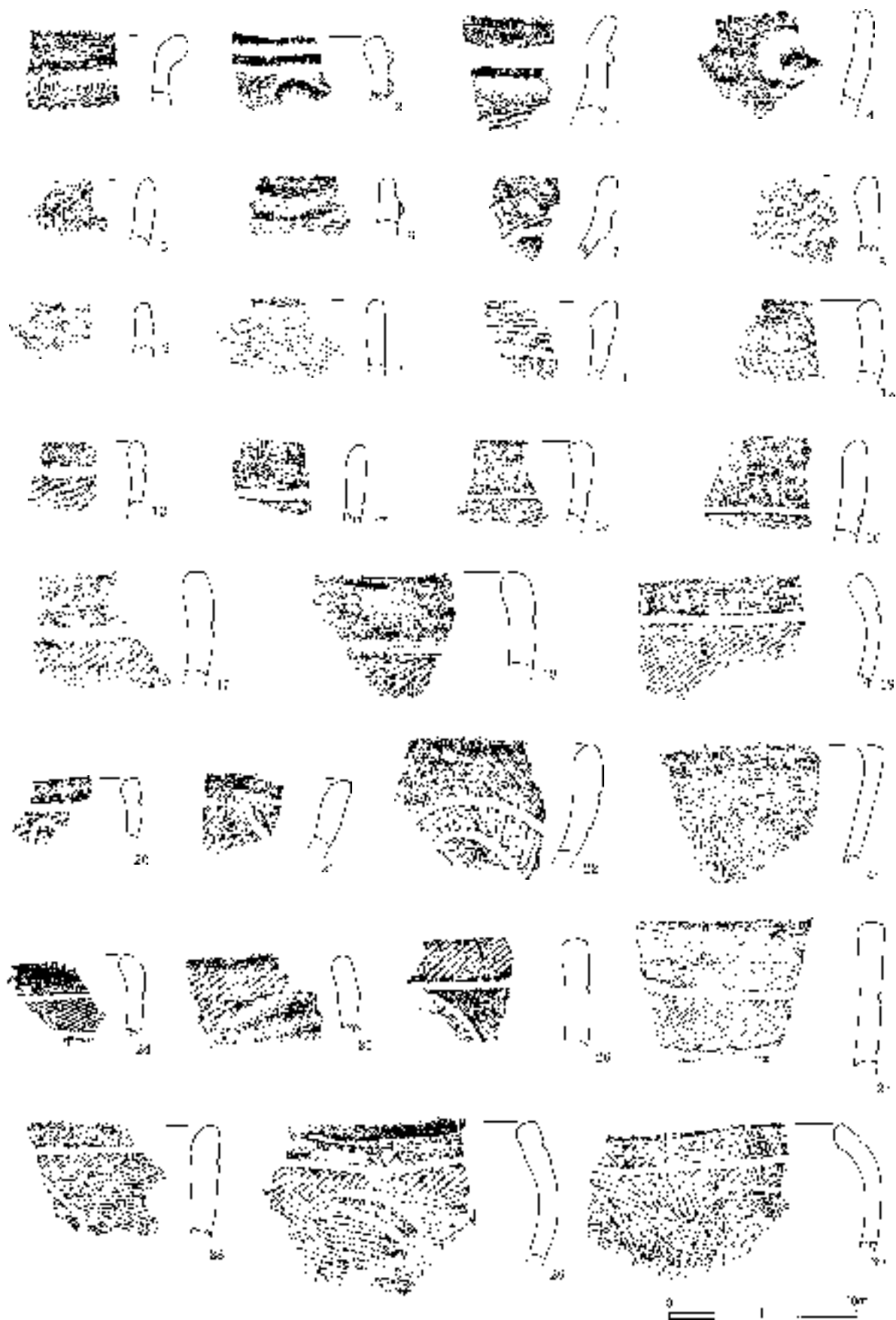
22・23・25・26は、沈線で区画された中に縄文が充填される。渦巻文または、「J」字状のモチーフが描かれているものと推測される。25・26は、口縁部下に縄文を施文している。

24・27は、横位の沈線間に細かい縄文を充填している。

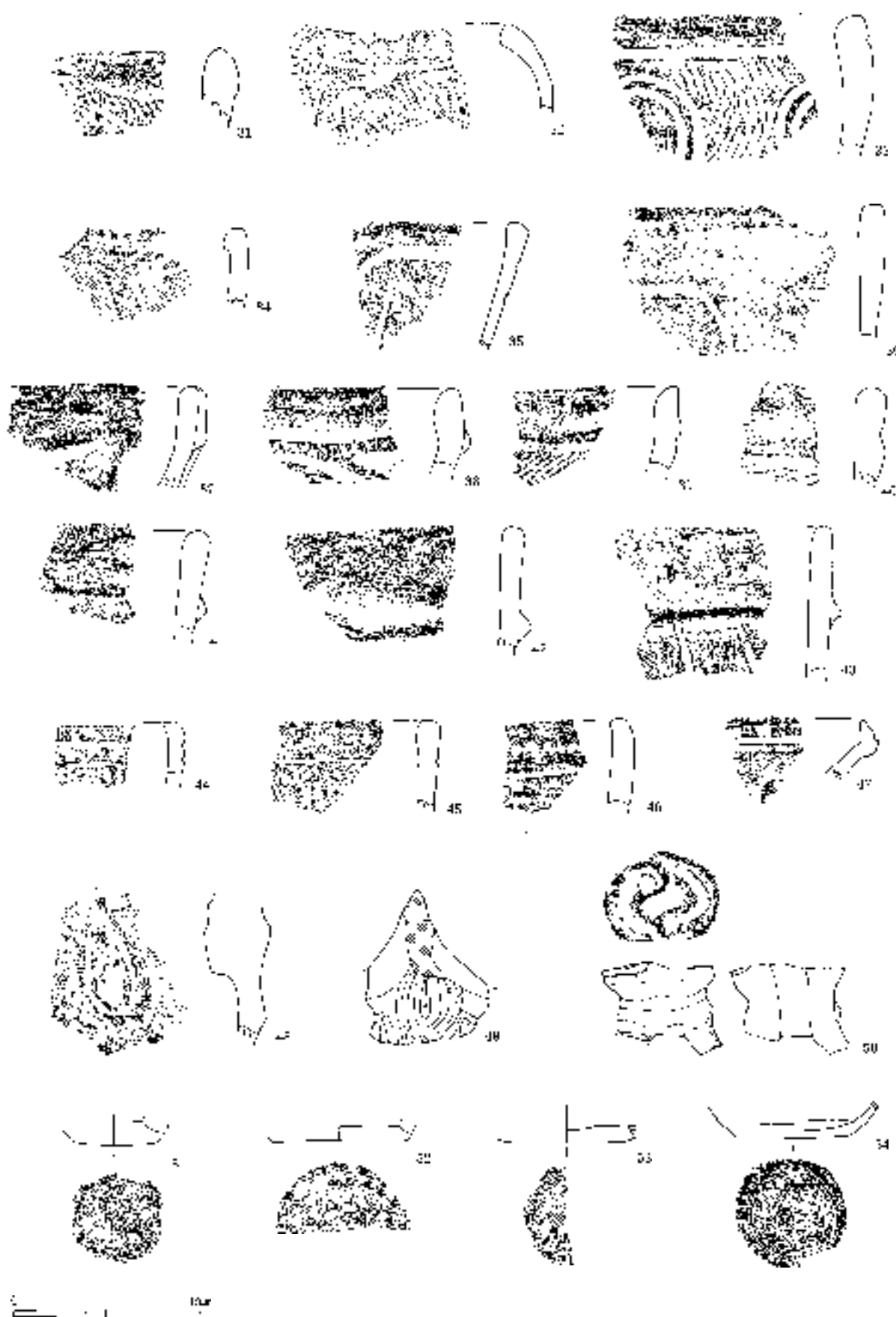
28～30は、逆に、縄文地文に沈線間の部分が無文となる。29は上向きの「C」字状文、30は「J」字状の渦巻きモチーフをとり、口縁部が内湾する。

32は、口縁が内湾し、鋭角な逆「U」字状の沈線間が、地文の縄文が磨消されている。

33は、半截竹管による平行沈線が逆「U」字状に施文され、区画内は地文の縄文が磨



第29図 遺構外出土遺物(1)



第30図 遺構外出土遺物(2)

消される。

34～36は、全体のモチーフは不明で、太い沈線区画内に、細かい縄文が充填されている。

37・38は、1本単位の隆帯で大型渦巻き文を配する、いわゆる梶山タイプの土器の口縁部と思われる。

39～43は、口縁部上端に無文帯をもち、断面三角形を呈する隆帯を貼付し、短冊形のモチーフをとるタイプのものと思われる。43は、横位に巡る隆帯から垂下する2条の沈線間を磨消している。

44～50は、後期の称名寺式土器。44～47は、沈線で区画された中に、円形の刺突を加えている。47のみ口端部に円形刺突が加えられる。48・49は、波状口縁の突起部分。48には、口縁部に、縄文の充填された杵状沈線が施文されており、加曾利E4式の可能性もある。50は、把手部分。上面が平らで、「C」字状の沈線と刺突が加えられている。中央は1.5cm程の孔が開けられている。

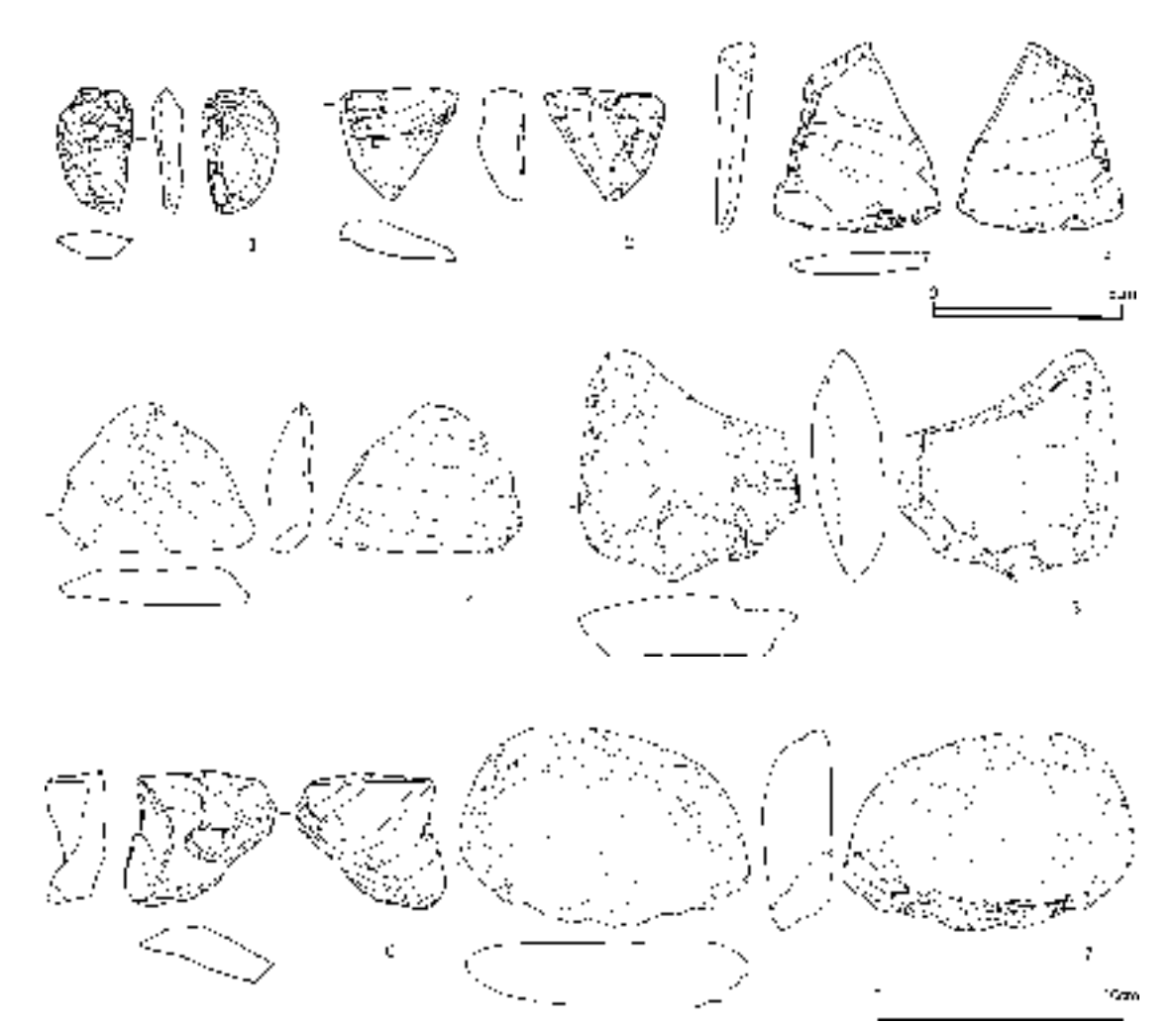
51・52は、加曾利E式に属する底部破片。

石 器 (第31～33図) (図版18)

1～4・6は剥片。1は、石鏃の未成品段階と思われる二次加工痕のある剥片。周囲約1/2に連続した剥離を持つ。片面のみからと、両面からの二種類の加工法が認められる。また、器体に向かって長めの剥離面も特徴的である。2は、明瞭な二次加工痕は認められない。石核整形の際に剥ぎ取られた剥片の可能性もあるが、石鏃作成を目的として剥ぎ取られた、石鏃素材剥片と思われる。3は、二次加工痕のある剥片。剥片の2辺に背面と腹面からの比較的連続した剥離を持つ。大型の石鏃素材剥片の可能性もある。4は、礫打面をもつ剥片。自然石から剥がされた礫打面をもつ剥片で、片面に自然面が残る。剥片の末端の形状は、羽毛状を呈するところと、蝶番状を呈するところがある。6は、微細剥離痕のある剥片。剥片の一辺に幅1～2mm程度の微細な剥離痕を持つ。使用痕か偶発的な現象の結果であるかは不明。

5・7は、礫器。5の刃部は、表裏両面からの連続剥離によって一辺のみに作られる。7は、小型の石皿を打ち割って一辺に刃を付けている。刃部は片面からの連続剥離によって作られている。

8～16は、打製石斧。8は、袂入部から刃部までが残存。両面に自然面を残す。側辺部は左右対称の形を示さず、一方に深い袂りを持つ。刃部も左右非対称であるが、使用による刃部欠損の結果の可能性もある。9は、基部から中央部にかけて、一部欠損する。背面に自然面を残し、腹面は1枚の主要剥離面で形成される。基部を除いて、周囲に連続した成形加工が施される。10は、円形に近い平面形。風化の度合いの違いを持つ剥離面がある。左側辺にわずかに袂りをもつところは、垂直方向の加撃による成形方法が用いられており、他の打製石斧の成形と共通性があること、刃部と思われる部位が鋭利であることから、打製石斧の範疇に含めておく。11は、横断面形が三角形状を呈す。両面に自然面を残す。側辺部は、左右非対称で一方が深く袂れている。袂入部に数枚の剥離



第31図 遺構外出土遺物(3)

第 3 表 遺構外出土石器計測表

図版番号	出土地	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量 (g)	備考
31－1	包含層	剥片	チャート	3.3	2.0	0.9	4.4	石鏃未成品
31－2	包含層	剥片	チャート	3.3	3.2	1.3	9.2	石鏃素材剥片
31－3	包含層	剥片	チャート	5.1	4.4	1.1	16.7	石鏃素材剥片
31－4	包含層	剥片	泥岩	6.0	7.9	1.9	81.3	
31－5	包含層	礫器	砂岩	9.3	8.9	3.0	252.6	
31－6	包含層	剥片	チャート	3.6	4.1	1.6	16.6	
31－7	包含層	礫器	砂岩	8.0	11.7	2.8	407.9	
32－8	包含層	打製石斧	砂岩	(6.1)	6.0	1.8	60.4	
32－9	包含層	打製石斧	粘板岩	9.0	(4.0)	1.4	52.7	
32－10	包含層	打製石斧	粘板岩	6.7	6.2	2.6	119.9	
32－11	包含層	打製石斧	砂岩	9.7	4.7	2.0	102.9	
32－12	包含層	打製石斧	粘板岩	(7.6)	5.6	1.6	83.2	
32－13	包含層	打製石斧	粘板岩	11.4	5.2	2.4	130.7	
32－14	包含層	打製石斧	砂岩	(9.5)	(8.0)	(1.9)	125.1	
32－15	包含層	打製石斧	泥岩	9.5	5.5	2.2	147.4	
32－16	包含層	打製石斧	砂岩	(6.1)	(8.8)	(2.5)	136.9	
33－17	包含層	磨石	砂岩	8.8	6.5	1.7	160	
33－18	包含層	磨石	閃緑岩	10.9	7.9	3.4	470	
33－19	包含層	磨石	石英閃緑岩	(7.0)	7.6	4.2	270	
33－20	包含層	磨石	閃緑岩	(13.2)	13.0	3.7	1060	
33－21	包含層	石皿	閃緑岩	(16.5)	(13.5)	4.9	2500	

面が認められず、一部潰れているので、器体に対して垂直方向の加撃による刃潰し整形加工の可能性もある。12は、基部から中央部にかけて欠損する。両面とも大半はかなり風化した状態で、自然面に近い。周囲に比較的連続した剥離を施し、成形する。13は、横断面が三角形を呈するように背面に左右からの大きく急角度剥離によって稜が形成されている。腹面は、自然面がそのまま用いられている。周囲の加工はわずかで、全体的に素材の形をそのまま利用している。14は、分銅形で、挟入部から刃部までが残存したもの。片面に自然面を大きく残す。挟入部は、階段状剥離が顕著でないため、垂直方向の加撃によって形成された可能性は低いと考えられる。15は、側辺が剥離面の末端が階段状を呈すること、ゴツゴツしていることなどから、ハンマーを垂直にあてて加撃する成形方法が用いられたと考えられる。特に、右側辺に顕著である。刃部は片刃である。16は、刃部のみ残存。片面に自然面を残す。刃部ラインは、ジグザグ状を呈するため、交互剥離によって形成された可能性もある。

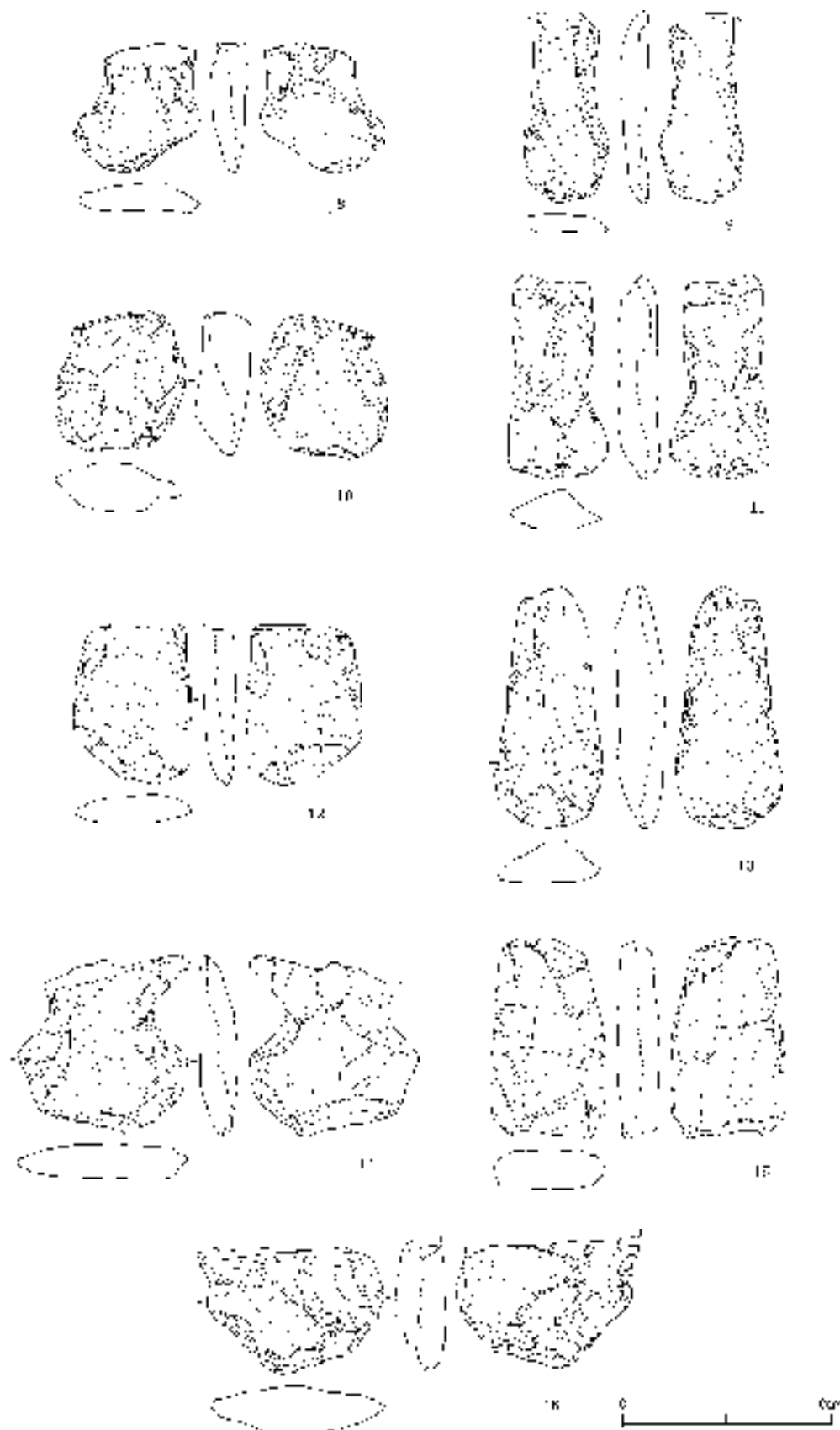
17～20は、磨石。いずれも両面に磨面が認められ、18は、片端部に敲打痕が確認され、叩石としても利用されていたことがうかがえる。

21は石皿。約1/2を欠損する。両面に磨面が認められる。

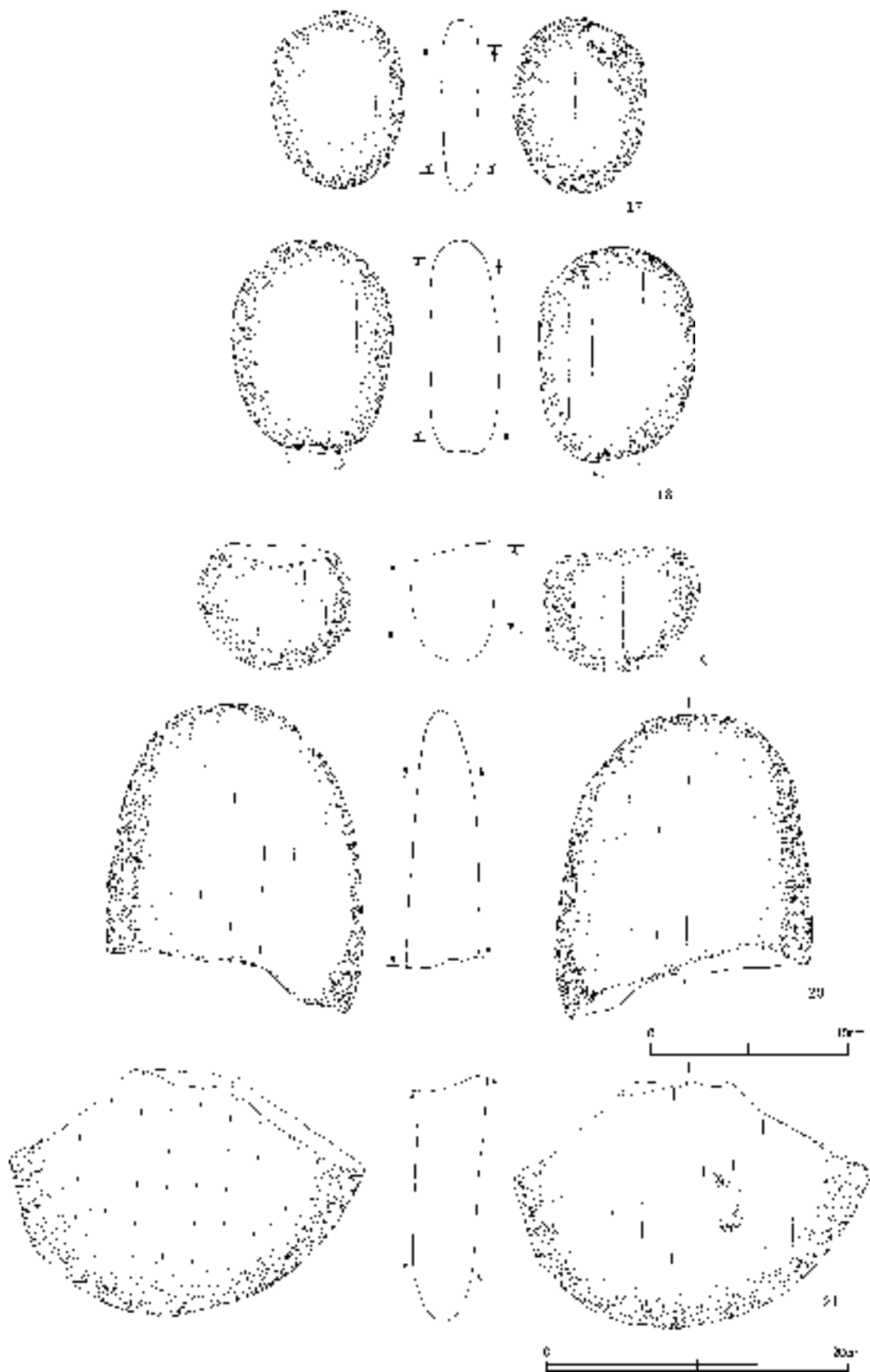
平安時代（第30図）

平安時代の遺構は調査区内に確認されていないが、須恵器片が2点確認されている。

53・54は、須恵器坏の底部。底部に右回転糸切り痕を残す。53は、胎土に海綿骨針を含み、54は、黒色粒子・白色粒子・砂粒をやや多く含んでいる。



第32図 遺構外出土遺物(4)



第33図 遺構外出土遺物(5)

第IV章 考 察

第1節 上前原遺跡出土加曾利E式土器の編年の位置付け

はじめに 加曾利E式土器は、改めて指摘するまでも無く、大正13年に山内清男氏が、八幡一郎氏・甲野勇氏らとともに発掘調査を行った、千葉県加曾利貝塚E地点出土の土器をもって型式設定した、中期後半に属する型式名である。その辺の事情については、柳澤清一氏に詳しい（柳澤：1985・1986）。

研究の現状 しかし、当初より縄文時代中期後半の土器型式は、その細別内容の認識が混乱しており、そのことは既に1970年代に、堀越正行氏により指摘されていた（堀越：1972）。にもかかわらず、現在に至るまで未だに、研究者間によって、その型式観は一致を見ていないのが現状である。

しかし、細別呼称こそ異なるものの、各編年案の大枠は多少の齟齬はみられるものの、ある程度対比が可能な状態であることも事実で、「縄文時代研究者にとって、加曾利E式は一般教養」との見方もなされているのも、また実情である。

型式設定後、細別研究上最大の画期は、1978・1980年に神奈川考古同人会によるシンポジウム（神奈川考古同人会：1978・1980）であり、そして、1981年に行われた日本考古学協会によるシンポジウム（小林他：1981）、1995年縄文中期集落研究グループによるシンポジウム（縄文中期集落研究グループ他：1995）等へと続く、一連のシンポジウム・セミナー系編年案の提示である。蓄積された膨大な広域の該期資料群は、もはや個人での資料収集レベルをはるかに超えている現状がある。

埼玉県の実況 一方、埼玉県では独自の研究が進められている。1970年に『膳棚』遺跡の報告書が刊行され（岩井他：1970）、この報文中において、加曾利E式の細別呼称にローマ数字が使用されたことから、現在に至るまで、埼玉県において使用される該期の細別名称は、ローマ数字が主流となっている。

1982年には、埼玉県埋蔵文化財調査事業団による編年案の提示（谷井他：1982）があり、その後の県内における該期編年の基本となっている。

1990年代に入ると、加曾利E終末期のあり方について、後期の称名寺式との関係から、積極的な見直しが始まり、独自の編年案が提示されている。橋本勉・細田勝・谷井彪氏らによる一連の研究である（橋本：1991、橋本：1994、細田：1994、谷井・細田1995、金子：1997、谷井・細田：1997、上野：1999、上野：2000、谷井：2003、細田：2003、橋本：2004）。もっとも、これら一連の研究は、事業団統一編年というわけではなく、当初示された編年案に、各々修正が加えられ、各研究者間での認識の齟齬が徐々に明らかになっており、その様相は一段と複雑さを増してきている。

本稿では、そういった混乱を認識しつつも、現状でそれを解消するだけの力量を持ち合わせていないため、基礎資料の提示として、近隣遺跡との比較検討を行い、地域的に

限定される江南台地上における加曾利E式後半の様相を概観し、本遺跡出土土器の位置付けを試みるものとする。ちなみに本稿では、加曾利E式の細別呼称にアラビア数字を用いる^(註1)。

江南台地上の
大規模集落

江南台地上における中期の拠点的な集落跡は、荒川上流より、寄居町南大塚遺跡（第34図1；寄居町遺跡調査会：2001）、東国寺東・増善寺遺跡（第34図2；寄居町教育委員会：1982・1993・1995）・むじな塚遺跡（第34図3；寄居町遺跡調査会：1998）・露梨子遺跡（第34図4；寄居町教育委員会：1997・2002、寄居町遺跡調査会：1997）、牛無具利遺跡（第34図5）・深谷市上本田遺跡（第34図6；川本町遺跡調査会：2000）・江南町西原遺跡（第34図7；江南町千代遺跡群発掘調査会：1996）・上前原遺跡（第34図8）と、2～4km間隔で中～大規模な集落跡が存在することが、近年の調査で明らかになってきている。いずれの遺跡も、荒川沖積地を望む江南台地縁辺部（正確には、台地上を開析する小河川に面した、小支台毎の台地縁辺部からやや奥まった地点）に位置しており、後背地に丘陵や山地が控えていることで共通する立地条件をもっており、遺跡相互の関係が注目されるところである。

中でも集落規模がある程度確認できる調査が行われた遺跡として、上本田遺跡と西原遺跡が挙げられる。上本田遺跡は、勝坂3式期から加曾利E3式期にかけて営まれた環状集落であることが確認されている。住居数70軒以上を数え、本地域における拠点的な集落跡であることが確認されている。一方、西原遺跡は、上本田遺跡の下流約2.5kmの地点に位置し、上本田遺跡が急速にその集落規模を縮小する、加曾利E3式期に突然現れ、加曾利E4式期までの短期間に、50軒以上の住居が集中的に営まれた集落跡であることが確認されており、その補完的な関係が興味深い。

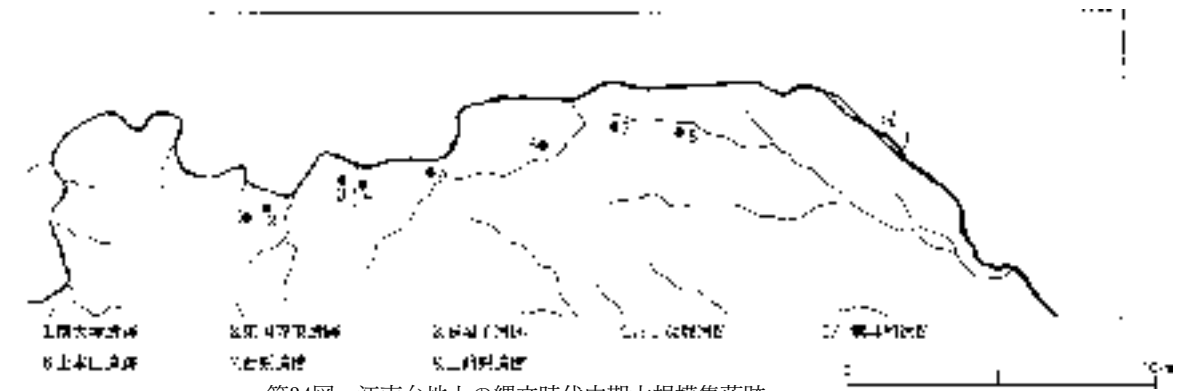
今回、本遺跡で確認された住居跡は、加曾利E式後半に属するものであることから、距離的にも約2.2kmと近い、西原遺跡の出土遺物との比較検討をおこなってみたい。

西原遺跡

第35・36図に、本地域における加曾利E式期後半の様相を良く現していると考えられる、西原遺跡の13軒の住居跡出土土器を挙げて検討してみたい。

加曾利E3式

1～31は、加曾利E3式期の範囲に納まる土器群である。
1～3は、第3号住居跡。1は、炉体土器。頸部に円形竹管による刺突を加えた隆帯を貼付している曾利系の土器。小形化しているが、いわゆる重弧文タイプの終末段階のものである。2は、炉脇の床面直上から出土した連弧文土器。3は埋甕で、胴部に磨消



第34図 江南台地上の縄文時代中期大規模集落跡

の懸垂文が認められる加曾利E式土器である。曾利系の土器・連弧文土器・キャリパー形を呈し口縁部文様帯をもつ典型的な加曾利E3式の共伴事例である。

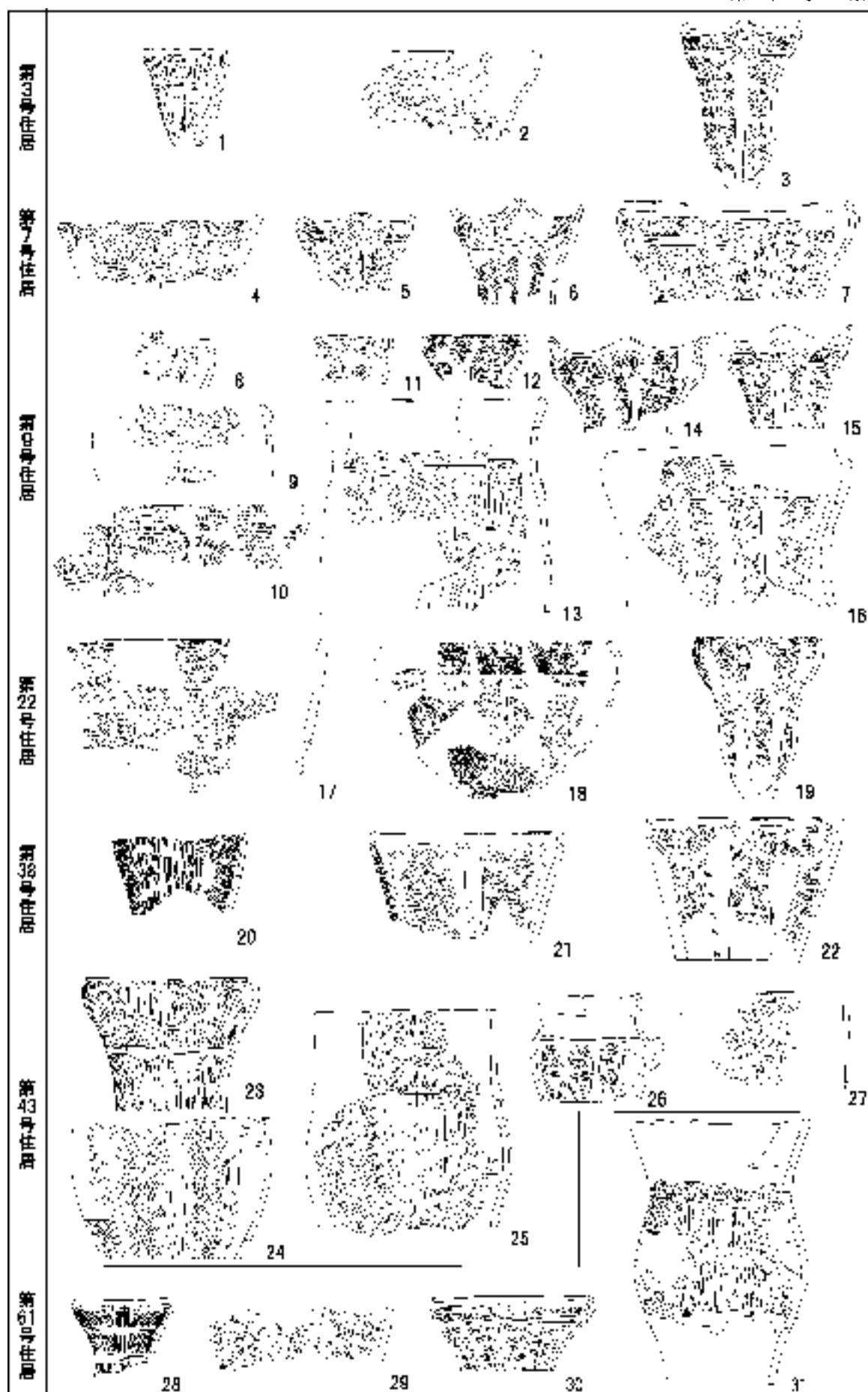
4～7は、第7号住居跡。7が炉体土器で、4～6は覆土。4は口縁部と胴部下半を接合帯でカットされており、被熱も認められることから、他の住居で炉体土器として使用されていたものが、5・6と共に本住居の廃絶後に廃棄されたものと推測される。したがって、7→4・5・6へと時間差がある。7は平縁で、口縁部が円文と楕円文によって構成される。5・6は、波状口縁を呈し、波頂部下に連結する渦巻文を配しており、楕円区画文も2単位が沈線で連結している。5の胴部には、2条の沈線懸垂文間に楕円区画が縦位に施文されており、大木9式の影響が認められる。5～7は、加曾利E3式に属するが、層位的にも文様の上からも、5・6の土器が新しい様相を示している。4は、キャリパー形を呈するものと推測され、胴部に隆帯の貼付による大型の渦巻文を施文している。いわゆる梶山タイプ^(註2)の土器と、口縁部文様帯をもつ加曾利E3式土器の共伴事例である。

8～16は、第9号住居跡。15は埋甕、その他は覆土中よりの出土である。15は、波状口縁・キャリパー形を呈し、口縁部には隆帯で渦巻文と楕円文を配している。胴部には、縄文施文部に蕨手状の蛇行沈線が垂下している。これに対し覆土中より出土した同タイプの14は、口縁部の円文と楕円文が連結しており、胴部の磨消懸垂文の幅も広く不規則にとられている。16は平縁であるが、口縁部の楕円文はかなり崩れたモチーフとなっている。11も同様に、口縁部文様の沈線がかなり崩れている。8・9は大木系の土器。球胴状に膨らむ胴部破片。8は沈線で、9は平らな隆帯で渦巻文を描出している、大木9式である。10は見慣れない土器である。楕円状の沈線モチーフの中に雨垂状の列点を充填している。12は、吉井城山タイプ^(註3)。口縁部の弧状沈線間に、下からの懸垂文が貫入し、弧状のモチーフが単位化し、「Y」字状の磨消懸垂文化している。13は、胴部隆帯文系とされる将監塚タイプ^(註4)の土器。大木9式・吉井城山タイプ・将監塚タイプ・口縁部文様帯をもつ加曾利E3式土器の共伴事例である。

17～19は、第22号住居跡。17は、曾利系の土器。胴部には、刻みの加えられた垂下する隆帯区画内に、篋描き沈線による綾杉文が充填されるのが特徴で、千曲川中上流域に分布する仮称郷土式^(註5)とされるタイプの土器の影響が認められる。18は、鉢形土器。加曾利E系か。19は埋甕で、キャリパー形を呈する、吉井城山タイプの土器。胴部の逆「U」字状の懸垂文は、口縁部の波状沈線間には貫入していない。曾利系（郷土式）と加曾利E系の鉢、吉井城山タイプの共伴事例である。

20～22は、第38号住居跡。20が炉体土器で、21が伏甕、22が埋甕である。20は口縁部と胴部下半を欠損する。櫛歯状工具による縦位の条線が施文されている。曾利系の土器。21は、口縁部文様帯を欠く、一段懸垂文タイプの土器。22は、口縁部に太い沈線で楕円文が施文されている。口縁部文様帯を持つタイプと持たないタイプの加曾利E式土器と、曾利系の土器の共伴事例である。

23～27は、第43号住居跡。23は埋甕。24～26は炉体土器。23は、口縁部には2条の波状沈線が巡り、沈線間は地文の条線は磨り消されている。頸部には2条沈線が施文され、



第35图 西原遺跡出土土器(1)

胴部には逆「U」字状の沈線が垂下する。キャリパー形を呈し、連弧文土器と吉井城山タイプの折衷的な土器である。24は、逆「U」字状を呈する懸垂区画の中に綾杉状沈線を充填している。17の土器と同様に、千曲川中上流域に分布する郷土式とされるタイプの土器の影響が認められる。25は、曾利系の重弧文土器の最終段階の土器。26は、加曾利E 3式の両耳壺。連弧文土器（吉井城山タイプ）・曾利系土器（郷土・重弧文）・加曾利E 3式土器の共伴事例である。

28～31は第61号住居跡。28は埋甕。31は炉脇の床面から出土。30は接合帯できれいにカットされており、転用品の可能性もある。28は、連弧モチーフは施文されていないものの、明らかに連弧文土器である。29は、垂下する沈線間に矢羽根状沈線を充填している。東京西部から神奈川にかけて分布する、曾利式と加曾利E式の折衷タイプ^(註6)とされる土器である。30は、口縁部文様帯を持つ、キャリパー形を呈する加曾利E 3式土器。31は、将監塚タイプの土器。連弧文土器と将監塚タイプの土器は共伴し、加曾利E式と曾利式の折衷土器と加曾利E 3式土器は時間差が考えられる。

加曾利E 4式

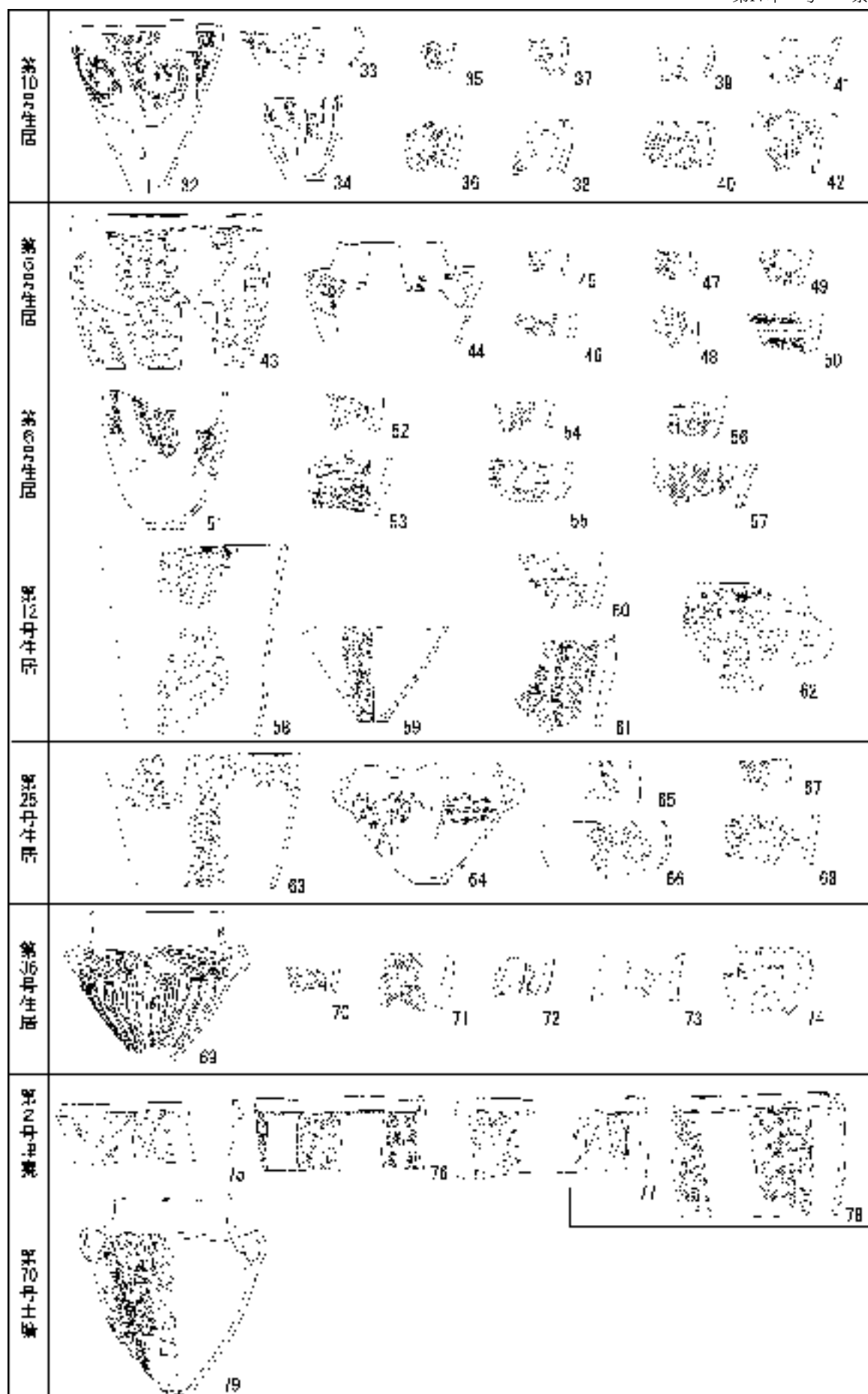
32～79は、加曾利E 4式期の範囲に納まる土器群である。

32～42は、第10号住居跡。報告書刊行時点では、32の炉体土器から加曾利E 4式期直前と判断したが、加曾利E 4式期と訂正したい。32は、口縁部上端に沈線で区画した幅狭い無文帯をもち、胴部上半に沈線で渦巻き状の「J」字文を5単位施文している。胴部下半は無文となる。底部からほぼ直線的に広がり、口縁部がやや内湾する。底部が小型化していることが特徴である。キャリパー形を呈し、胴部上半に「J」字文・胴部下半に逆「U」字状の沈線を施文する例は本期に見られるが、器形・文様構成ともあまり類例の少ない土器である。類例として、宮城県長根貝塚第1号住居跡出土遺物が挙げられる(第37図1、宮城県教育委員会：1969)。大木10式に比定されるもので、口縁部下に1条の沈線を巡らせ、地文の縄文をネガ・ポジ反転させると、まさに第36図32の土器になる。大木式土器の影響下で、口縁部無文帯を設け、ネガ・ポジ反転して在地化した土器と理解される。

33は、内湾する波状口縁が無文帯となり、波頂部に合わせるように胴部に大振りの渦巻き沈線が施文されている。36も同様の文様構成をとるものと思われる。38は、断面三角形の隆帯を短冊状に貼付している。41は波頂部下に渦巻文が施文されている。42は上下逆か。胴部上半の波状沈線間に、胴部下半から鋭角な逆「U」字状懸垂文が施文されている。

43～50は、第5号住居跡。43は床面直上から出土している他は、覆土中よりの出土である。43は、断面三角形の隆帯を短冊形に貼付している。西関東地方に主体的に分布する典型的な加曾利E 4式土器である。44は両耳壺。45～50は破片資料で、全体の文様モチーフがはっきりしない。45・46は吉井城山タイプの可能性がある。50は、微隆起状の隆帯が、口縁部に幅狭い無文帯をとり、タガ状に貼付されている。

51～57は、第6号住居跡。51は埋甕で、他の破片は覆土中より出土している。51のモチーフは不明であるが、断面三角形の隆帯区画に、縄文を施文している。52は、沈線で抱球状のモチーフをとるものと推測される。53は、波状口縁を呈している。口縁部に幅



第36図 西原遺跡出土土器(2)

狭い無文帯をとり、微隆起伏の隆帯を2条タガ状に巡らせ、磨消帯を伴う沈線を垂下させている。54は、吉井城山タイプと推測される。55は、弧状に垂下する隆帯が、口縁部をタガ状に巡る隆帯に貫入している。56・57は微隆起伏隆帯が短冊状に貼り付けられている。

58～62は、第12号住居跡。59は埋甕、その他の破片は覆土中の出土である。58は、タガ状に巡る沈線で区画された幅狭い口縁部無文帯をとり、以下胴部は縄文のみ施文される。胴部下半では縄文が羽状施文されている。60は、微隆起伏の隆帯が、口縁部に幅狭い無文帯をとり、タガ状に貼付されている。61は、文様モチーフは不明であるが、沈線間の縄文地文が磨消されている。62は、両耳壺。把手の両脇に、微隆起伏の隆帯が円く貼付されている。

63～68は第25号住居跡。64の両耳壺は埋甕。他の破片は、覆土中よりの出土である。63は、口縁部下に幅狭い無文帯をとり、断面三角形の微隆起伏の隆帯をタガ状に貼付している。胴部には横位の縄文が施文されている。68は、断面三角形の微隆起伏が垂下している。短冊状のモチーフをとるものと推定される。66は、内彎する口縁部に1条の沈線を巡らせ、幅狭い無文帯とし、沈線間を磨り消した逆「U」字状のモチーフを施文している。口縁部の無文帯が突起する箇所に対応して、逆「U」字状の頂点が接している。

69～74は、第36号住居跡。報告書では、69の両耳壺の埋甕から加曾利E3式と判断したが、E4式と訂正。肩部に巻ききらない円文と楕円文を配す。胴部以下は櫛歯状工具による波状沈線が施文されている。70・71は波状の沈線が施文されるが、全体のモチーフは不明。72～74は断面三角形の微隆起伏を貼付し、隆帯間の地文の縄文を磨消している。梶山タイプの土器。

75～78は第2号埋甕。4個体分の破片を重ねて埋甕としたもの。いわゆる岩坪タイプ^(註7)に近い平縁の75と、短冊状懸垂文タイプの共伴事例である。76の隆帯上にも縄文が施文されている。

79は、土壌に埋設されていた両耳壺。肩部に巡る隆帯上にも縄文が施文されており、肩部以下が長胴化している。

加曾利E3式期の様相

西原遺跡にける加曾利E3式期の様相は、加曾利E式系の土器（口縁部文様帯を持ちキャリパー形を呈する典型タイプ・口縁部文様帯を切断したタイプ・吉井城山タイプ・梶山タイプ・将監塚タイプ）に他型式として連弧文土器・曾利系の土器（重弧文タイプ・郷土式類似タイプ）・大木系の土器が伴出し、地文・文様構成に曾利・大木式の影響を認めることができる。

加曾利E4式期

これに対し、加曾利E4式期は、E3式期の様相と比較すると、まず、僅かに文様構成・施文法に大木系・曾利系土器の影響が認められるものの、伴出遺物として他系統の土器型式が認められない事が指摘できる。連弧文土器はこの段階には消滅し、加曾利E式土器においても、口縁部文様帯をもつタイプの土器は出土していない。口縁部に、幅狭い無文帯をもつ加曾利E式系の土器が大勢を占めている。短冊形の懸垂文モチーフをもつものが多く、吉井城山タイプ・梶山タイプの土器・「J」字または渦巻きモチーフの土器・両耳壺等が出土している。

また、本段階においては、未だ後期称名寺式土器の伴出を見ない。したがって、当然本段階は中期最終末の土器群（加曾利E 4 式）であると認識される。山内清男氏が指摘した、「最も新しい部分」の加曾利E 式である（山内：1940）。現在の埼玉県の記事団編年では、加曾利E III 式期に比定されるのであろうか。

そして本段階には、いわゆる「西日本系の中期末葉土器群」（柳澤：1999a.b）の伴出も確認されないことから、加曾利E 4 式期でも前半段階に属することが指摘される。

上前原遺跡

以上が西原遺跡における加曾利E 3 ～ 4 式期の様相である。では次に本遺跡の第 2 ・ 3 号住居跡出土遺物を検討してみたい。

第 2 号住居跡出土遺物は、炉体土器（第10図 1）と覆土に廃棄された土器で構成される。炉体土器は口縁部を欠くが、胴部上半に渦巻文を 5 単位施文し、胴部下半は無文となっている。破片資料であるが、西原遺跡第12号住居跡（61）の土器や、キャリパー形を呈するが西原遺跡第10号住居跡（33）に類似する資料である。器形・文様構成は、西原遺跡第10号住居跡（32）に類似している。本資料や西原遺跡第10号住居跡例（32）の、底部から直線的に広がり、口縁部がやや内彎する器形は、西原遺跡第25号住居跡（63）の土器の器形に類似するが、この時期の加曾利E 式土器には一般的ではない。類例では、埼玉県名細下小坂遺跡出土土器（第37図 2）、千葉県西広貝塚（第37図 4 ・ 5、市原市教育委員会：1977）、栃木県槻沢遺跡 SI11（第37図 3、栃木県教育委員会：1996）等で出土している。大木式のアルファベット文が在地化したものと推測される。槻沢遺跡例は加曾利E 4 式＝大木10式期に比定されており、本例も該期に比定されるものと考えられる。また、覆土中からも、他型式の伴出は確認されないことから、覆土中の遺物に関しても加曾利E 4 式期に比定されるものと考えられる。

第 3 号住居跡出土遺物は、大木 9 式の可能性のある床面直上の土器（第16図64）と覆土に廃棄された土器で構成される。覆土中の土器は、口縁部下に細い棒状工具による刺突列を加えるタイプ（第12図 1 ～ 4、第14図44）・梶山タイプの土器（第13図36～43・第14図46）・岩坪タイプの土器（第13図35・49）・両耳壺（第14図45・47・55）・吉井城山タイプの土器（第12図15・20・23、第13図28、第15図51～53・58）・鉢形土器（第14図48・第15図60）・隆帯で短冊形の懸垂文を施文するタイプ（第15図57・59、第16図65）である。他型式の伴出は認められない。床面直上の土器は加曾利E 3 式＝大木 9 式期、覆土中の遺物は加曾利E 4 式期に比定される。

今後の課題

以上が、本遺跡・西原遺跡における加曾利E 式期後半の様相である。本稿では触れないが、江南台地上の他の集落遺跡（第34図）においても、概ねこれらの様相は一致した傾向として把握される。この非常に限られた地域に限定される土器群の様相が、どこまで広域的に敷衍できるものか現在のところ明確にできていない。逆に異なる様相が現れる地域を確認できれば本地域における特徴としてのまとまりを認めることが可能となるはずである。

現在の埼玉県における加曾利E 式後半の編年は、他地域に比べて混乱の度合いが大きい。このような状況の中では、ある限定された地域における様相の見極めによる基本的な事例の積み重ねと、各地域間における比較検討が必要であると思われる。

また、該期の型式細分を究極まで進めている柳沢清一氏の提唱する、加曾利E 3—4式（中間式）に関する一連の研究（柳沢：1991・1992・1997・1999a.b）も避けて通れない問題である。

今後、江南台地上に分布する大規模集落間の関係、土器の様相を比較検討し、江南台地という狭いながらも地理的に共通する立地条件で成立した集落間の土器群の様相を検討し、北関東における諸地域の土器群との比較を進めて行きたいと考える。

- 注1 山内清男氏設定の加曾利E式土器の細別呼称に拠る。
- 注2 梶山タイプ—胴部に隆帯による大柄な渦巻き文が描かれるもの。梶山遺跡で初めて注目された土器（神沢：1970）で、大木式の影響下で成立。主体となる時期は加曾利E 3～4式期とされる（谷井：2003）。
- 注3 吉井城山タイプ—胴部上半に波状沈線、胴部下半に逆「U」字状懸垂文を施文する土器。胴部中に括れ部がくる器形を呈する。吉井城山貝塚で初めて注目された土器（岡本：1963）。主体となる時期は、加曾利E 3式期。
- 注4 将監塚タイプ—埼玉県本庄市（旧児玉町）将監塚・古井戸遺跡（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団：1986、1989）で初めて注目された土器。幅広無文口縁部をもち、胴部に大振りの渦巻き隆帯を貼付する土器。埼玉県北部から群馬県南部をへて千曲川水系にかけて分布する。主体となる時期は加曾利E 3式期。
- 注5 仮称郷土式—佐久地方を主体に分布する、唐草文と加曾利E式土器の折衷タイプとされる（桜井：2000、綿田：2003）。鱗状単沈線を最大のメルクマールとする。一型式として成立するかは、今後の研究課題。主体となる時期は、加曾利E 3～4式期。
- 注6 折衷土器—加曾利E式の文様構成に曾利式の地文（櫛歯状工具による条線・矢羽根状沈線）をもつタイプの土器。主体となる時期は加曾利E 3式期。東京都西部から神奈川県にかけての両型式の分布が重なる地域での出土が確認されている。
- 注7 岩坪タイプ—茨城県岩坪貝塚出土例（杉山：1965）を典型とする。口縁部無文帯に貫入するように逆「U」字状磨消懸垂文が施文される。吉井城山タイプからの変遷が想定される。主体となる時期は加曾利E 4式期。



第37図 参考資料

第Ⅴ章 調査のまとめ

縄文時代

縄文時代の住居跡は、今回中期加曾利E式期後半の住居跡が2軒検出されている。第1次調査では中期後半の住居跡が1軒、第3次調査では、加曾利E1式期の住居跡が2軒検出されている。その分布範囲は、250×150m程であり、かなり広範囲にわたる。いずれの調査地点も、包含層土遺物の数に比べ、住居の分布は密ではなく、集落の端部である可能性が高い。第3次調査では、密集した集石土壌が50基余確認されており、勝坂式期の土壌も確認されていることから、本集落が勝坂式期後半から加曾利E式期後半にかけて営まれた大規模な拠点集落である可能性は高い。今後の集落構造の把握が待たれるところである。

土器については、第Ⅳ章の考察で触れているが、加曾利E式土器編年は混沌としており、本書では、本遺跡出土土器を大枠としての中期後半に位置付けた。本地域においては、基本的な認識に立てば、該期はそれほど複雑な様相は呈しておらず、今後、広域編年を視野に入れた、周辺地域との比較検討を進めることを課題としたい。

古墳時代

今回調査した第3号墳は、周溝内で直径17.6mを測り、石室平面は胴張り形を呈し、石材は河原石を使用している。江南台地上の終末期古墳においては、典型的な中規模の円墳と見なすことができる。石室内よりの土器の出土は無く、前溝状前庭部と墳丘上に土師器短頸壺と須恵器の大甕が出土している。須恵器大甕片の墳丘上からの出土は、墳頂部における儀礼行為が行われた可能性を示唆しており、北武蔵・上野地域の後期～終末期の小円墳では比較的良く見られる行為である。

本古墳群に残る第1・2号墳は、ともに小型の円墳である。江南台地上の古墳は、その墳丘規模により石室石材の採用に基準が存在することが想定されており、両古墳とも河原石積の石室と推定される。凝灰岩截石を採用した、直径20m以上の主墳クラス古墳は、現在本古墳群中には確認できない。古墳の分布面積のわりには、その分布は非常に散漫であり、開墾等で既に消滅してしまっている古墳も多数あることが推定される。凝灰岩截石を採用した古墳の有無および消滅してしまった可能性のある古墳の確認は、本古墳群の性格を考察する上で重要であり、その確認は今後の課題である。

まとめ

第1次調査面積は、500m²、今回の第2次調査面積は250m²、第3次調査面積は700m²であり、遺跡の総面積約105,000m²の1.3%を調査したに過ぎない。この1.3%の調査結果から、本遺跡の性格を判断するのは早急過ぎるくらいがあるものの、縄文時代中期後半の大規模集落跡と終末期古墳群の存在は十分に予想され、それらの概要の把握は今後の課題である。

以上簡単ではあるが、これまでの調査より得られた成果から今後の課題を挙げ、まとめとしたい。

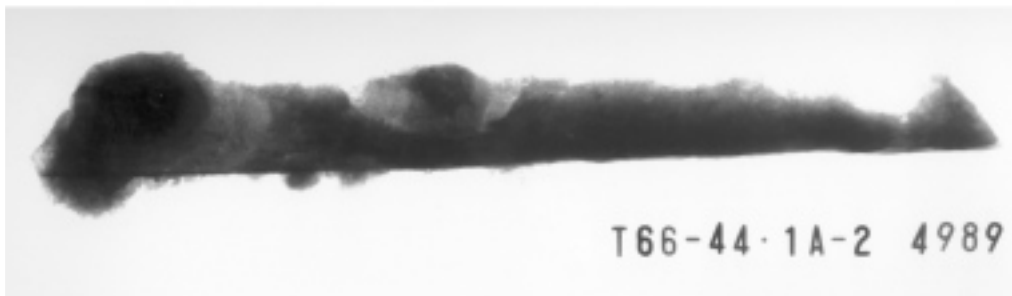
付編 鉄製大刀保存処理の概要

業 務 名	上前原遺跡出土大刀保存処理委託業務
委 託 期 間	平成15年11月 1 日～平成16年 3 月20日
委 託 者	江南町 埼玉県大里郡江南町中央 1－1
受 託 者	株式会社 京都科学 東京支店 東京都文京区小石川 5－20－4
業務の概要	上前原遺跡出土大刀 1 点の保存処理
処 理 内 容	1．現状写真撮影－35mmネガカラー 2．X線撮影 3．第 1 次銹取－精密噴射加工機・グラインダー使用 4．脱塩処理－NaOH0.1%水溶液（室温）を使用。 処理期間 平成16年 1 月 6 日～2 月16日 5．脱アルカリ処理・乾燥－イオン交換水で10回洗浄後、アルコール脱水 6．第 1 次樹脂含浸－30%NAD－10減圧含浸 7．第 1 次乾燥－室温にて 7 日、40℃にて 3 日、減圧乾燥 1 日 8．第 2 次銹取－精密噴射加工機・グラインダー使用 9．第 2 次樹脂含浸－30%NAD－10減圧含浸 10．第 2 次乾燥－室温にて 4 日、40℃にて 4 日。 11．第 3 次樹脂含浸－30%NAD－10減圧含浸 12．第 3 次乾燥－室温にて 2 日、40℃にて 3 日、減圧乾燥 1 日 13．接合－セメダインC・エポキシ系接着剤 14．整形・復元－セメダインC＋フェノールマイクロバルーン＋顔料・エポキシ樹脂 15．樹脂コート・補彩－20%NAD－10塗布、アクリル塗料にて補彩 16．光沢調整－10%NAD－10：ポリエチレン微粉末＝10：1 で調合したものを吹付け 17．処理後写真撮影－35mmネガカラー 18．保管環境調整－台座作成固定後、RP 剤封入し密閉
納 品 品 目	鉄製大刀 保存処理報告書 処理前写真 処理工程写真 処理後写真 X線写真

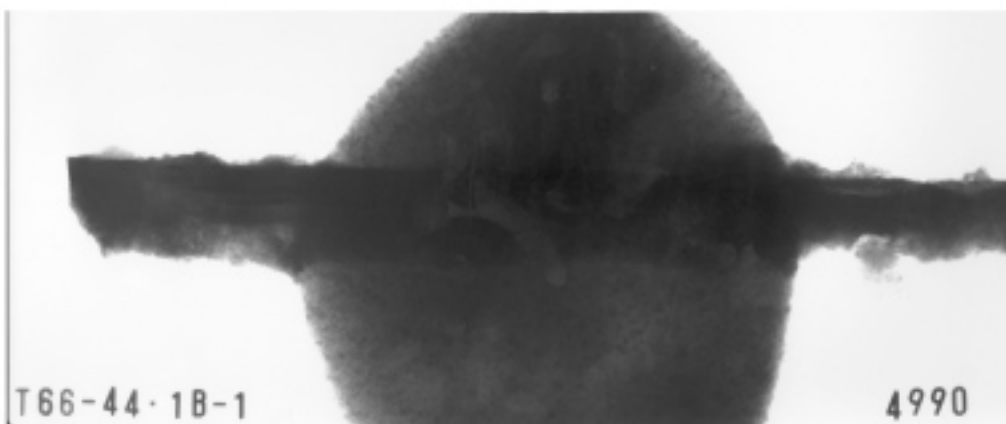
処理前X線写真



電圧 80kvp
電流 2mA
時間 1分
Film Fuji IX film #80
増感紙 LF0.03
距離 95cm



電圧 90/100kvp
電流 2mA
時間 1分
Film Fuji IX film #80
増感紙 LF0.03
距離 95cm



電圧 80kvp
電流 2mA
時間 1分
Film Fuji IX film #80
増感紙 LF0.03
距離 95cm



処理前現況
(全体)



処理前現況
(部分)



処理後
(部分)

引用・参考文献

- 市原市教育委員会 1977年 『西広貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告3
- 上野真由美 1999年 『宿北V遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第214集
- 上野真由美 2000年 『稲荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第239集
- 岡本 勇 1963年 「横須賀市吉井城山第1貝塚の土器」『横須賀市博物館研究報告』（人文科学）7
- 神奈川考古同人会 1978年 「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年表試案」『神奈川考古』第4号
- 神奈川考古同人会 1980年 「シンポジウム 縄文中期後半の諸問題」『神奈川考古』第11号
- 金子直行 1997年 『戸崎前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第187集
- 神沢勇一 1970年 『梶山遺跡（3）』神奈川県立博物館発掘調査報告書第4号
- 川本町遺跡調査会 2000年 『上本田遺跡Ⅰ』川本町遺跡調査会報告書第5集
- 江南町 1996年 『江南町史』資料編1 考古
- 江南村教育委員会 1982年 『塩前遺跡発掘調査報告書』江南村文化財調査報告第3集
- 江南村教育委員会 1984年 『江南村内遺跡群Ⅰ』
- 江南町教育委員会 1988年 『本田東台 上前原』江南町文化財調査報告第8集
- 江南町教育委員会 1989年 『塩西遺跡Ⅱ』江南町文化財調査報告第9集
- 江南町教育委員会 1996年 『丸山遺跡』江南町文化財調査報告第11集
- 江南町教育委員会 1999年 『塩古墳群 狸塚27号墳発掘調査報告書』江南町埋蔵文化財調査報告書第12集
- 江南町教育委員会 2005年 『立野古墳群発掘調査報告書』江南町埋蔵文化財発掘調査報告書第14集
- 江南町千代遺跡群発掘調査会 『千代遺跡群』—縄文時代編— 江南町千代遺跡群発掘調査報告書1
- 江南町千代遺跡群発掘調査会 『千代遺跡群』—弥生・古墳時代編— 江南町千代遺跡群発掘調査報告書2
- 小林達雄 他 1981年 「シンポジウム 北関東を中心とする縄文中期の諸問題」『日本考古学協会昭和56年度大会資料』
- 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986年 『将監塚—縄文時代—』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集
- 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989年 『古井戸—縄文時代—』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集
- 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993年 『四反歩遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第130集
- 桜井秀雄 他 2000年 「郷土遺跡」『上信越道自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19—小諸市内3—』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書52
- 縄文中期集落研究グループ他 1995年 『シンポジウム 縄文中期集落研究の新天地』
- 杉山荘平 1965年 「茨城県新治郡出島村岩坪貝塚調査概報」『史観』72
- 谷井 彪 他 1982年 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』1982 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 谷井 彪 2003年 「縄文時代中期終末と後期初頭の接点」『紀要』28 埼玉県立博物館
- 谷井 彪・細田 勝 1995年 「関東の大木式・東北の加曾利E式土器」『日本考古学』第2号 日本考古学協会
- 谷井 彪・細田 勝 1997年 「水窪遺跡の研究」『研究紀要』第13号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 栃木県教育委員会 1996年 『槻沢遺跡Ⅲ』栃木県埋蔵文化財調査報告第171集
- 橋本 勉 1991年 『向山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第106集
- 橋本 勉 1994年 『原山坊ノ在家遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第144集
- 橋本 勉 2004年 「加曾利EⅢ式土器の拡散とフィードバック」『研究紀要』第19号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 比企団体研究グループ 1991年 『地団研専報』38号「比企丘陵および岩殿丘陵の構造発達概観」
- 福島雅儀 2005年 「古代金属装大刀の年代」『考古学雑誌』第89巻第2号 日本考古学会
- 細田 勝 2003年 「南関東加曾利E式について」第16回縄文セミナー『中期後半の再検討』縄文セミナーの会
- 堀越正行 1972年 「加曾利EⅢ式土器研究史」（1）～（3）『信濃』第24巻第2号～4号 信濃史学会
- 宮城県教育委員会 1969年 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報—長根貝塚—』宮城県文化財調査報告書第十九集
- 綿田弘実 2003年 「長野県千曲川流域の縄文中期後葉土器群」『第16回 縄文セミナー 中期後半の再検討』縄文セミナーの会
- 立正大学熊谷校地内遺跡調査室 1990年 『遺跡調査室年報』「立正大学熊谷校地内遺跡の調査（5）」

- 立正大学古代文化研究会 1978年 「埼玉県大里郡江南村採集の先土器時代資料」『いにしえ』 2
- 宮崎朝雄・新井 端 1993年 「船川遺跡出土の縄文早期土器群について」『埼玉考古』 30
- 柳澤清一 1985年 「加曾利E式土器の細別と呼称」(前編)『古代』 80 早稲田大学考古学会
- 柳澤清一 1986年 「加曾利E式土器の細別と呼称」(中編)『古代』 82 早稲田大学考古学会
- 柳澤清一 1991年 「加曾利E 3－4 (中間)式考」『古代探叢』 3 早稲田大学出版部
- 柳澤清一 1992年 「加曾利E (新)式研究の現在」『古代』 94 早稲田大学考古学会
- 柳澤清一 1997年 「千葉県における加曾利E (新)式編年の検討」『東邦考古』 21
- 柳澤清一 1999a 年 「東京都における縄文中期末葉編年の検討」『古代』 106 早稲田大学考古学会
- 柳澤清一 1999b 年 「神奈川県における縄文中期末葉編年の検討」『古代』 107 早稲田大学考古学会
- 山内清男 1940年 「加曾利E式」『日本先史土器図譜』 IX 先史考古学会
- 柳田敏司 1962年 「踊る埴輪を出土した前方後円墳について」『埼玉研究』 第六号
- 寄居町遺跡調査会 1997年 『露梨子遺跡 (第2次調査)』 寄居町遺跡調査会
- 寄居町遺跡調査会 1998年 『むじな塚遺跡 (第5次調査)』 寄居町遺跡調査会報告第16集
- 寄居町遺跡調査会 2001年 『南大塚遺跡』 (第3次) 寄居町遺跡調査会報告第21集
- 寄居町教育委員会 1982年 『東国寺東・平倉遺跡』 寄居町文化財調査報告書第7集
- 寄居町教育委員会 1993年 『東国寺東・増善寺遺跡』 寄居町文化財調査報告第11集
- 寄居町教育委員会 1995年 『町内遺跡3』 寄居町文化財調査報告第14集
- 寄居町教育委員会 2002年 『露梨子遺跡 (第4次調査) 赤浜遺跡 (第2次調査)』 寄居町文化財調査報告第26集

写真図版



調査区垂直モザイク写真（2006年2月26日撮影）

図版 2



第3号住居跡



第3号住居跡
遺物出土状態



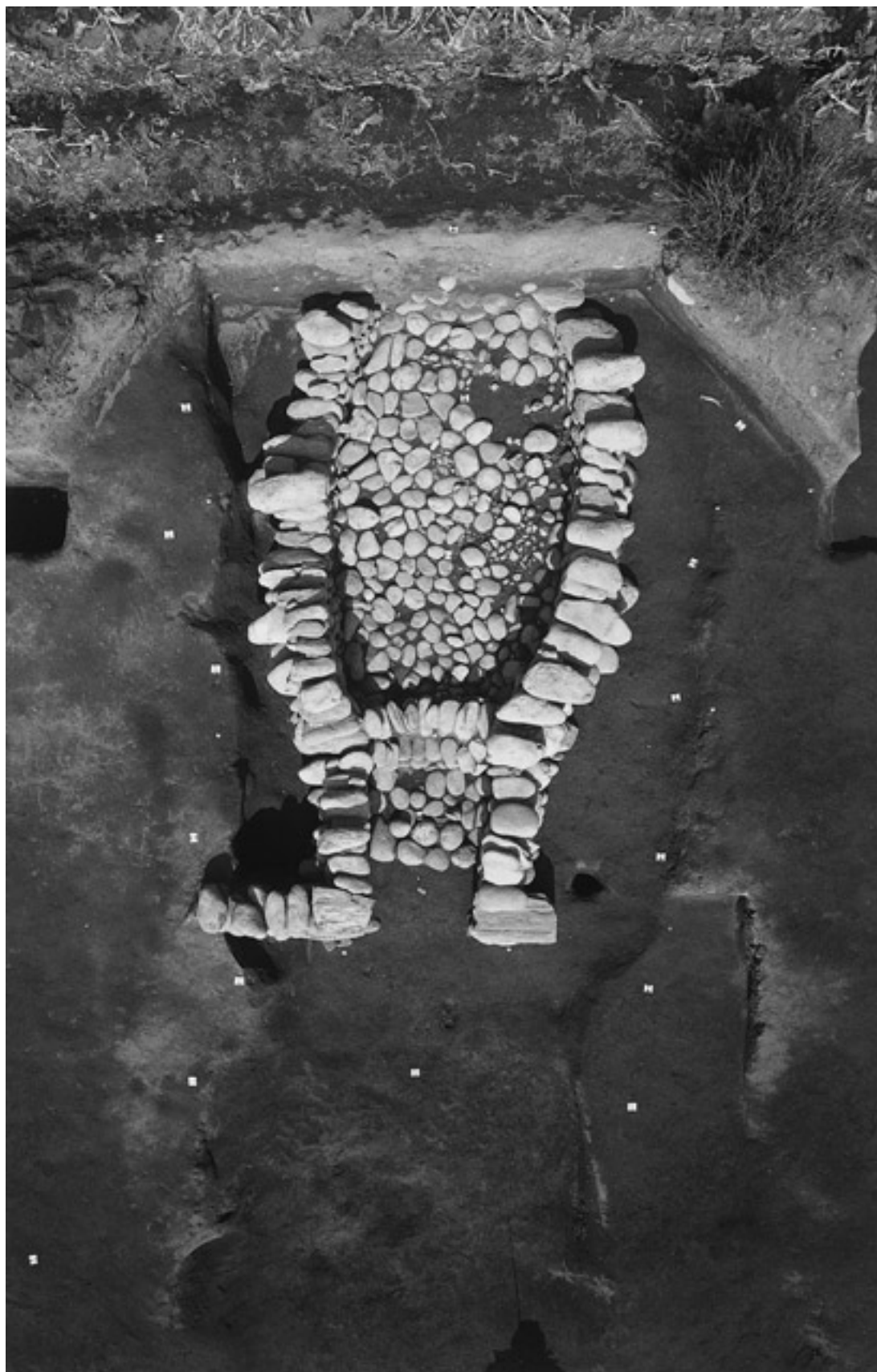
第2号住居跡炉



第3号墳・第3号住居跡



第3号墳



第3号墳石室垂直写真



第3号墳石室（北より）



第3号墳石室（南より）



第3号墳石室（南西より）



第3号墳石室（東より）



第3号墳石室（南西より）



第3号墳石室羨道部（東より）



第3号墳石室羨道部西側壁



第3号墳石室羨道部東側壁



第3号墳・第3号住居跡、第1号溝跡



第3号墳羨道部閉塞状態



第3号墳盛土セクション



第 3 号墳石室基底石



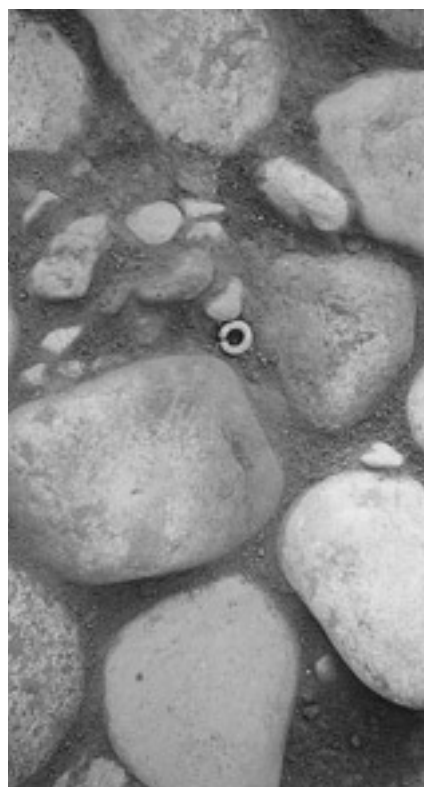
第 3 号墳石室羨道部基底石



第 3 号墳土器出土状态



第 3 号墳大刀出土状态



第 3 号墳耳環出土状态



第1号溝跡セクション



第1号溝跡・第2号住居跡



調査区調査風景



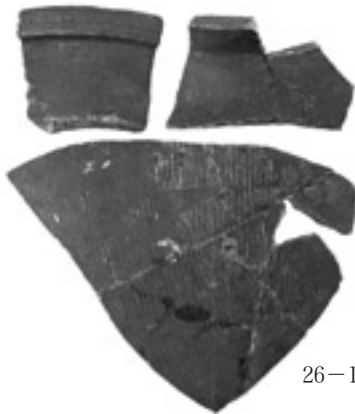
第3号墳石室調査風景



調査区調査風景



27-10



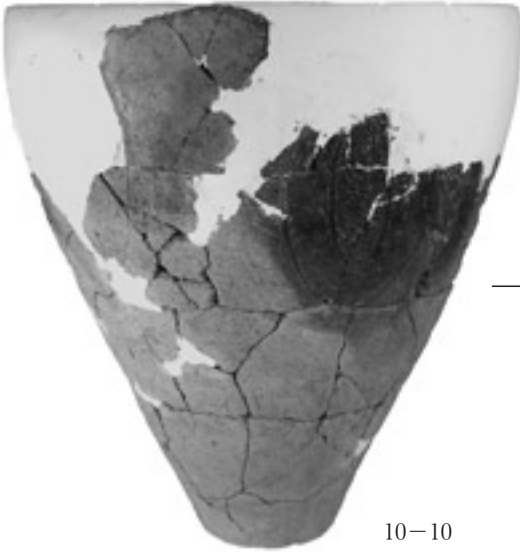
26-1



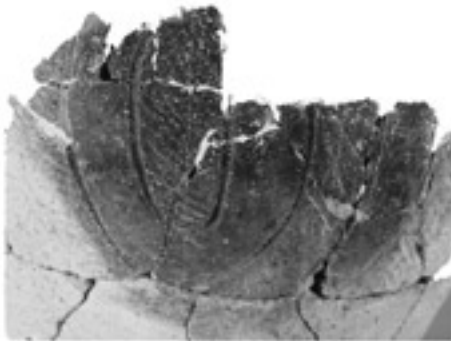
28-1

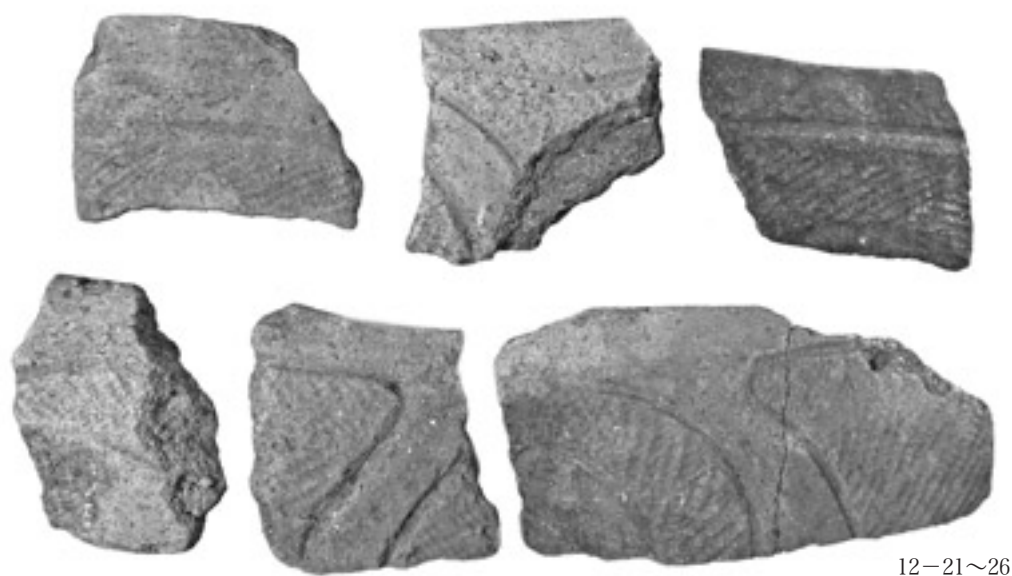
28-2

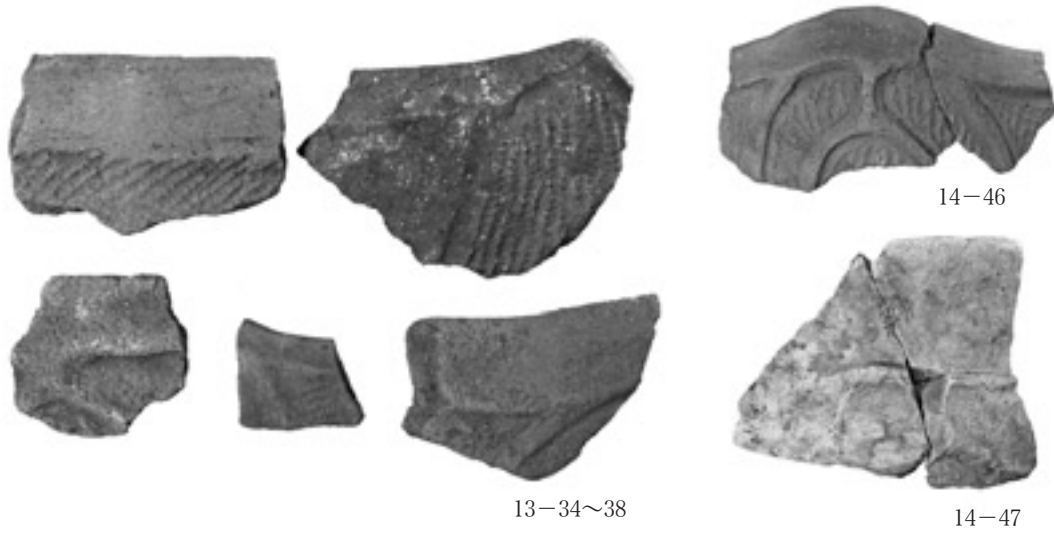
9-1~9

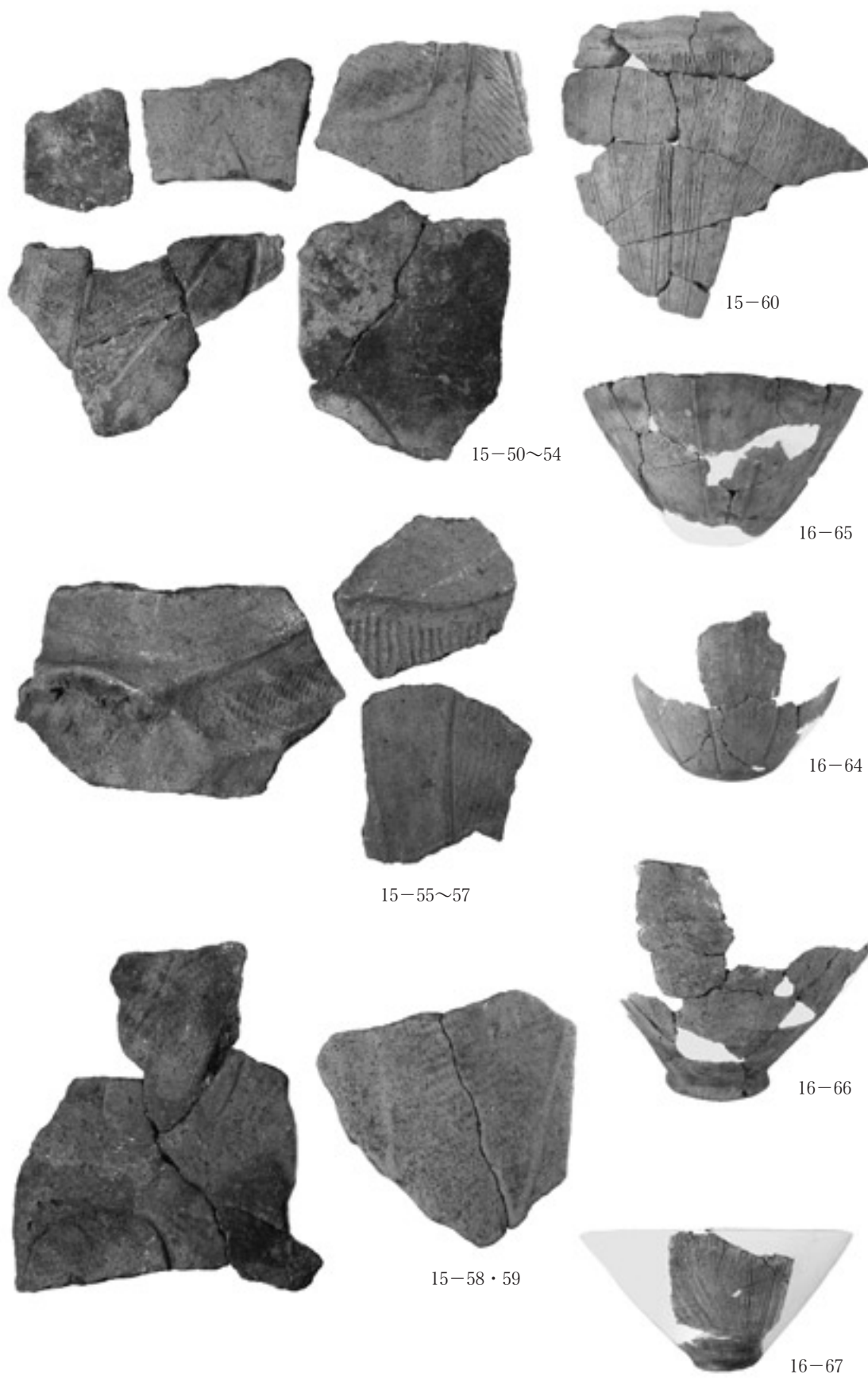


10-10



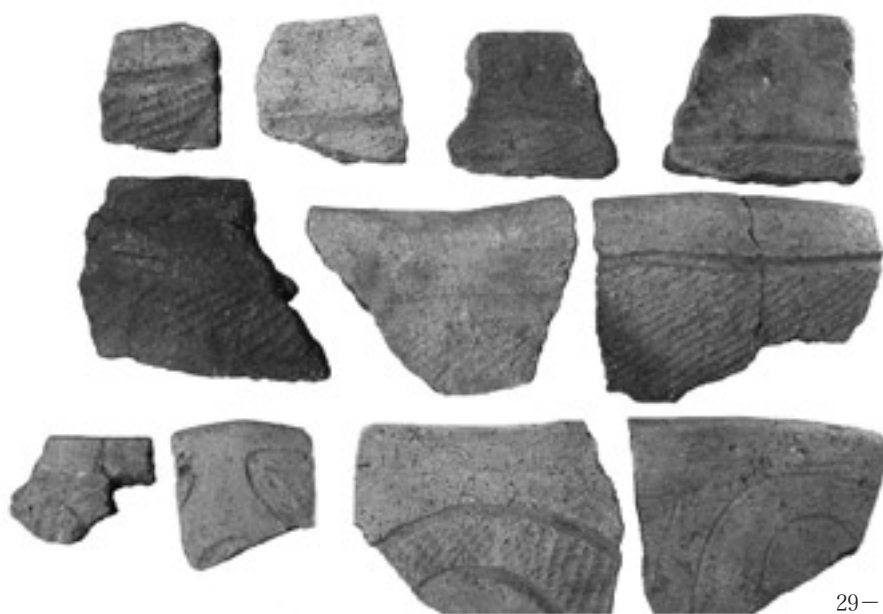








29-1~12



29-13~23



29-24~30



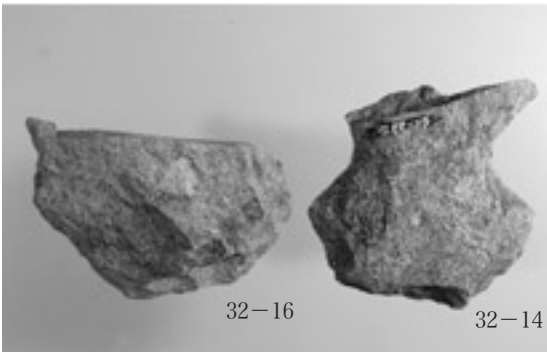
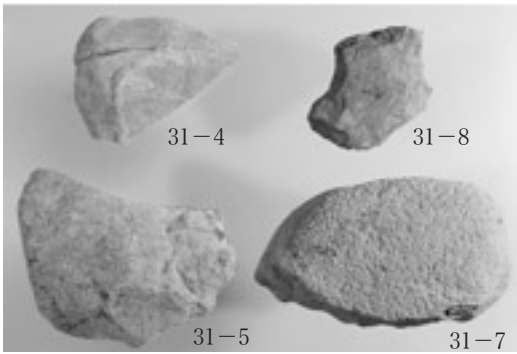
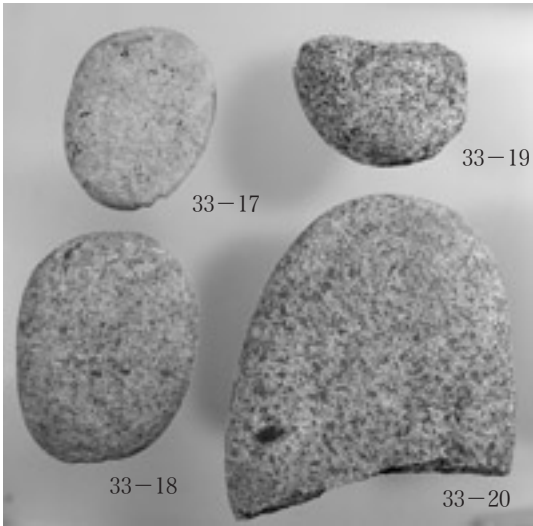
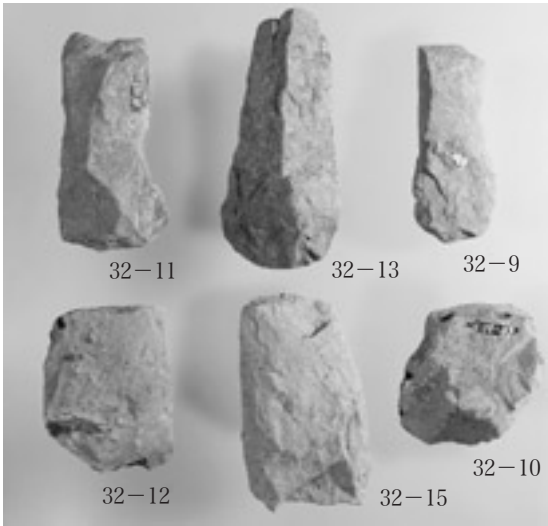
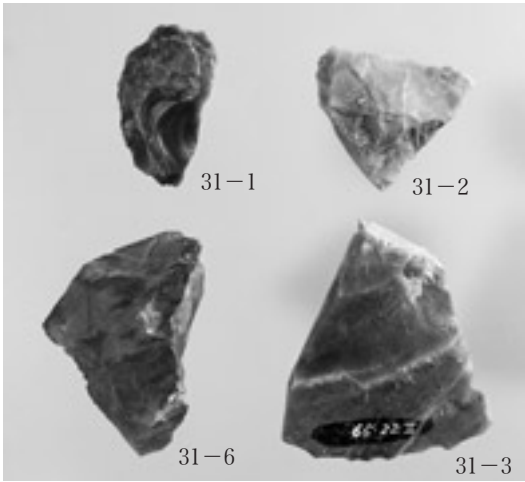
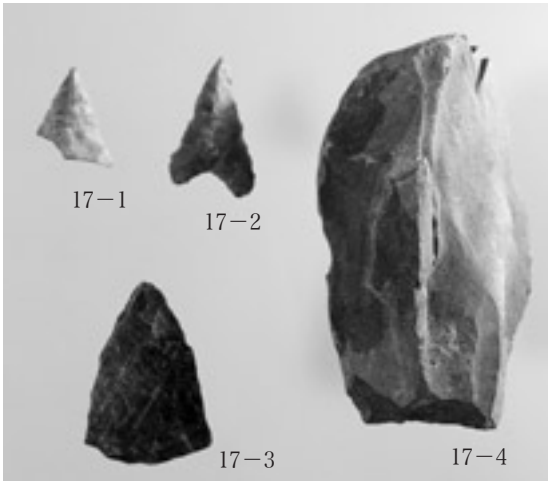
30-31~36

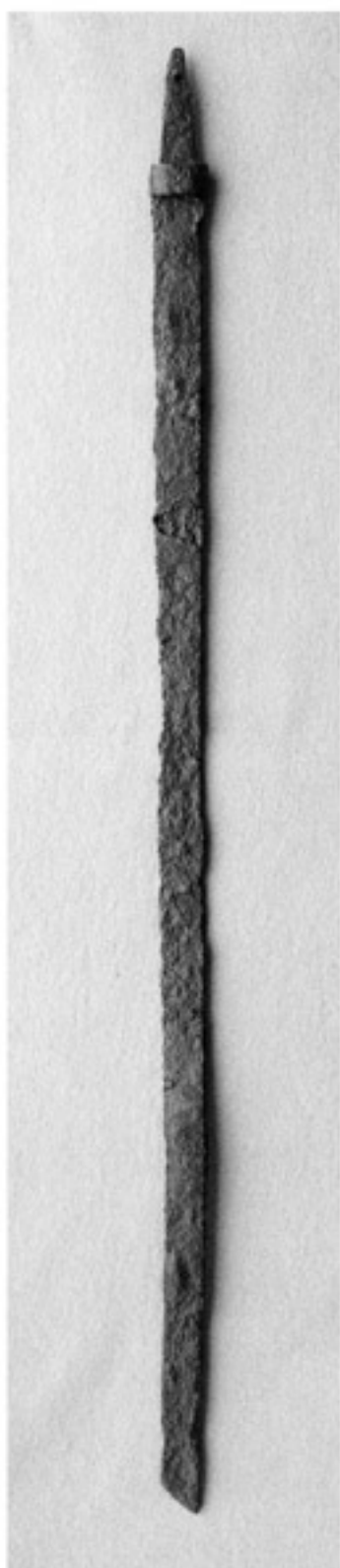


30-37~43



30-44~50





27-1



27-2



27-9



27-3



27-8



27-6



27-4



27-11



27-7



27-5

報告書抄録

フリガナ	カミマエハライセキダイ 2 ジハックツツチ ヲウサホウコクシヨ							
書 名	上前原遺跡第 2 次発掘調査報告書							
副 書 名								
シ リ ー ズ	江南町埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次	第15集							
編 著 者	森田安彦							
編 集 機 関	江南町教育委員会							
所 在 地	〒360-0192 埼玉県大里郡江南町中央 1 － 1							
発行年月日	2006（平成18）年 3 月22日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北 緯 。 ’ ”	東 経 。 ’ ”	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみまえはらいせき 上前原遺跡	さいたまけんおおさとぐんこうなんまち 埼玉県大里郡江南町 おおあぎせんだい 大字千代	11065	022	36°07'15" (世界測地系)	139°20'12" (世界測地系)	20030205) 20030305	250	個人住宅

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上前原遺跡	集落・古墳	縄文 古墳 中世	住居 2 古墳 1 溝 1	縄文土器・石器 古墳土師器・須恵器・ 鉄刀・鉄鏃・刀子・金 銅製耳環 中世磁器	

要約	今回の調査面積は、約250㎡で、調査区内からは、縄文時代中期後半の住居跡 2 軒と、古墳時代終末期の古墳 1 基、中世の溝跡 1 が確認されている。 縄文時代住居跡は、中期加曾利 E 式期に属するもので、拠点集落の西端部にあたるものと推測される。 古墳墳丘は耕作によりほとんどが削平されており、出土遺物は全体的に少ない。石室は、平面胴張型河原石積で、石室内より大刀 1 ・金銅製耳環 1 等が、前庭部より土師器の短頸壺 1 が出土している。
----	---

江南町埋蔵文化財発掘調査報告書 第15集

上前原遺跡第2次発掘調査報告書

平成18年3月20日 印刷

平成18年3月22日 発行

発 行 埼玉県大里郡江南町教育委員会

〒360-0192

埼玉県大里郡江南町中央1-1

TEL 048-536-1521

印 刷 朝日印刷工業株式会社